

付いては少からず助になつた。

ゲルンセイ生れではあるが元來コータントン家の出である舵手は其名をタンゲルイルと云つた。タンゲルイル家は古い貴族であつた。

これは確に本當であつた。海峡諸島は英吉利の様に貴族的な處であつた。其處には未だに色々な社會の階級がある。其等の階級はそれ／＼意義があつて、それが實際彼等を保護するのである。是等の階級の意義は何處でも同じであつて、ヘンドスタンでは獨逸の様に貴族の地位は劍に依つて得られ、労働して手を汚す事に依つて失はれるのであつて只怠惰に依つて維持するのである。何も爲ないと云ふ事は貴族的に暮すと云ふ事である、誰でも仕事を爲ない人が尊敬される。商賣は致命的である。佛蘭西では昔は硝子製造者の場合を除いては矢張り此通りであつた。瓶を空にする事が當時紳士の名譽の一つであつたから、それを造ると云ふ事は其の理由からして多分不名譽な事は思はれなかつたのであらう。海峡諸島では大英國の様に、貴族たらんと欲する者は金持になる工夫をしなければならぬ、労働者はとても紳士とはなる事は出来ない、若し彼が今迄労働者であつたならば彼は最早紳士ではない。其處の水夫等は多分バンネレット士爵の子孫であらうが然し今は只の水夫に過ぎない。三十年前フイリツプ、オウガスタスの爲に没収されたゴージの領土權の資格者であつた眞のゴージは海の中を裸足で若布を採取した。カルテレットはサークで荷車挽きをしてゐる。ウォーターロー侯爵の從弟でゲルンセイなりと主張するゲルンセイと云ふジェルセイで呉服屋を開き、ゲルンセイで靴屋を営んでゐる人がある。タータンスの監督僧正の古い記録にはタンゲルイルの領地は明かにセイヌ下流のタ

ンカーヴァイルから出たものであると云ふ事が載つてゐる、そしてそれはモントモランセイの事である。十五世紀にタンゲルイル主の勇敢なる射手であつたジョアン・ド・エルーデヴァイルは『彼の胸板とそして馬飾』を彼の後に残した。千三百七十一年五月ボントルソンでペルトラン・ド・ギユスクランの觀式兵があつた時にタンゲルイルは士爵としての待遇を受けた。ノルマン諸島では貴族が若し貧困に落入つたならば直に其階級から放逐されるのである。只發音が變つた丈である。タンゲルイルがタンゲイルになる、それ丈である。

これがデユートランド號の舵手の來歴であつた。

セント・ピーター港碇泊場にインゲルイルと云ふ古鐵商人があつたがそれは多分エングドヴァイルであらう。ルイ大王の時代にエンゲルヴァエル家がヴァロンヌ地方に三つの教區を持つてゐた。トリガと云ふ僧正がノルマンデイの教會史を著した。此編史者トリガンはデイゴヴァイル王領の牧師であつた。デイゴヴァイルの王様が若し一段下の階級に落魄したならば彼はデイグヴァイルと云はれたであらう。恐らくタンカーヴァイルでモントモレンシイたる此タンゲルイルは昔の貴族的な性格を持つてゐた、然し舵手としては大なる缺點を持つてゐた、彼は時々泥酔した。

シユウル・クリユバンは頑固に彼に酒を呑ませない様にした。彼は自分の行爲に付いてはメス・レナイエリーに對し責任を負ふた。

タンゲルイルは決して船を下りなかつた、彼は船の上に寝泊りした。

出發のタシユウル・クリユバンが夜遅く船を検査しに來た時此舵手は吊床の中に寝込んでゐた。

夜中にタングルイルは目を醒ました、それは彼の毎晩の癖であつた。泥酔者は皆其秘密の隠場所を持つてゐた。タングルイルもそれを持つてゐて彼はそれを倉と云つてゐた。タングルイルの秘密倉は船艙にあつた。彼は人から嗅付けられぬ様に其處に倉を置いたのであつた。彼は彼の隠場所を自分丈しか知つてゐないと確に思つてゐた。船長のクリュバンは眞面目な人であつたから嚴格であつた。彼は船長の注意深い目を掠める事の出来た小さなジン酒又はラム酒を船艙の此不思議な隅に隠して、そして殆んど毎晩こつそりと此酒を失敬してゐた。監督は嚴重であつた、御馳走は貧弱であつた、そしてタングルイルの毎晩過した分量は普通こつそりと二三杯やる事に限られてゐた。時々其の貯蔵が空つほになつた事もあつた。其晩タングルイルは其處で思掛けないブランデーの瓶を見付けた。彼は非常に喜んだ然し彼の驚きはそれ以上であつた。それは一體どの雲から落つこつたか？彼はそれが何故又如何して此船の中に持込まれたのか思ひ出せなかつた。然しながら間もなく皆んなそれを失敬してしまつた、——一つは注意深い動機から一つは其のブランデーが見付かつて取上げられはしないかと云ふ恐れからであつた。彼は其の瓶を海の中に投げ捨てた。朝彼が舵をとつた時にタングルイルの體は少しゆらくと動いてゐた。

然し彼は毎時の様に鮮かに舵を取つた。

クリュバンの方では讀者の知らるゝ如く彼はジャン・オーバルジュに泊りに行つた。

クリュバンは平常からシャツの下に皮の旅行帶を締めてゐた、其の中には豫備として二十ギニヤを入れてゐた、彼は夜丈此の帶を外づした。帶の内側には濃い石版刷用のインキで消えぬ様に自分で荒

い皮の上に書いた「クリュバン」と云ふ彼の名があつた。

丁度出發の間際に起上つて彼は、此の帶の中に七萬五千法の銀行手形の入つてゐる鐵の箱を押込んだ、さうして何時も彼がする様に其帶を身體に巻き締めた。

第三章 會話が邪魔された

デューランド號は堂々と出帆した。乗客は彼等の手提鞆や旅行鞆を腰掛の下に置くや否や直ちにさう云ふ場合には是非必要らしい御定りの船の検査をした。乗客の内の二人は——旅行者と巴里人——今迄蒸気船を見た事はなかつた、そして水掻車が回轉し初めた其の間から彼等は泡を見て感心しながら立つてゐた。それからこんどは不思議さうに煤煙を見て驚いた。そして彼等は上甲板と下甲板で一人宛つ小鏢、輪、鉤、ボルトの様なそれ等の船具の總てを検査した、それらはキツチリ正確に取り付けてあつて一つの大きな寶石——風雨の爲めにすつかり錆付いてゐた鐵の寶石——をなしてゐる。彼等は上甲板にある小さな信號砲の周りを歩いた。『獵犬の様に鎖で繋いである』と旅行者が云つた。『そして防水外套で風を引かぬ様に覆ひがしてある』と巴里人が云ひ足した。彼等が陸地を遠く離れた時何時もの様にセント・マローの景色を眺めた。一人の乗客は海路で或る場所に近づくと云ふ事は何時も虚偽であつて、例へば海岸から一リーグを離れた處からはダンキルク程オスタンドに似てゐるものはないと云ふ原理を定めた。彼は赤く塗つてある二つの浮燈臺の一つは「ルイティンゲン」と云ふ名であつて他の一つは「マルディック」であると云ふ話をして、ダンカークに關する話しの續きを終つた。

さうこうするうちにサン・マローは段々小さくなつて到頭視界を離れた。海の様は大變靜かであつた。海面に残る船の溝は白泡で縁どられた長い一條の線であつて目の届く限り眞直に跡を引いた。

佛蘭西のセント・マローから英吉利のエキセター迄一直線を引くとゲルンセイの島に觸れるだらう。海の上の直線は必ずしも本當の一直線ではない。蒸汽船は然しながら或る程度迄帆船の宜くせぬ直線航路を航行する力を持つてゐる。

海と風との協同は力の結合である。汽船は機械の結合である。其の力は無限の動力を有する機械である。機械は有限の動力を有する力である。吾々が航海と呼ぶ其の努力は是等の二つの組織の中間にあつて、其の一は無盡蔵のもので、他の一は發明なものである。

機械を動かす人間の智識は抵抗力を有する無限の動力を平均する。然しながら抵抗力にも又組織がある。其の元素は彼等の行く處や彼等の本體を知つてゐる。力は盲目である許りではない。是等の自然の原因に注意して、其の法則を發見するのが人間の役目である。

是等の法則が大部分まだ發見せられない一面に於て此の努力は繼續せられ、そして其努力に於て蒸氣の助けに依る航海は到る所、常に人類が其の熟練技術に依つて獲したる永久の勝利である。蒸氣航海の特徴はそれが船其のものを教育すると云ふ事である、即ちそれは風に對する船の服従を減じ、人間に對する其の從順を増すのである。

デューランド號は其の日程海で良く運轉された事はなかつた。彼女は不思議な程航進した。

十一時頃北北西の方向から清新な微風が吹き出した時に、デューランド號は船首を西に向け風を利用して右舷の帆を張り汽力を弱めてマンキール沖を航行してゐた。天候はまだ晴朗であつた。然しながらトロール船は海岸を指して歸路に就つてゐた。

どの船も心配して港に入るかの様に段々と海には船がなくなつた。デューランド號は平時の航路を進んでゐたとは云へなかつた。乗組員はそんな事には何等の注意を拂はなかつた。彼等は絶對的に船長を信頼してゐた、然し多分舵手の失錯のためだらうが少し許り航路を間違へてゐた。デューランド號はゲルンセイよりもジェルシーの方へ向つて進航してゐる様に見えた。十一時を少し許り過ぎた頃、船長は船の航路を訂正して船首を正しくゲルンセイの方へ向けた。僅か許り時間を損しただけである、然しながら、日の短い時に時間を損すると云ふ事は都合が悪いのである。それは二月の日であつた、然し太陽は赫々と照り耀いてゐた。

大分酔はらつてゐたタンゲルイルの腕は極く確かではなかつたし足取りも極く確つかりしてはゐなかつた。其結果この舵手は屢々躊躇いて船の進航を妨げた。

風は殆んど無くなつた。

望遠鏡を手にしたゲルンセイの旅客は時々それで遙か西の水平線に當つて風のために輕々と動いてゐる小さな灰色の霧の雲を見て居た。それは埃と一緒に飛散する羊毛に似てゐた。

船長のクリュバンは平常の通り嚴肅な、清教徒的な顔付をしてゐた。彼は益々警戒を加へた様であつた。

デューランド號の甲板では皆んなが平和の氣分に浸り嬉々として楽しんでゐた。船客達は面白さうに話し合つてゐた。眼を閉ぢて甲板の上で諸君の傍に取り交はされる會話を聞けば海の有様を判断する事が出来る。船客のスツカリ打ち寛いだ氣持と云ふものは完全なる海の靜穩に相應はしいのである。

例へば次の様な會話が非常に靜穩な海上以外で行はれんと云ふ事は有り得べからざる事である。

『あの綺麗な緑と赤の蠅を御覽なさい』

『それは海の上で失くなります、そして船に住んでゐるんですね』

『蠅は直ぐには疲れません』

『全く、彼奴等は軽いですから風に吹き運ばれるんです』

『蠅を一オンス秤けた後でそれを計算して見たら一寸と六千二百六十八匹ありました』

望遠鏡を手にしたゲルンセイの客がセント・マローの家畜商人の傍に行つた、そして彼等の話は斯んな風であつた。

『オーブラックの牡牛は丸い大きな尻、短い脚と黄ろい皮を持つてゐます。奴は足が短いので仕事
が鈍いですな』

『その點ではサラリーの方がオーブラックより優つて居ます』

『私は今迄綺麗な牛を二頭見ました。最初の奴は脚も短かく、胸は廣く、尻も太く、腰の邊りも大きく、それに首から尻迄可なりの長さで、目方も相當にあり、皮は剥ぎ易かつたのです。二番目の奴

はよく肥へて、胸のまわりも厚く、頸や肩も強く、色は褐色と白色で尻が瘦せて居た』

『それはコタンタンの種ですね』

『然うです、少しアングスカサツフォーク種が交つて居ます』

『あなたは然う思つて居らつしやるかも知れませんが、南部の方では確かに驢のやうに見えます』

『驢のやうですつて?』

『エ、確かに然うです。そして一番醜い恰好をして居るのが一番宜いのです』

『あ、それは驢も同じですよ。一番醜いのは一番良いものとせられるのです』

『全くです。ポアトヴァン牡馬でも横腹の大きいのと足の太つたのが良いのです』

『最上の驢は四本柱に樽をのせた様な恰好をして居ます』

『獸類の美しいのと人間の美しいのとは別物ですね』

『婦人は殊にさうです』

『全くですよ』

『私は美しい女が好きです』

『殊に私は立派に着飾つた女が好きです』

『然うです、綺麗にしてきちんとそして清潔にね』

『極く新しく見える様に。綺麗な娘は何時でも寶石になつた様に見える必要ありません』

『話は私の牡牛に歸りますが、私はトウアルの市場で其の二頭が賣物に出て居るのを見ました』

「トウアルの市場ですか、そりや私も宜く知つて居ます。ラロシエルのボンノースとマランの米穀商人パブスが其の市場に出て居ます、貴君は御承知かどうか知りませんが」

旅行家と巴里人は亞米利加人と聖書の事に付いて話合つて居た。此處でも亦次の様な會話が行はれた。

「文明國の持つて居る噸數をお話しませう。佛蘭西は七十一萬六千噸、獨逸は百萬噸、合衆國は五百萬噸、英吉利は五百五十萬噸、それに小さい船を加へると合計が千二百九十萬四千噸で隻數は十四萬五千隻で地球の海面の到る處に散布されて居ます」と旅行家が云つた。

亞米利加人が途中で語を入れた。

「五百五十萬噸を持つて居るのは合衆國ですよ」

「一寸お待ちなさい、貴君は亞米利加の御方ですか？」

「然うです」

「まあお待ちなさい」

話が途切れた。亞米利加の宣教師は聖書を配るのは今かどうかと考へて居た。

「貴君の御國の亞米利加では綽名を付ける事が大層流行つて居つて有名な人達には皆綽名が付けられ有名なミゾリーの上院議員の「ウマスベントンは「古い薄荷菓子」と云ふ名前を頂戴して居るさうです」と旅行家が尋ねた。

「然うです、吾々が丁度ザシャラー・ターラーを「年とつたザツチ」と云ふ様に」

「そしてハリソン將軍を「オートルド・ティツブ」と云ふんでせう？そしてジャクソン將軍を「オールド・ロツコリー」とね？」

「ジャクソン將軍はサハゲルミの木のように堅い人ですから。そしてハリソン將軍はティツベカノトで赤皮人を打ち敗かしたからです」

「妙な流行ですね、あなたの御國の流行は。」

「流行と云ふよりもそれは吾々の習慣なのです。吾々はヴァン・ブーレンを「小さい魔法使」と呼んで居ます、又小銀行紙幣を紹介したシユワードを「小ビリー」、イリノイス州から選出された共和黨出身の上院議員で、非常の雄辯家で又身長が僅か四呎のドダラスを「小さい巨人」と言つて居ます。チキサス州からメイン州へ行つしやると、キヤスさんと云ふ名前を御聞きになるかも知れません。世間では其の御方の事を「偉大なるミシガン人」と云ひます。又クレールと云ふ人の名を「製粉所の小僧」と云ひます。クレールは或る製粉所主の息子です」

「私ならクレールとかキヤスとか云ひますね。その方が簡単ですから」と巴里人が云つた。

「それぢや流行になりません。吾々は大蔵大臣のロルウインを「荷車挽の小僧」、ダニエル・ウエブスターを「黒いダン」と呼んで居ます。ウインフイノルド・スコットがチツベウエーで英軍を打ち敗かした後で最先に考へた事は、座はつて食事をすると云ふ事でした、だから吾々は彼の事を「急がしいスープレ」と呼んで居ます」

遠く見へて居た小さな白い霞が段々大きくなつて來た。それは水平線上十五度の圓缺を充たした。

それは吹き動かす風のないために海面を黒雲の様であつた。微風も殆んど全く止んだ。海面は鏡の様であつた。まだ午後ではなかつたが、太陽は青白くなつて居た。日は照つて居たが暖かさうには見えなかつた。

『御天氣が變る様な氣がします』と旅行家が云つた。

『多分雨でしょう』と巴里人が言つた。

『霧かも知れません』と亞米利加人が云つた。

『伊太利では、モルフエツタが雨の一番少ない所で、トルメツオが一番多く降る所です』と旅行家が話した。

正午になると、海峡諸島の習慣によつて食事の鐘が鳴つた。食べたい人が食事をした。二三の乗客は食物を持參して居た、そして後甲板で嬉しうに食事をして居た。クリユバンは食事をしなかつた。

食事の間にも會話が續けられた。

『貴君はこの海の事はよく御承知でしょう？』と人々が云つた。

『よく知つて居ます、私は此處のものです』

『彼もさつです』とセント・マローの人達の一人が云つた。

ゲルンセイの人は御辭儀をして話を續けた。

『今は幸に海が穏かです、マンキール沖に差しかゝつた時の霧は閉口です』

亞米利加人がそのセント・マローの人に言つた。

『島の人達は海岸の人達よりもよく海には慣れて居ます』

『全くです、吾々の様な海岸に住んで居るものは唯半分許り鹽水に浸つて居る様なものです』

『マンキールとは一體なんですか？』と亞米利加人が訊いた。

『そりや暗礁です』セント・マローの人が答へた。

『まだゲルレット岩があります』とゲルンセイ人が言つた。

『然うです！』と他の人が叫んだ。

『それからシユウアもある』とゲルンセイ人が附け加へた。

セント・マローの住民が笑つた。

『そんならサヴァー・ジユもあります』と彼が言つた。

『それから坊主岩がある』とゲルンセイ人が言つた。

『それから鴨岩もあります』セント・マローの人が云つた。

『それで皆んな説明しました』とゲルンセイの人が云つた。

旅行家が訊ねた。

『その岩のある場所を皆んな吾々が通らなければならぬのですか？』

「否え、それは南々東に通り返りました、それは吾々の後方にあるのです」
 としてゲルンセイの客が話を續けた、――

「大小の岩を集めるとグルレットには五十七峰あります」

「それからマンキールには四十八峰あります」と他の人が言つた。

對話は今ではゲルンセイの人とセント・マローの人との間に限られた。

「セント・マローの御方、あなたの仰しやらない三ヶの岩を私は思ひ出しました」

「私はみんな申しました」

「ラ・アレーからル・メートル・イル迄を？」

「然うです」

「それから、レ・メーゾンも？」

「然うです、マンキール岩礁の真中にある七つの岩でしょう」

「どうも貴君は宜く御存じですね、其岩を」

「それを知らなければ私はセント・マローの住人とは云へませんからね」

「佛蘭西人の理屈を聞くのは面白いです」

セント・マローの人は御辭儀をして言つた、――

「サヴァジュ礁と云ふのは三の岩です」。

「それから坊主岩は二つの岩です」。

「それから鴨岩は一つ」

「その鴨岩は勿論タツタ一つです」

「いええ、スアルドは四つの岩から出来て居ます」

「スアルドと云ふのはなんですか」とゲルンセイに住む人が訊ねた。

「あなたがシユウアと仰しやるのが吾々のスアルドなんですよ」

「シユウア岩と鴨岩との間にある妙な通路です」

「島の外通る事が出来ないのです」

「そして魚も」

「ヤツトです、荒天の日などでは彼等は岩壁にひどく打ちつけられるのです」

「マンキールの附近には砂洲がありますか」

「メーゾンの近くにありません」

「其處にはジェルセイから見える八つの岩があります」

「アゼットの磯濱から見えます、それが正しいのです、――然し八つではなく、七つだけです」。

「干潮の時はマンキールの附近を歩けます」

「全くです、砂州が水面に現はれてゐます」

「デイルイルとは如何でしょう？」

「デイルイルはマンキールには似てゐません」

『それは非常に危険な岩です』
 『それはグランヴァイルの近くにあります』
 『セントマローの御方は吾々と同様に此の海を帆走する事が御好きのですね』
 『然うです、が吾々の方は習慣です、あなたの方は道樂です、其處が違ひます』とセント・マローの人は答へた。

『あなたの方には立派な船乗がらましよう』

『私は家畜商です』

『セント・マロー生れの有名な船乗は誰でしたか』

『スールクトフ』

『他には？』

『ドウギー・トルーアンです』

茲處で巴里の商人が話の仲間に入つた、

『ドウギー・トルーアン？彼は英吉利人に捕へられました。彼は勇敢であつて又快活な男でした。若い英國の婦人が彼と戀に落ちたのです。彼を自由な身にしてやつたのはその女でした』

此の刹那、

『オイ、貴様酔ばらつてるな』

と怒鳴つた雷の如き聲が聞こゑた。

第四章 船長クリュバンが彼のあらゆる偉大なる手腕を發揮した

みんなが振り返つて見た。

それは船長が舵手に呼び掛けてゐた所であつた。

是は平時のシユウル・クリュバンの言葉の掛け様とは異つてゐた、そして彼が斯う云ふ具合に舵手に呼び掛けてゐるのは、彼が非常に怒つたか或は怒つた様に見へた證據であつた。

時機に投じた憤怒の爆發は屢々責任を他に轉ずるものである。

兩水掻車の間にある船橋に突つ立つた船長は舵手を睨付けた。

彼は『酔つばらい奴！』と口の中で繰返して言つた。不仕合せなタングルイルは頭を垂れた。

霧は段々深くなつてきた。この時は既に殆んど海面の半ばに満ちてゐた。それは同時に四方八方から押しかけてくる様に見へた。霧には水に擴がる一滴の油の如きものがある。それは不知不識の間に擴がつて行つた。軽い風が靜かにそろ／＼とそれを前方に吹き押した。漸々とそれが大海を占領した。眞向に北西の方から主として遣つて來た、船首の前に當つてそれは大きなボンヤリとして動いてゐる絶壁の線の様であつた。それは海上に壁の如く立つてゐた。廣い海が霧の裡に入つて見へなくなつた。精確とした地點があつた。

この霧の押し寄せてくる線はまだ半リーグ以上の距離があつた。若し風さへ變つたならこの霧の山を避ける事が出來たかもしれなかつた、然しその風の變る事は急速を要するのであつた、なぜなれ

ばその間の時間は目に見えて少なくなつて行つたからである。デューランド號は進航した、霧も亦押し寄せた。船がそれに次第に近く一方に於て、それも益々船に近づいて來た。クリユパンを汽力を増加する事を命じて船を海岸より遠からさうとした。斯うして暫くの間彼等は霧の端を通り過ぎてゐた、然し霧は尙ほ押し寄せて來た。船は兎に角白晝を航走した。

然しその操縦は時機を失したために成功の機會が殆んどなかつた。二月の日は早く暮れる。グルンセイの人はこの霧の事を深く考へてゐた。彼はセント・マンローの人に、——

「霧は濃くなるでしょう！」と言つた。

「海では忌な天氣です」とセント・マンローの人の一人が言つた。

他の一人が、

「おまけに楽しい航海が打ち毀しです」と云つた。

グルンセイの旅客はクリユパンに近づいて云つた、——

「船長、霧に閉ぢられるのが心配ですね」

クリユパンが答へた、——

「私はセント・マンローに留まりたかつたのです。然し出帆せいと忠言せられましたから」

「誰にです？」

「或る老年の船乗達に」

「あなたが出帆なさつたのは當然でした、明日嵐が起るかどうが誰にも判るものではありません。今時は待つてると悪くなります」

數分間の後デューランド號は霧山に入つた。

其結果は著しかつた。後甲板にゐた人達は前方を見る事が出来なかつた。柔かな灰色の中間物が船を二つに分けた。

其内に船體の全部が霧の中に入つた。太陽は鈍い赤い月の様になつた。誰も皆な身震をした。乗客は外套を着た、水夫達も防水外套を着た。

殆ど漣もない海は、その冷い本靜よりも恐ろしいのであつた。凡てが青白く色を失つた。黒い煙突と重々しい煤煙は船を包んでゐる露の様な霧と戦つた。

西の方に向ける事は駄目であつた。船長は船首を再びグルンセイの方に向けた、そして汽力を増加する様に命じた。

機關室の船口にゐたグルンセイの旅客は黒人のインブランカムが同僚の機關手と話をしてゐるのを聞いた。旅客は耳を濟まして聞いた。黒人は云つた、——

「今朝は日の照つて居る内半速で進航した、今霧の中で馬力を掛けた」

グルンセイの人はクリユパンの許に歸つて來て言つた。

「船長さん、見張は駄目です、然し馬力は掛け過ぎてはありませんか？」

「仲々どうして。舵手の泥酔の過失から時間を損しましたから、それを取り返さなければなりません」

ん

『然うですか』

そしてクリュバンは更に言つた、――

『船が着くかどうか心配です。晝間は大分霧が深い様ですが晩になつたら尙ほひどくなるかも知れません』

デルンセイの人はセント・マローの旅仲間と一緒に云つた、――
『立派な船長さんだ』

時々、搔き削つた木屑の團の様に見ゆる大きな霧の波が彼等を重々しく壓へ付けた、そして太陽の光を消してしまつた、然しそれは又青白く弱々しく現はれた。空に見へた小さなものは、劇場の古い景色繪の中で油に汚れ班の付いた空の繪の長い片に似てゐた。

デュエラント號は、安全のために投錨してゐた單檣航の近くを通過した。それはデルンセイの「シヤーチール」號であつた。その船の船長は高速で進航する汽船を見た。又彼は彼女がその正しい航路の上を走つてゐない事に氣が付いた。彼女が餘り西の方に針路を取り過ぎてゐた様に船長には見えた。霧の中を全速力で航走するこの汽船の浮幻が彼を驚かした。

二時近くになつた頃霧は愈々濃くなつたため船長は餘儀なく船橋を去り舵手の側にゐなければならなかつた。太陽は見へなくなつた、そして凡て霧だらけであつた。船の周りは灰の様な暗黒であつた。彼等は青白い衣を着て航海してゐた。彼等は空も海も見ることが出来なかつた。微風だになかつた。

二つの水掻車の團の間にある船橋の下に懸垂つてゐる丁列綿油の罐さへも動揺しなかつた。乗客は沈黙した。

然し巴里人は口の中でベランジェーの歌を唱つてゐた、――『Un jour le bon Dieu s'è-veillanç』

セント・マローの客の一人が彼に話しかけた、――
『あなたは巴里から御出でになつたのですか？』

『然うです』

『巴里の景氣は如何ですか？』

『巴里では、みんな景氣がよくありません』

『じゃ海許りでなく陸も同じですね』

『然うです、この霰は嫌ですね』

『不幸の中に吾々を捲き込みさうな霧ですね』

『然うです、なぜ斯んな一切の不幸が世界にあるのでしょうか？實に不幸ですね、何が是等の不幸を招くのでしょうか？それがどんな役に立つのでしょうか？オデオン劇場に火事があつて間もなく澤山の家族は職業を失つたのです。それは公平な事でしょうか？あなたの御宗旨は何か存じませんが、私は全くこれには迷ひます』

『私も然うです』とセント・マローの人が言つた。

『茲處での出来事はなんでも悪い様です。神様が御疲れたつたのではないかと私は思ひます』と巴里の人が話を續けた。

セント・マローの人かその頭を掻いた、丁度其意味を了解したいとしてゐる人の様に。
巴里の人は尙も話を續けた、――

『吾々を保護して下さる天使は御出でないと思へます。天國に御不在なれば其の御達しがなければなりません。その方はその田舎の宅に御在です、そして吾々に御氣が付かれないのです、だから何もかも混亂するのです。その方が役所に御在でないのは確かです、その方は牧師――或者は神學者、或者は雀の翅のある淺ましい動物――に事務を見させて、自分は御休みになつてゐます』

この話の間に、話手に近づいた船長のクリュバンは巴里人の肩に其の手を掛けた。

『御黙んなさい！あなたのおつしやる事に氣を付けて下さい。茲處は海の上ですよ』

誰も二度と聲高く話すものはなかつた。

五分間話が途切れた後で此話をみな聞いたゲルンセイの人はセントマローの客の耳に囁いた、――

『この船長は信心家ですね』

雨は降らなかつた、然し皆んなは銘々の着物が濡れたのを感じた。乗組員は船の進んでゐた航路に氣を付けなかつた。然し不安の念は増大した。彼等は淋しい陰氣な所に入つた様に見えた。霧のため海上は深い沈黙に支配された、波も静まり、風も息を潜めた。この沈黙の中にデューランド號のキイナと鳴る音は不思議な、何とも云へない不安と哀しみの感を起さした。

彼等は船には更に出會はなかつた。然し若しセント・マローがゲルンセイの方向の沖合遙かに何かの船が霧の外に居たとしても、濃霧に包まれたデューランド號は彼等には見えなかつたに相違ない、何物にも附着して居ない彼女の煙の長い尾は青白い空にある黒い彗星の様に見えた。

突然クリュバンが怒鳴つた、――

『畜生奴！貴様は吾々に對して怪しからん事をしてゐる。貴様は吾々はこの霧から逃れ出る前に吾々に害を加へようとするんだらう。貴様は獄に打ち込んでやる。出て行けッ！酔つばらい奴！』

そして彼は舵手を引つ捕へた。

舵手は恐縮して引き下がつた。

船は尙急速力で進航してゐた。

三時頃になつて霧の下の部分が晴れ出して來た、そして彼等は再び海を見る事が出來た。

『私はこれが嫌です』とゲルンセイの人が云つた。

霧は太陽か風だけが離散させる事が出来る。太陽だと具合が宜い、然し風だとそう具合がよくない。二月の午徐三時頃では日は常に弱い。航海のこの危機に臨んで風の變ると云ふ事は望ましくない。それは屢々暴風の先驅である。

然し微風位はあつても殆んど感じないのであつた。

クリュバンは羅針盤を見て舵柄を握りながら獨りで次の様な言葉を呟いてゐた、それは旅客の耳に入つた、――

「時機を失つてはならぬ、あの酔酩の馬鹿奴がために遅くなつた」
彼の顔には表情が絶対に無かつた。

霧の中で海が少し荒れた。波が眼に付く様になつた。海面には小さな光の輝きが現はれた。是等の光る片は水夫達の注意を惹くのである。それは垂れ下つて居る霧の屋根で風のために起つて霧の開きを示すのである。雲は少し立ち昇つたが又重々しく沈み下つた、その濃さは時々完全であつた。船は霧の氷山の様なものに捲き込まれた。時々この恐ろしい輪が釘抜の兩足の様に少し開いてそれから水平線を一寸見せて、又閉まつた。

そのうちに、ゲルンセイの人は小望遠鏡を手にして哨兵の様に船の前部に立つてゐた。開きが一寸の間現はれたが又消へた。

ゲルンセイの人は驚いて振り返つた。

「船長さん！」

「何ですか？」

「この船はハンウェイス岩の方へ向ひて進んでゐますよ」

「そりやあなたが間違つてゐます」とクリユバンは冷然として云つた。

ゲルンセイの人は言ひ張つた。

「イヤ確かに然うです」

「そんな事はありません」

「でも私は今しがた水平線で岩を見ました」

「何處で？」

「彼處で」

「彼處は廣海ですよ。そんな事がありますか」

そしてクリユバンは旅客の指した方に船首を向けた儘であつた。

ゲルンセイの人は再び彼の望遠鏡を取り上げた。

間もなく彼は再び船尾に飛んで來た。

「船長！」

「ハイ」

「針路を轉じなさい！」

「何故です？」

「私は確かに、この直ぐ先に大層高い岩を見ました、大ハンウェイス岩です」

「あなたは濃い霧山を見たのです」

「それは大ハンウェイス岩です。船を廻はして下さい！後生だから」

クリユバンは舵を廻はした。

グアラ、グアラと云ふ音が聞えた。
 廣海で暗礁に乗り掛けて船腹の裂ける音は吾々の想像し得る一番物凄いな音である。デューランド號の進路は阻止された。

船客は各々激動に殴き付けられて甲板上に轉倒した。

ゲルンセイの人は夫に兩手を差し上げて、

『ハンウエイヌ岩に乗り上げたのだ。私はそれを豫言した』と云つた。

船から長い叫聲が聞こえた、――

『もう駄目だ！』

その中にクリュバンの乾からびた短い聲が聞こえた。

『誰も安全です。静かになさい！』

腰迄裸體のインブランカムの黒い姿が、機關室の艙口から現はれた。

黒人は落着いて言つた、――

『船長！浸水して來ました。汽罐の火も直ぐに消えます』

恐ろしい刹那であつた。

激動は自殺的であつた。若し慘禍が故意に招かれたものであつたならば、それは一層恐ろしいものであつたに相違ない。デューランド號は、恰も彼女が岩其者を攻撃したかの様に彼女の運命に突進した。岩の尖端が彼女の胸腹を楔の様に刺し通した。六呎四方の張り板が破碎された、船首飾や船首材

は粉碎された、そして穿の開いた船腹は恐ろし音をして海水を吸ひ込んでゐた。それは破壊と滅亡の入口であつた。反動は激烈であつた、め舵の板を粉碎した。舵は蝶番を離れてブラ／＼と垂れ下つてゐた。岩は船の龍骨に迄突入してゐた。船の周圍には濃霧の外他に何も見へなかつた、そして今は薄暗くなつた。夜は速かに來た。

デューランド號は前方に沈んだ。それは牡牛の角に内臓を突き通された馬の腕きに似てゐた。彼女は駄目であつた。

タンダグイル醉が醒めた。誰も船が難破した時に酔つてゐるものはない。彼は後甲板に降りて、又上つて、そして云つた、――

『船長、海水が船艙内に急速に浸入してゐます。十分間内には排水孔迄滿ちて來ます』

乗客は度を失つて走り廻つた、そして手を握り梁木に倚りかゝつて機關室を眺めたりして無駄な運動をしながら戦慄してゐた。旅行家は氣を失つた。

クリュバンは手で合圖をした、彼等は沈黙した。彼はインブランカムに訊ねた、――

『機關はもうどの位運轉するか』

『五分か六分です』

そこで彼はゲルンセイの旅客に尋ねた、――

『私は舵機の所にゐました。あなたは岩を御覽になつたでしょう。吾々の座礁してゐるのはハンウエイヌの何らの岩ですか？』

『モーヴ岩です。タツタ今私は霧の開目からハツキリとそれを見ました』

『若しモーヴ岩の上だとすれば左舷に大ハンウエイヌ岩があり、右舷船首に當つて小ハンウエイヌ岩があります、それならば吾々の今ある所は海岸から一哩離れてゐます』とクリユバンが云つた。

乗組員や乗客は心配そうに氣を付けて船長を見ながら傾聴した。

船に燈火を點す事は駄目であり又出来なかつた。積荷を海中に投ずるためには船艙の口を開かねばならない、そうすれば却つて海水の浸入を増す様なるものである。錨を投ずるのも同じく駄目であつて船はシツカリと岩に喰付いてゐた。その上に錨の鎖もそんな海底で錨を引くには絡れたであらう。機關には故障もなく火の消えない間は運轉する事が出来るのであつたから——即ち尙五六分間、彼等は蒸気と水掻車の助けを俟つて船尾へ離礁せんものと努力を試む事が出来た、然し若し甘く離礁が出来たなら、彼等は直ちに沈没したに相違ない。なぜなれば岩は實際或程度迄破壊を防ぎ海水の浸入を防いだからであつた。それは少くとも邪魔であつた、艙口が一度解放せられたならば浸水を防ぎ艙筒を運轉させる事が出来なかつたであらう。心臓の傷口から短刀を抜き取ると事は被害者にとつては即死である、岩から船を離すのは船を沈没させる様なるものである。

船艙で水に浸つてゐた家畜等は悲しそうに啼き呻めいた。

クリユバンは、『長い端艇を下せ』と命令を下した。

インブランカムとタングルイルは命令を行ふために飛んで行つた。端艇は容易く其の縛しめから解

かれた。残りの乗組員はウツトリしてそれを眺めてゐた。

『總員加勢！』とクリユバンが叫んだ。

此の時一同それに従つた。

クリユバンは泰然として續いて命令を下した、その命令は現今の佛蘭西の水夫達には到底も判らぬ古い海の方言で云つた。

『綱をたぐり込め。——揚錨機が利かなければ碇綱を持つて来い。——錨鎖をたぐり込む事を止め。

——邪魔物を取り拂へ。——其處を下けろ。——艙と船首を下けろ。——サー皆なでやれ。——船尾の方を最初に下けない様に氣を付けろ。——其處は餘り張り過ぎてゐるよ。——横木の複滑車の緊索を堅くしろ。——其處に加勢しろ！』

長い端艇が降された。

其時デユイランド號の水掻車は廻轉を止めた、そして煤煙も出なくなつた、火に水が入つた。

船客達は梯を傳つて、急いで大端艇の中に飛び降りた。インブランカムは氣絶した旅行家を抱き上げて、端艇の中に運び、そして再び船に取つて返した。

乗組員は船客の後から突進した。船室ボーイは打ち倒されて其の上を他の人達が踏みこむつた。インブランカムは彼等の通路を遮ぎつた。

『小供より先へ乗つてはいかん』と彼が云つた。

彼は其の黒い二つの腕で水夫達を跳ね除けて、小供を起し、端艇の中に起立してゐたゲルンセイ人

に渡した。

小供は救はれたのでインプランカムは他の人達のために道を開けてそして言った、——
『通れ！』

そのうちにクリュバンは自分の部屋に入つて船の書類や機具を一包にした。彼は羅針箱から羅針儀を取り出し、書類と機具はインプラカムに、羅針儀はタングルイルに手渡しして云つた、——

『端艇に乗れ！』

彼等は其命令に従つた。乗組員は各々其の席に着いた。

『サア漕ぎ出せ！』とクリュバンが云つた。

大端艇の中から叫聲が聞こえた、——

『船長！あなたは如何なさるのです？』

『俺は此處に残る積です』

遭難者等は熟考する時もなく、そして同情心を起す暇もないのである。然し大端艇に乗つて比較的
安全であつた人達も利己的ならぬ感情を感じたのであつた。皆なで聲を揃へて叫んだ、——

『船長！一緒に御出でなさい』

『イヤ私は此處に残ります』

海に経験のあつたゲルンセイの人は答へた、——

『船長御聞きなさい。あなたはハンウェイ岩で難破されたのです。此處からプリアンモン迄泳ぎ渡

るにしても一漕ぎあります。端艇だと二漕ぎ離れてゐるロツクエイヌに上陸する事が出来ます。其處には
激浪と霧があります。二時間以内では此の端艇はロツクエイヌには着かないでしょう。然うすれば夜
になります。海も荒れて居ますし風もだん／＼烈しくなります、それに狂風も近づいて來ます。吾々
は今ならば貴君を御連れ申す事が出来ます、然し天氣が悪くなると、到底と吾々の力では及びません。
貴君が其處に御残りだと死な／＼してはなりません。一緒に御出でなさい』

巴里人も言葉を合せて言つた、——

『この大端艇は満員です、——乗り過ぎてゐます全く、そして一人乗せると確かに多過ぎて仕方が
ありません、然し吾々は十三人です、——端艇にとつては不吉な數です、ですからそんな不吉な數の人
を乗せるよりも一人位乗せ過ぎた方が宜いのです。船長御出でなさい』

タングルイルも云ひ足した、——

『船長、皆んな私の過失からです——貴君の過失ではありません。貴君が後に御残りになるのは公
平ではありません』

『私は此處に残る決心です。船は屹度今夜あたり暴風雨のために紛碎されるに相違ありません。私
は船を見棄てたくはないのです。船が失くなれば、船長も既に失くなつてゐます。私が最後に至る迄
私の職責を盡さなかつたと世間の人から云はれたくないのです。タングルイル、俺は御前を宥してや
るよ』とクリュバンが云つた。

そして彼はその腕を組んで叫んだ、——

「言ふ通りにせい！綱を放せ、そして漕出せ」

大端艇はアチコチと波に揺られた。インブランカムが舵柄を握つた。漕がない人は皆んな船長の方に向いて両手を差し上げて一緒に叫んだ、――

「クリユバン 船長萬歳！」

「感心な御方です！」と亞米利加人が云つた。

「あの人は最も尊敬すべき海員の一人です」とゲルンセイの人が答へた。
タングルイルは涙を流した。

「若し俺に勇氣があつたら、船長と一緒に残つただらう」と彼は云つた。

大端艇は船を漕ぎ離れた、そして霧の中に見えなくなつた。

もう何も見えなかつた。

權の波を打つ音は次第に微かになり、そして聞えなくなつた。

クリユバン只一人残つた。

第六章 深淵の内部が突然明く見えた

クリユバンは霧と大海原の真中で、彼の周圍に押し寄せてくる潮や、早や暮れ行く夜と共に、遠く人里を離れた此の岩の上に死を待つ許りに取り残された時、深い満足の氣持を味はつた。彼は目的を達した。

彼の夢は實現されたのであつた。長い日附で彼の運命に對して振り出されてゐた手形の引受の期日が愈々到来したのであつた。

彼にとつては、見棄てられたと云ふ事は實際救はれたと云ふ事であつた。彼は海岸から一哩を離れたハンウエイス岩の上に居た、彼は七萬五千法を所持して居た。

難破がこれ程科學的に成就した事はなかつた。何一つ失敗した事はなかつた。

何事も前以て豫見されたのは事實である。クリユバンは壯年時代から命懸けで正直の評判を取らふと云ふ考を持つてゐた、即ち高名な人として世を送り、その評判を資本にして他の仕事をしようとした、彼は靜かに時機の到来を待つてゐた、盲目的に焦らす、大膽に機會を捕へて只一度の大冒険を全力を傾倒して敢行し、そしてその危難も一掃して馬鹿者共を茫然自失させてやらうと云ふ考を持つて居た。野呂間な悪黨共が二十度も失敗する事を彼は只一度で遣付つた。彼等が失敗して最後に絞首臺で果てるのに、彼は甘く成功して財産を作らうとした。ランティヌとの會合は彼に取つては新しい光明であつた。彼は直ちに計畫を立てた、――ランティヌから否應なしに吐出させ、逃亡に依つて彼の脅迫的啓示を無効にし、世間をして彼を死んだものと信じさせ――それは隠匿の方法中最善のものである――そして此の目的のために、デューランド號を難破させ様と目論んだのであつた。彼の計畫に難破は必要であつた。遂に彼は彼の存命の絶頂點に一大美名を残して満足して消へ失せた。彼が難破船の中では等の事を考へながら突つ立つてゐた時、彼は普通の人からは悪魔と間違へられたかもしれなかつた。

彼はその生涯を此の一瞬間のために暮して来た。

彼の外見の至ては此の「遂に」と云ふ二字を表はしてゐた。悪魔の様な落付きが、その青白い顔貌の中に満ちてゐた。一般にその深さが測り知られぬものと見られてゐた。彼のドンヨリして眼はハツキリとして恐ろしくなつた。彼の内心の邪惡の心の火がそこに反射したのであつた。

人の内心と云ふものは、人の周圍にある外界の如くその電氣張力を有して居る。考へは流星の如きものである。その來る瞬間に於て混亂した考へに開きが出来て、火花が其處から飛び散るのである。人の心の内に悪心を抱いて、その餌を感じた時には、光の火花に似た満足を感じるのである。邪惡の目的が達せられた時その姿は照り輝くものである。不正なる結合の成功、渴望せる目的の達成、兇猛なる本能の満足等は不快なる然も爛々と輝く膨張した眼の中に現はれてくるであらう。それは一度嵐から脱け出た喜悅の閃光である。所の恐ろしい黎明の如きものである。是等の閃光は良心が雲に掩はれ暗黒に包まれた場合に發生するのである。

其れ等の徴候は彼等の眼の瞳孔に表はれた。彼等は此處等の上や下で輝いて見えるものには似てなかつた。

クリエバンは隠して居た凡ての悪心が今迸り出たのであつた。

彼は四周の暗黒を打ち眺め、そして暗い意味の満ちた低い抑へる事の出来ない笑に耽けつて居た。

彼は遂に自由になつたのであつた！遂に富んだのであつた。

彼の生命の不明な將來は遂に解釋せられた。問題は解決せられた。

クリエバンには十分の餘裕があつた。潮は満ちて居た、従つてデューランド號は支へられて居た、そして遂には少し許り浮き上つた。船が岩の間に確かりと乗り掛けつ居たから沈没の危険はなかつた。その上に彼は大端艇はの内に轉覆して仕舞ふだらう——恐らく海底に——と信じた。クリエバンはそうなる事を望んだ。

難破船の甲板上に立つて彼は両手を組み合せながら、見た所では暗夜に於けるこの孤獨の境遇を喜んで居た。

偽善が三十年の間此の男の上に押つ被さつて居た。彼は海員としての謹嚴に縛られた惡魔其者であつた。彼は憎むべき相手のために良に陥入れられた人の感情を以て道徳を憎んだ。彼は常に悪い豫謀を抱いて居た、彼が一人前の男になつた時から彼は表面を謹嚴に見せかけた。その假裝の下は惡魔であつた。彼は正直な市民に假裝した惡漢の様に生活した。彼は口の利き方の柔なしい海賊であり、正直な奴隷であつた。彼は壓縮された様な木乃伊の衣に包まれた様に、無邪氣な衣を着なければならなかつた。彼は惡魔が零落した時、面倒がる天使の翼を持つて居た。彼は社會的尊敬を受け過ぎた。善良など云ふ評判を獲るのは困難である。是等の困難を不斷に平均して、心では惡事を考へ、口には善い事を云はねばならぬ、これが實に骨折りである。彼の潔白も本體のない本影であつて、彼自らは惡の妖怪の化身であつた。この二重の矛盾がクリエバンの宿命であつた。齒を噛みながら笑ひ、秘密に激怒し、常に體裁よくし、外貌を善く整へると云ふ事が——彼自らそれを選んだのであるから少からず面倒ではあつたが——彼の運命であつた。道徳は彼の心には堅苦しいものゝ様に見えた。彼は時々彼

の口の前で止めて置かねばならなかつた。その指先を咬む事が出来たかの様な感じを抱いた。彼は喰ひ付くには、彼は御機嫌を取らねばならなかつた。非常に虚偽の生活を営むと云ふ事は人に知られぬ苦痛を受けるものである。偽善者の心の有様は被審者と罪人との心結び付けたものである。將來の成功を望んで、眼前の罰に堪へ忍ばねばならぬ。無限に悪魔的所業を預謀する事や、嚴格を装ふ事、表面上の良い評判に一致する様に秘密な悪評を覆ひ隠す事、絶へず世間から嗅ぎ付けられぬ様にする事、不斷に幻影を表はし、そして彼自身は決して幻にならぬ事、――是等は面倒なものである。その暗い繪具に強いて刷毛を浸し、そしてそれで以て正直の繪を書いたり、彼を尊敬する人々を呑み、機嫌を取り結び、自らを抑制し、油断をせず絶えずニコニコと無邪氣な顔をして陰險なる罪惡を犯し、不具者を美人に變形し、惡事を完全なる形に作り、匕首の先でする様な探り方をしたり、砂糖に毒を交ぜ、色々な身振りに心を留め、言葉にも氣を付け――彼の本性の顔を見せない様にする事――、何と云ふ辛い苦しい事だらう！偽善嫌ふべき事は偽善者自らも臆けながら感じて居る。断えず彼自身の欺瞞を飲んで嘔吐を催ふして居る。狡猾が惡事に與ふる綺言美語は常にそれを口にする事を餘儀なくされて居る惡漢に取りては嫌忌の情堪へないのである。そして又惡事が將に曝露せんとする様な恐ろしい時機が往々にしてある。その苦がい垂液を呑み込まなければならぬのは恐ろしい事である。此の繪に加ふるに其處には又彼等の誇りと云ふものがある。如斯生活の歴史に於て偽善自らが崇拜せらるゝ不思議なる時機がある。惡事には常に極端なる自慢と云ふものがある。蟲は肥蟲と同じ様な滑り歩み方をするものである。そして又同じ様な首の

擡げ方をするのである。奸邪なる惡人は憤み深い節制のある專制王であつて、自らは唯だ第二次的の役目を務めてよく其目的を達する事が出来るのである。彼は寄せ集められた小ばいものであつて大きな事を仕出かし得るのである。完全な偽善者は矯少なるチタンである。クリユバンは彼が不遇であつたと云ふ事を心から信じて居た。何故に彼は富者として生れてくる權利がなかつたのであるか？彼が富者に生れて來なかつたと云ふ事は彼の罪ではなかつた。人生の高尙な快樂を奪はれて、なぜ彼は勞働――他の言葉を以てすれば欺し裏切り破壊する――しなければならなかつた？何故に彼は此の呵詔追従御機嫌取りの苦しみを受けなければならなかつたのか？他人の尊敬と友誼のために苦しみ、日夜眞ならざる假面を付けなければならぬのか？假託して居ると云ふ事は苦しい事であつた。人は其の嘘を付かなければならぬ人に對して憎惡の念を抱く。然し今や假面は脱ぎ棄てられたのであつた。クリユバンは彼の復讐をした。誰に對して？凡ての人凡ての物に對して！レティエリは彼のために大いに盡してやつたにせよ決して彼の不爲になる様な事はしなかつた、それだけ彼の怨みは大であつた。彼はレティエリにも復讐した。彼はそれらの人達の面前に於て壓迫を感じたその人達の凡てに復讐をした。今は彼が自由となる番であつた。彼を善く思つた人達は凡て彼の敵であつた。彼は長い間彼等の捕虜であつた氣がした。今彼は獄屋の壁を打ち破つた。彼の脱走は成功した。彼の死と思はれたものが即ち彼の生命の始まりであつた。彼は將に再び此の世に生れ出ようとした所であつた。眞のクリユバンは假面を脱ぎ去つ

た。一時間の内に見文が破れた。彼はラチンイエを空間に蹴込んだ。レチイエリトを懸流に陥れんとした。人間の正義なるものを無視し輿論を馬鹿にした。彼は一切の道徳を遂ひ除け、全世界を抹殺した。

三字から成り立つてゐるゴツド(神)と云ふは彼の心には少しもなかつた。

彼は信仰家として通つて来た。所が今は何と云ふ態だ？

偽善には凹の深淵がある、否寧ろ偽善者其自身がその深淵である。

クリユバンは彼が只一人になつた時彼の魂が長い間隠れて居たその洞窟が開かれたのであつた。彼は嬉しい自由の氣持を味はつた。彼はその瞬間雀躍した。彼は自ら一息吐き出した。

彼の内心にある悪の深淵は彼の容貌に現はれた！彼は言はゞ悪魔の様な喜びに身を躍らした。その瞬間ランテイスの様子は新しく生れて孩兒の無邪氣な表情に似て居たであらう。

古い假面を斯うして脱ぎ取つて仕舞ふと云ふのは何と云ふ嬉しい事だらう！彼の心はそれが悪の憎むべき沐浴をとらんがために踏み出した時に、その恐ろしい裸體を見て喜んだのであつた。長い此人の尊敬に依つて拘束されて居た彼は醜名に對して特殊の風味を感じて居たのであつた。彼は悪の淫りがましい快樂を経験した。其等の恐ろしい道徳上の深淵の中に於てその本性は兇猛なる喜びを見出したのであつた。彼等は悪事の醜行である。長い間堪へ忍んで居た虚偽の道徳上の評判の無意味な事は醜恥に對する貪慾を起させる。人はその悔滅を望むだけ人を侮蔑し得るかも知れない。尊敬でさへも頗るなるものである。墮落の自由にも満足の感情がある、そして耻辱に纏はれて、だらしなく露は

つて居る野卑に對して羨望の眼を投げる事が出来る。慎み深く伏せる眼は罪をコツソリと盗見する眼と似通つて居る。メツサリナからマリイーアラコクエー迄の距離は遠くはない。チカディエルの物語とルウヴィエの尾を想ひ出せ。クリユバンも亦悪を着て居る。厚顔は彼が常に秘密に感心して居た目的であつた。彼は化粧した娼婦や厚顔なる妖婦の赤裸なる無恥を羨んだ。彼は技巧の點に於て此の女達を凌駕して居る事に誇を感じ、そして聖人として見せかける奸計に嫌惡の情を感じた。彼は道學主義のタンタラスであつた。そして今この岩上に於て孤獨の裡に彼は自己を有の儘に曝露する事が出来たのである。悪の中に大膽に飛び込むと云ふ事、——それが齎らす本能的の快感は實に何とも云へないのである。墮落せる天使等のみ知つて居るこの一切の喜びの情はこの中に集められて居る。そしてクリユバンはその瞬間に於てそれを感得したのであつた。長い間虚偽假託の残りは遂に完済せられた。偽善は投資である、悪魔がそれを辨濟するのである。クリユバンは此の思に全く耽溺して居た。彼は自ら心の中に囁いた、『俺は悪黨である』そして心ゆく許りの深い満足を感じたのである。人間の良心は決して如斯感情の高潮を経験しなかつたのである。偽善者の赤裸なる自己爆發——それは正に噴火口の爆發にも比べる事が出来ないものである！

彼は己れ全く一人である事を喜んだ。そしてなほ其處に誰かゝるとも決して悔まなかつた。彼は己れの悪魔の如き喜悦を目撃してくれる人があれば宜いと思つたであらう、又そして社會に向つて『馬鹿者奴』と怒鳴り付けてやる機會があれば大に満足したのであろう。

孤獨は實に彼の勝利を確保した。然し彼の勝利はそのため小さいものとなつた。

彼は自らその榮譽の觀覽者となる事が出来なかつた。架刑臺上の人となると云ふ事さへも満足のあるものである。なぜなれば誰も皆その人の醜惡を見る事が出来るからである。

群集をして調べさせると云ふ事は力を示すと云ふ事である。頸に鐵の錠をはめられて市場の壇上に立つてゐる罪人は彼が群集をして彼の方に向けさせんと強制する満目の主人公である。その絞首臺上には踏臺がある。其處にゐると云ふ事は、一般の注目を中心點となるのである。是亦勝利にあらずして何ぞや？公衆の目の瞳孔を左右する。是亦優越の池の形ではないか？理想的惡を崇拜する人々にとつては、汚辱は名譽である。それは彼等が下瞰し得る高所である。少くとも或る種の優越である。又彼等が傲然として威容を示す事の出来る卓越である。全世界の注目を惹く絞首臺は王冠に似てゐる處がないでもない。少くとも曝物にされると云ふ事は注目され研究される事である。

茲處に於て吾々は明かに歳史の暗黒なる時代を知る鍵を有してゐるのである。ネロが羅馬を焼き、ルイタワトルツがバラチネートを捕へ、攝政王が徐々にナボレオンを殺し、ニコラスが文明世界の眼前に於て波蘭を絞首したが如きは、皆クリュバンの喜びに等しい或る感情を持つてゐたからである。一般的呪咀はその莊嚴から雄大を奪ひ去るものである。假面を脱せしめられると云ふ事は恥辱である。然し假面を自ら脱すると云ふ事は勝利である。地位に耽溺する事、外觀上の侮辱に感ずる圖をしき満足、禮儀正しき生活に對抗する是れ見よがしの圖

しき現實曝露などが其の内にある。

偽善者の有する是等の觀念は矛盾してゐる様に見えるが實際に於ては然うでない。凡ての醜惡は論理的である。蜂蜜は大苦物である。エスコパールの如き性格はサード侯爵のそれと相似してゐる。偽善者は完全なる罪惡の化身であるから、彼自身の内には極端なる二つの邪惡を含んでゐる。一面に於て僧侶然としてゐる彼は他面に於て娼婦に似てゐる。彼の惡覽的性格の性は二重である。それは自ら創生變化する。諸君はその喜ぶ姿を見る事を欲せらるゝ？見て御覽、恐ろしいと思はるゝ？裏返して見なさい。

是等の一切の多く思想がゴタ／＼になつてクリュバンの心に浮んでゐた。彼は是等の思想を分析しなかつた。然し彼はそれを直感した。

暗夜に地獄の坑口から燃え上る炎の渦卷が宜く、彼の心の中にある物凄しい連想を表はすのである。クリュバンは如斯暫しが間、身動きもせず深き思に耽けつてゐた。彼は彼の脱ぎ捨てた道德の衣を、古い皮を付けてゐる蛇の様に蔑んだ。

誰もその道德には信仰を持つてゐた。彼自身さえも多少は持つてゐたのである。彼は又笑つた。

社會は彼が富んでゐたのに彼を死んだものと想像したのである。彼が救助されたのを溺死したものと信じたであろう。社會の馬鹿者等を欺いた何と云ふ素的な計略だらう！クリュバンはランテイヌを非常に馬鹿

にしてゐた、——虎に對する貂の輕蔑である。ランティヌの計略は失敗したが彼の奸計は成功した。ランティヌは赤面して逃げ出したが彼は勝ち誇つて消え失せたのである。彼はランティヌに代つて、彼とその夫人の間を裂き、そして彼女の寵を奪ひ取つたのである。

將來の事に就いては、彼は別に良い計畫を持つてゐなかつた。彼の腹帯の間にある鐵の煙草箱には三枚の銀行紙幣があつた。その事實を十分知つてゐた。彼は彼の姓名を變じたであらう。六萬法が六十萬法と同じになる國は澤山ある。世界のその様な一隅に落ち延びて、惡漢ランティヌから強奪した金で正直に暮すのは悪い解決法ではなかつたであらう。投機をなし、商賣を始め、その資本を増加し、眞實に百萬長者になると云ふ事は彼の經歷の最後を悪く飾るものではなかつたであらう。

例へばコスタリカから輸出する珈琲の大取引は今正に發展せんとしてゐるのであつた。其處には富を作るべき黄金の山があつた、彼はそれを知つてゐた。

それは大した事ではなかつた、彼はその事に付ては十分慎重に考慮した、企業の最も困難なる點は遣り遂げた。ランティヌから捲き上げてデューランド號の難破と共に踪跡を晦ましたと云ふ事は大成功であつた。後の事は彼にとつては何でもなかつた。其れ以來何等の妨害物が彼を阻止しそうにも見えなかつた、彼は何にも恐るゝものがなかつた、彼は泳いで安全に彼岸に達する事が出来た。彼は暗に乗じてブラアンモンに上陸し、懸崖を登り、眞直ぐに古い化物屋敷に行き、岩の裂け目に前以て隠してあつた結節のある繩を傳つて易々とその家の中に這入り込み、食料品や乾かした衣類の入つてゐる旅行靴を見付けたのであらう。其處で彼は機會の到來を待つ事が出来た。彼は通知を受けた。毎週

ブラアンモンに寄らない西班牙の密貿易商、——恐らくブラスキトであつたらう——はなかつた。數ギニアで彼はトルトベへ行き——彼はブラスキトから、嗅ぎ付けられない様に彼の推察をまぜかへすため、彼に前に言つた様に——でなくて、ビルバオか或はバサジユ行きの便船を得たのであらう。其處から彼はヴェラクルズか又はニューオルレアンスに行く事が出来た。然し海に飛び込む時が来た。此の時には大端艇は遠く離れてゐた。一時間泳ぐ事はクリユバンに取つては何でもなかつた。彼はハンウエイヌ岩にゐた故、一漕の距離は只彼と陸地とを隔てたばかりであつた。

クリユバンが斯ふ考へてゐた其時霧の山がハツキリと開けて來た。
恐ろしいドウヴル岩が彼の眼前に突つ立つてゐた。

第七章 豫期しなかつたものが間にあつた

クリユバンは物凄く其の岩々を見詰めた、それは實に恐ろしい孤立した岩々であつた。その不恰好な輪廓を見遠る事は出来なかつた。二つのドウヴル岩は高く其姿を現はし、其の間には海洋に待ち伏せたる兇漢の係蹄の様に通路が見えて居た。岩々は彼の極く手近かにあつた。岩は狡猾なる共犯者の様にその岩々を隠匿した。

クリユバンは濃霧の裡にあつて其針路を誤まつたのである、彼は其の凡ての困難の裡に二人の大航海者の運命を経験したのであつた、——即ち一人はブランコ岬を發見したゴンザレーであつて他の一人はヴェルド岬を發見したフェルナンデーである。霧が彼を迷はした。霧は彼にとつては彼の航海術

を信頼して彼の大望を實行するに非常に都合よいものに見えた、然しそれには危険を作つたのである。西方に轉向し過ぎて彼は目算を誤まつたのである。ハンウェイス岩を見たと思つたゲルンセイの人は自分の運命と諦をつけて、彼に最後の轉舵をなさせる決心をした。クリユバンは彼が船をハンウェイス岩に向け航行させて居た事を疑はなかつた。

暗礁の一に胸腹を突き破られたチュールランド號は二つのドウウル岩のために數ヶーブルの長さに兩斷されたのである。

二百尋彼方に行くと其處には大きな花崗岩の一廓があつた。此の岩の險はしい兩側には二三の孔や小さな凸起したものがあつて人が其れを傳つて登る事が出来る様であつた。その荒削りの岩壁の右角の四角な隅に依つて頂上に高臺のある事が分つた。

それは人と云ふ名で知られて居た高地であつた。

この人岩はドウウル岩よりも高かつた。其の高臺からは近寄る事の出来ない其等の二つの峰をも見下ろす事が出来た。その端の缺けて居るこの高臺には長押があつて彫刻した様に正確であつた。これ以上の淋しいそして恐ろしい場所は想像する事が出来なかつた。自に見るか見えない様な海洋の浪はこの黒い大きな岩——海や暗黒の大きな化物の休息所の様な——の眞直な岩壁に靜かに打ち寄せて居た。

二四邊は凡て靜かであつた。風も波も殆んどなかつた。心にその平靜なる海面の下にある深淵の隠れたる生命と偉太さが臆けに想像された。

クリユバンは遠くから屢々このドウウル岩を見た事があつた。

彼は實際今其處に居ると云ふ事を思つて満足した。

彼は其れを疑ふ事が出来なかつた。

忌々しくも事態が急變したのであつた。——ハンウェイス艇の代りにドウウル岩があつた。一漕と思つたのに海上五リトグもある！海上五リトグ！到底も泳ぎ渡る事の出来ない距離であつた。この一人ほつちの難船した船乗にとつては、ドウウル岩は正に目に見る手に觸れる事の出来る死の出現である。陸地に到達する一切の希望の消滅である。

クリユバンは戦慄した。彼は自ら好んで是等の暗黒な額に其の身を置いたのであつた。人岩より外には彼の避難する場所はなかつた。夜に入つて嵐が起り、そして定員以上に満載したあの先端艇が轉覆するだろうと云ふことはあり得ることであつた。そうすれば遭難の報知は陸地には到達しないであらう。クリユバングドウウル岩の上に殘されて居ると云ふことも知られないであらう。今となつては饑餓と寒冷から来る死の外には彼にとつては何の望みもなかつたのである。彼の持つて居る七萬五千法も一塊のバンドに買求める事が出来ない。彼が建立した凡ての絞首臺は彼を此の係蹄に連れ來つたのである。彼は此の完成せんとする大圓の精勵なる建築者に過ぎなかつた。手段は盡きたのである。逃げる事は出来なかつた。彼の勝利は致命的な斷崖に變つたのである。釋放の代りに牢獄、長い幸運の將來の代りに苦悶が來た。チラと一目見る程、電光一闪の其瞬間に一切の彼の建築は破滅に倒壊したのであつた。此の惡魔の夢見に居た天國は眞實の墓場の形に變つたのであつた。

そのうちに空に動搖を生じた。風が起つて来た。揺れながら集まつたり離れたりする霧が大きな不恰好な形をして水平線の方に移動した。それが以前の様に消散して仕舞ふや否や海はまた明るくなつた。

海水が段々と浸入するに連れて、船輪内の家畜は咆哮し續けた。

夜が近付いて来た、恐らく嵐も一緒であらう。

満潮のために次第に海水の満ちて来たデユートランド號は右から左へ、左から右へ、動搖した、そして軸の上に於ける様に岩の上で廻轉し始めた。

波浪のために彼女がその固定した位置を動かされて、船の横梁端で廻轉しなければならぬ様な時機の来るのは豫見する事が出来た。

船が岩にブツ付かつた時の様に暗くはなかつた。日は大分過ぎて居たが、まだハツキリと見る事が出来た。霧の消散したために多少の暗さが除れた。西は晴れて居た。薄暮の青空であつた。その大きな反射が海面に輝いて居た。

デユートランド號の船首は船尾よりも下がつて居た。彼女の船尾は實際殆んど海面を離れて居た。タリユバシは船尾の欄干に跨つて、水平線を見詰めた。

執拗である事が偽善の本質である。偽善者とはその機会を待つものを云ふのである。偽善とは實際恐ろしい有望と云ふ事に外ならぬのである。その見るに堪へない虚偽の根底と云ふものは實に罪惡に變形せられた徳から成り立つて居る。

妙な矛盾である。偽善にも信實がある。偽善者は彼自身にも判然して居ない或る力を信じて居て、それは惡の所業を許すのである。

タリユバシは大海を眺め渡した。

絶望的な境遇であつた、然し惡の精神はまだ絶望しなかつた。

彼は霧の後で漂泊したり投錨して居た船が再び航走すると云ふ事を知つて居た。そして一隻位は水平線内を通過するだらうと考へた。

そして彼が豫期して居た様に一隻の船が現はれた。

その船は東から来て西へ向け航走し居た。

それが近づくに従つて船の輪廓が見えて来た。それは一本柱の艦装されたカッターであつた。その船の船首斜檣は水平であつた。それはカッターであつた。

三十分以内前にその船はドウヴル岩の近くを通過するに違ひない。

タリユバシは「教はれた」と思つた。

斯くの如き瞬間に眞先に只生命の事許り人は考へるものである。

そのカッターは不思議な小舟であつた。それはブラアンモンに行く途中にある密貿易船の一ではなかつたであらう。それはブラスキト自身であるかも知れなかつた。そうだとすれば生命ばかりでなく財産迄も助かるのである、そしてドウヴル岩の珍事は結論を急ぎ、化物屋敷に隠れる必要を省き、そして冒險事業を海上で終了して幸福なる出来事に變ずるであらう。

「あらゆる彼の本来成功を確信する念は歴史的な力を以て彼の胸の中に再び歸つて來た。如何に容易く悪人と云ふものは彼等が成功する筈のものだと自惚れるかと判る。其場合採るべき手段が只一つあつた。岩の間に狭まつたヂューランド號は當然其の輪廓が崩れて不規則。岩の形状と混同した。斯くして形が不明になり破壊されたので、彼女は暮れ残つた僅かの日の光りの裡に、近づいて居た船の乗組員の注意を惹くに足らなかつたであらう。」

然しながら空の青白い薄明の中に、其人岩の上に立つて、そして遭難の合圖をして居る黒い人間の姿は屹度認められ、そしてそのカッターからは遭難者を船に引取るために端艇を寄こすであらう。

その人岩は僅か二百尋の彼方にあつた。それに泳ぎ着くのは雜作もなかつた、そしてそれを攀るのも容易であつた。

二分の猶豫もなかつた。

ヂューランド號の船首は岩の間に沈んで居たからクリュバンは立つて居た高い船尾樓から海中に飛び込まなければならなかつた。彼は推測をし始めた、そして難破船の船尾の眞下は非常に深いと云ふ事を發見した。測鉛線に附着して引き上げられた小孔のある貝は有の儘であつて、それに依つて水面は如何に浪立つて居ても海中は静謐である洞穴が岩の下にある事が判つた。

彼は着物を脱いでそれを甲板に残した。彼はカッターに乗れば衣類を得られるだらうと云ふ事を知つて居た。

彼は革帯だけを身に付けた。

彼は衣類を脱ぎ棄てるや否や、此の帯に手をかけ、シツカリとそれを締めて、鐵の煙草箱に手を觸はつて見て、人岩に行くために碎浪や浪の間を泳ぎ抜けねばならぬ方向を急いで見定め、そして眞逆様に飛び込んだ。

彼は高い所から飛び込んだために、海中に深く沈んだ、そして底に觸れた、暫し海中の岩を廻はつて、そして再び海面に浮み出るために跳び出した。

其の瞬間に彼はその片足が何者のためにか引き捕へられた様な氣がした。

第七編 無暗に書物を開くと危険である

第一章 懸崖の麓にある眞珠

シユウル・ランドアと短い立ち話をした後で、暫く經つてギリヤットはセント・サムソンに歸つた。彼は當惑した、心配さへもした。一體如何したと云ふのだらう？

蜂の巢を突き破つた様な噂がセント・サムソンにあつた。皆んなが其の戸口に立つて居た。女達は高い聲で饒舌つて居た。何かの出来事を話して居る様に見えた人もあれば、又身振り入りで話して居る人もあつた。彼等の周圍に人が群り集まつた。「何と云ふ不仕合な事だらう！」と云ふ言葉が聞えた。或者が微笑した。

ギリアットは誰にも尋ねなかつた。彼は人に物事を尋ねる様な性分ではなかつた。その上に彼は餘り感動して居たため他人に話し掛ける事が出来なかつた。彼は風説を信じなかつた、彼は直接にレ・ブラヴェイに行く事を望んだ。

彼は心配の餘り大膽にも家の中に入った。

それに、波止場に向いて居た大きな一階の部屋の扉は開かれた儘であつた。門口には男や女が群り集まつて居た。皆んな這入つて行つた。ギリアットも他の人達と一緒に這入つて行つた。

家の内に這入つて彼は扉口の横に立つて居るシュウル・ランドアを見付けた。

『御前は屹度今度の事件を聞いただらうな？』

『イ、エ』

『俺は路傍で御前に話したくなかつた。それは人を悪い前兆の鳥にするから』

『どんな出来事です？』

『ヂューランド號が沈没したんだ』

大廣間に群集が居た。

それらの群が病室に居る人達の様に低い聲でヒソ／＼と話して居た。

近所の人達や眞先に馳せ付けた人達から成つて居る群集は消息を知りたいと云ふ好奇心に驅られて扉口に遠慮する風で込み合つて居た、部屋の奥にはデリュシセットが座つて涙を流して居た。メス・レタイエリーは彼女の傍に立つて居た。

彼は部屋の端の壁に脊を倚り向けて居た。彼は水夫帽を眉深くに被つて居た。灰色の髪の毛が頬の上に垂れて居た。彼は腕を動かさなかつた、息もしない様に見えた。彼は無生物が壁に倚り懸つて居る様に見えた。

彼の態度には精神的に打ち碎かれた人の様な所のあるのを容易に看取された。ヂューランド號が失くなつたので、レタイエリーは最早生存の目的を無くしたのであつた。彼は海の上に財産を持つて居た、その財産は沈没して仕舞つた。今は如何して宜いか？毎朝起き出で毎夜眠りに就く、只ヂューランド號の到着を待ち、彼女の進航を眺め、或は再び入港する彼女を見る許りが彼の楽しみであつた。目的のない殘生は何である？飲み、喰ひそして其次は何にか？彼は彼の生涯の勞働に依つて一の傑作を完成し、熱心に依つて文明の一新階段を獲得したのである、然も新しい階段は失はれ、傑作は破壊されたのである。此の先空しく數年生き延びたとてそれが何の利益になる？それ故彼の爲る事は何もなかつた。彼の年配では誰でも新しい生活を始めるものはない。その上に彼は落魂した。憐れな老人である！

デリュシセットは彼の傍で椅子に腰掛けて泣きながらメス・レタイエリーの一方の手を自分の両手で握つた。彼女の兩手は握合されて居た、彼の手は堅く握り締められてあつた。それは彼等兩人の二つの悲傷の相違の影を表はす徴であつた。握り合された手にはまだ希望の徴がある、然し握り締められた手には何も無い。

メス・レタイエリーは彼の手を彼女に任せて彼女の好きな様にさせた。彼は黙從した。雷電に打たれ

て彼は生命の光りをも失つた様であつた。

全然人との交際より、心を惹き付くる悲しみの探みに色々ある。諸君の室を出入する人の姿はゴタ／＼と亂雑になつてボンヤリする。彼等は諸君の前を通り過ぎ觸れもする。然しながら實際諸君の所に近づくのではない。諸君は近づく事が出来ない、彼等も諸君に近づく事が出来ない。喜びと失望との強さの差違は此の點にある、失望の場合に吾々は世界が遠くに離れてボンヤリして居る物の様に見える、吾々の眼の前にあるものを知覚する事が出来ない、吾々は吾々自身の存生の感じを失ふのである。斯る時吾々の肉體も精神も無用である、吾々の生命の意識は眞實なものではない、吾々は吾々首身に對してさへも夢に過ぎないものとなるのである。

メス・レティエリーの凝視は彼が此の夢心地の状態にあつた事を示して居た。

「いろ／＼の群りが囁き合つて居た。彼等は拾集しただけの消息を交換した。彼等の情報の要領は斯うであつた。」

「デューランド號は一昨日日没約一時間前霧のためにドウヴル岩で難破した。船を去る事を拒んだ船長を除いて、乗組員と乗客は凡て大端艇で避難した。霧が晴れた時南西から狂風が吹き起つたため、大端艇は再び難破しかゝつて彼等はそのためゲルンセイを越えた海に押し流された。夜になつて彼等は幸運にも「キャシミア」號に出會つた、そしてその船に收容せられてセント・ピータース港に上陸した。この悲惨事は全く舵手タングルイルの過失に依るのであつて彼ば投獄された。クリュバンの態度は天晴れ見上げたものであつた。」

大勢集まつて來た水先案内達は「ドウヴル岩」と云ふ言葉を特に強めて言つた。「そりや、陰氣な中途半途の家だ」と一人が言つた。

羅針盤と一束の記録と手帳とが卓子の上に置いてあつた、それは疑もなくデューランド號の羅針盤と船の書類であつて、大端艇が船を離れる時クリュバンがインブランカムとタングルイルに手渡したものである。是等は死其者に臨んでさへも是等書類を救ひ出すために多忙を極めたその人の立派なる自己拒絶の證據であつて、小なる出來事ではあるが道德的壯嚴に満ちて居て、決して忘るゝ事の出來ない崇高なる自我忘却の一例であつた。

彼は異口同音にクリュバンを讚嘆した、又彼等は等しくクリュバンが結局救助されたものと信じた。カッターの「シアルチール」號が「キャシミヤ」號より數時間遅れて入港した。最終の消息を齎らしのは此の船であつた。此の船はデューランド號と同じ海上に廿四時間を過した。此の船は霧の間漂泊して居た、そして狂風の間は帆を縮めて居た。「シアルチール」號の船長も此の集りの中に居た。

此の船長はギリアットが入つて來た時にレティエリーに丁度其の話を仕終はつたのであつた。話は眞實であつた。朝になつて暴風雨も止み風も静まつたので「シアルチール」號の船長は大海で牡牛の咆ゆる聲を聞いた。浪の中で此の田舎の音を聞いて彼は驚ろいた。彼は其方向へ船を走らせた、そしてドウヴル岩の間にデューランド號を認めた。海は全靜靜かになつて居たから船長は近づく事が出來た。彼は難破船に聲を懸けた、家畜の咆哮する聲が唯一の返事であつた。「シアルチール」號の船長は船には誰も居ない事を確めた。難破船はまだよく維持されてゐた、そして烈しい狂風にも不拘クリュバン

は一夜を其處に過す事が出来た。彼は容易にその所有物を手放す様な人ではなかつた。然し彼は其處にゐなかつた。それ故彼屹度救助されたに相違なかつた。セント・マローとグランヴィルとの間を往來する種々の單檣帆船や小船は前の晩霧の中に漂泊した後で必ずその岩の極く近くを通つたに相違なかつた事は確かであつた。それらの内の一隻がクリュバンを收容したと云ふ事は明かであつた。デュールランド號の大端艇は不幸なる本船を離れた時満員であつた事、それが大きな危険に出會ふ事が確かであつた事、も一人それに乗ると船は定員以上になり恐らく轉覆するに至つたであらうと云ふ事、是等の事情のためにクリュバンは疑もなく難破船に残る決心をするに至つた事などを記憶しなければならなかつた。然しながら一旦その職責を果して然も船が手近にゐた場合クリュバンは確かに船の助けを利用するに躊躇しなかつたであらう。英雄は必ずしも愚者ではない。自殺と云ふ觀念はクリュバンの様な申分のない性質を有する人に就ては不合理であつた。又罪人はタングルイルであつてクリュバンではなかつた。是等は凡て確かであつた。シアルチール號の船長の言ふ事は確かに正しかつた、そして誰も、間もなくクリュバンが再び表はれてくるのを見る事と豫期した。町中彼を祝つて引き廻そうと云ふ目論見があつた。

船長の談話から二つの事實が確かである様に見えた、クリュバンは救助せられ、デュールランド號が沈没したと云ふ事である。

デュールランド號に就ては事實を承認する外はなかつた。大團圓は回復する事の出来ないものであつた。シアルチール號の船長は難破船の最後を目撃したのであつた。船が釘付けにされてゐた岩は言はゞ其晩中、船を確かりと維持してをつて、その何を離す事が嫌であるかの様に暴風雨の激動に抵抗してゐたのであつた。然し朝になつて、船中に救助すべき人は誰もゐないと云ふ事を確かめて、再び船より徐かに遠ざからんとしたその刹那、嵐の怒れる最後の如き大浪の一つが彼女を打つた。浪は激しく彼女を其の位置から揺り上げた、そして弦を離れた矢の連さと正確で二つのドウウル岩の間に彼女を打ち付けた。「地獄の碎ける様な音が聞こえた」と船長が云つた。浪のために或る高さに揺り上げられた船は二つの岩の間に岩の中央にある肋骨を沈めた。彼女は又確つかりと座はつた、然し海底の岩の上にあるよりも一層堅く。彼女は其處に吊り下つたまゝで、あらゆる風と浪に曝されたに相違なかつた。

シアルチール號の乗組員の陳述に依ると、デュールランド號は船體を三つに破壊された。彼女は若し岩が船體を維持しなかつたならば、夜の中に明かに沈没したのであつたらう。シアルチール號の船長は望遠鏡で長い間彼女を注視してゐた。彼は海事上の正確なる用語を用ひて彼女の遭難顛末を説明した。右舷後半部は破碎され、檣は折れ、帆の縁に附いた索は帆から吹き離され、横檣索は吹き裂かれ、海室の天窓は帆桁の墜落に依つて破壊せられ、炊事場の丸屋根は破壊せられ、大端艇の楔は打ち離され、甲板上の室は轉覆され、蛇の蝶番は破れ、桁構は捻ぢ曲けられ、鎖は吹き飛ばされ、横梁は破壊せられ、船尾材は破られた、——荒れ狂ひし暴風雨のために生じた荒廢の状態は斯くの如きものであつた。前檣の前部に堅く結び付けられた積荷は全部破壊せられ、鐵鎖、鐵滑車、大綱と共に粉微塵となつて洗ひ流された。デュールランド號は海底を破壊せられた、今や波浪は船體を粉碎するに相違ない。二三

日の内には、もう其處に彼女の残骸は何もなくなるであらう。

機關は是等の大荒れのためには殆んど何等の損害を蒙らなかつた様であつた。是れは珍らしい事であつて、その事實は機械の精巧堅牢を證明するものであつた。シアルチール號の船長は曲肱が大きな損害を蒙らなかつたと云ふ事を確め得たと思つた。船の櫓は折れた、然し煙突はあらゆるものに對抗した。船長用の舷門の鐵護材だけが曲がつた、水掻車の蓋は損害を受けた、即ち枠組が潰れた、然し水掻には一つも故障はなかつた。機關には異状がなかつた。シアルチール號の船長は斯う信じてゐた。群集の中にある機關夫のインブランカムは同じ考へをもつてゐた。多くの白人仲間よりも聰明であつた此の黒人はその機關を誇つてゐた。彼は腕を差し上げてその黒い手の十本の指を開きながら、黙つて腰を下ろしてゐたレティエリーに話した、『御主人、機關はまだ使へますよ』

クリュバンの生存は確からしく、そしてデューランド號の船體は既に破壊されてしまつたから、その機關が群集の間に於ける話題となつた。彼等は生物であるかの様に、その機關に興味を感じた。彼等はその良質を讃めて喜んだ。『立派に作られた機械と云ふのは此の事である』と一人の佛蘭西の水夫が云つた。『まあ、然う云つたものだ』と一人のゲルンセイの漁夫が云つた。『あの事件に僅か許りの損傷で済んだ所を見ると餘程宜い材料を使つてゐるに相違ない』とシアルチール號の船長が云つた。

デューランド號の機關が次第に彼等の心を巻き付ける目的となつた。一般の輿論は褒貶ともに激しがつた。それは敵を持つてゐたし、又味方もあつた。古い帆走カッターを持つてゐて、デューランドの事業の一部分を得たいと望んでゐた數多の人達は、新しい發明品がドウヅル岩に依つて破壊された

と云ふ事を悔まなかつた。囁き聲は次第に高くなつて來た。騒擾は明かに多少静まつたが、議論は喧しくなつた、そして折々レティエリーの死せる如き沈黙に同情して一同聲を低めた事もあつた。

双方が互に頑固に主張した議論の結果は次の通りであつた。――
 機關は船の主要部である。船を新しく建造する事は出来るかもしれないが、機關を建造すると云ふ事は不可能であらう。此の機關は二つとないものである。金では到底も其れに似たものを建造する事は出来ない、更にその技師を見付ける事が尙一層困難である。機關の建造者は死んだと云ふ事を記憶しなければならぬ。それには四萬法を要した。誰もその様な金をその様な事柄に投ずる危険を冒すものがあるまい、――殊に今蒸氣船も他の船と同様に沈没するものであると云ふ事が判つた故に尙更然うである。デューランド號の出來事に彼女の既往の一切の成功の名聲を破壊して仕舞つた。そして此の場合その貴重な機關に尙完全な状態にあつて五六日の内には船自身の如く恐らく粉碎せらるゝであらうと云ふ事は一層嘆すべき事であつた。機關のまだ存在する間は難破があつたとは云へないかも知れぬ。獨り機關の消滅は回復の出來ない事である。機關を救ふと云ふ事は慘事を賠償すると云ふ事であらう。

機關を救ふ！話せば何でもない事であつた、然し誰がさうする積か？出來得る事であらう？計畫を立てると云ふ事と實行すると云ふ事は別物である、それは丁度夢見ると云ふ事と現實に行ふと云ふ事が別物である様なものである。若し夢が荒びてをって實行不可能のものであつたならば、ドウヅルの岩の間に横はつてゐる機關を救ふと云ふ事も亦實行不能な無茶な企てである。此の岩の上に働く職工

と船とを送ると云ふ思付きは不合理な話である、想像も及ばない事である。それは海の荒れる時期である。最初の強風のために錨綱は海中の岩の尖端に引懸つて擦り切れるであらう、そして船は岩の上で粉碎せらるゝであらう。それは最初の難破船を救助するために第二の難破船を送る様なものである。遭難水夫が饑餓のために死んだと云ふ傳説のある狭い頂上には僅かに一人の人を容れる餘地があるかないかである。それだから機關を救ふためには、獨りでドウウル岩に出掛けて、獨りでその岩上ををり、獨りでその淋しい所にをり、獨りで海岸を五リーグ離れた所にをり、獨りでその恐しい場所にもなく、遭難の場合には救助の手段もなく、憐れにも其處で死んだ可愛想な人の晒された骨の外には彼の周圍には人の氣配もなく、死の外に連れの無い恐ろしい所に我慢し得る人が必要である。そしてその上に機械を取り外す事が如何して出来よう。それには水夫許りでなく技師も必要である。そして如何なる困難にも堪へる準備が如何して出来よう！そんな仕事を企てる人は英雄以上であるに相違ない、彼は狂人に相違ない、なぜなれば超人間的力の必要である事業に於ては勇氣より以上有力なる狂氣の様なものがある。そして結局それは錆び付いた鐵の大塊のために人身供養をする様な馬鹿／＼しい事になりはせぬか？否、誰もそんな仕事のためにドウウル岩に出掛ける様なものはゐないであらうと云ふ事は確かである。機關は他の残存せる部分の同様放棄しなければならぬ。そんな仕事をする技師は確かに出ては來ないのである。何處から彼等はそんな人を探し出さうとするのか？

見て斯うした觀察が群集の喧しい談話の内容であつた。

會つて水先案内だつたシアルチール號の船長は、大きな聲で怒鳴つて皆んなの説を纏めた、——
 『イヤ、もう話は終りだ。彼處に行つてヂューランド號の機關を救ふ事の出来る人はゐない』
 『若し私が行かないならば、それは誰もさうする事が出来ない』と云ふ事になる』とインブランカムが云つた。

シアルチール號の船長は、突然その左手を空中に振り廻はして、そんな事は到底駄目であると云ふ確信を示す身振をした。

『若し彼がゐるて呉れたなら——』と船長が云つた。

デリユシエツトは彼女の頭を衝動的に振り向いた、そして言葉を挟んだ。

『私はある人と結婚したかつたのです』と彼女は無邪氣に云つた。

其處に沈黙があつた。

一人の男が群集の中から進み出た、そして青ざめて心配してゐた彼女の傍に立つて言つた、——

『デリユシエツトさん、あなたはあの人と結婚なさるのでしたか？』

それはギリアットであつた。

皆んなの目が彼の方に向いた。メス・レティエリーは彼の眞前に立つてゐた、そして彼を見詰めた。

彼の眼は不思議な光に輝いた。

彼はその水夫帽を取つて地の上に投げつけた、そして嚴然と彼を睨んで、現場に居合せたる人達には目も呉れず言つた、——

「デリュシエットは當然彼のものだ。俺はそれを神の御名に於て誓ふ」

第二章 西部海岸に於ける多くの驚駭すべき事件

翌晩の十時に満月が昇つた、然し如何に美しい夜であらうとも、又如何に風や海が平靜で都合よからうとも、漁夫達は其晩オギューラ・ベルや或はボルドー、或はウーメー・ベネー、或はブラトン、或はボルト・グラール、或はヴェーゾン灣、或はベレン灣、或はベビリー、或はチール、或はセイント灣、或はリツトル・ポー、或はゲルンセイの其の他の港灣から海へ出掛けようと思はなかつた、そしてその理由と云ふのは甚だつまらないものであつた、それは雄鶏が晝中に啼いてる聲が聞えたと云ふのであつた。

雄鶏が時ならぬ時刻に啼く聲が聞えると漁獵は中止された。

その晩の薄明の頃、烈しながらオンブトルに歸りつゝあつた一人の漁夫が驚くべき怪事に遭遇した。二つのブレーと二つのグリュンを越して彼方にあるウーメー・バラデーの頂上の左手に桶を倒にした様なトウジエルの高臺の浅水標がある、そして右手には人間の顔の様なセント・サムソンの浅水標がある。是等の二つの浅水標の中間で、その漁夫は始めて、第三の浅水標を見たと思つた。この浅水標はどう云ふ譯であるか？何時頃その地點にその浅水標が建築されたのか？それは何と云ふ淺瀬を示して居たのか？その浅水標は直ちに是等の疑問に答へた、それは動いた、それは檣であつた。漁夫の驚きは止まなかつた。浅水標は驚くべきものであつた、殊に檣の如きは尙更であつた、漁船であつ

た筈はない。誰も皆んな歸路に就いて居たのに、その船だけが出掛けて行つた。それは一體何物だつたか？そして彼は何をしやうとして居たのか？

十分の後徐々と動いて居たその船はオンブトルの漁夫の近くに來た。彼はそれを見なかつた。彼は權の音を聞いた、明かにそれには二丁の權しかなかつた。そこでその船にはタッター一人しか乗つて居なかつたらしかつた。北風であつた。だからその男はフォンテネル岬の沖で風を受けるために其處迄明かに漕いで行く所であつた。其處で彼は多分帆を揚げたのだらう。そして彼はモントクルヴェルとランクレスを廻航しようとした。如何した譯だらう？

その船は通過した。漁夫は歸宅した。同じその晩に、違つた時刻に違つた場所で、ゲルンセイの西海岸に散在して居たいろ／＼な人達が幾多の事實を目撃した。

オンブトルの漁夫が其漁舟を繋いで居た時に、マルテロ塔の第六號と第七號の附近にあつて、そしてドルイド岩の近くにある、クロチュールから來て居る淋しい道路に馬車を挽いて居た海草の馬車屋が、潮流に就て深い智識を要するがために誰も殆んど通らな場所でも然もノースロツクとサブロンニユースの方向に當つて海上遙か沖に帆を揚げた船を見た。彼は船乗ではなく海草を積んだ馬車屋であつたから、そんな事には少しも氣が付かなかつた。

馬車屋がその船を見てから三十分經過した頃、町の仕事から歸る途中にベレー・ブールを廻つて居た左官屋がギユナン、ルース・ド・メー、並にダリブ・ド・ルースの岩々の間を大膽にも走らせて居た船を突然發見した。夜は暗かつた。然し空は海の上迄も明るかつた——有り勝の事である——そして四

方を遠く迄見分ける事が出来た。此の船の外には目に見える船はなかつた。

少し下つて、ボルト・アソとボルト・アンフェの間にある海岸の魚洲を用意して居た蟹の採集者がブー・コルネイルとムールレットの間に居た船の行動を知るに苦んだ。其男は吃驚し手な水先案内者で、そして大急ぎで或る目的港へ到着せんとして端艇でその難所を冒険せんとして居たに相違なかつた。カナルで丁度八時の鐘が鳴つて居た時、コボ灣の居酒屋の主人がブー・ド・ジャルダンとグリユネツトを越した彼方で、そしてスーザンヌやらウエスターン・グリユンの極く近くで一隻の帆船を見て驚いた。

コボ灣から程遠くもないヴェイゾン灣のウーメーの淋しい岬で、二人の戀人同志が其夜二人が別れる前に名残を惜んで躊躇して居た。若い女は若い男に『私、あなたと一緒に居たつて構ひませんから行きません、私には澤山する仕事があるのです』と言つた。二人の別れの接吻は彼等の前を極く近く通過してメシセルレットの方角へ向つて走つて居たなり大きな帆船のために邪魔された。

コチロン・ビペーの住人であるル・ペール・デ・ノルギオ氏はその夜の九時頃氏の所有地であるラジャネロットと木の植えて居る廢庭の生垣に侵入者の破つた穴を調べて居た。損害の程度を調べて居た間、でさえも、彼は夜の其の時刻にクロック岬の周圍を大膽に進航して居た。一隻の漁船を見ないわけに行かなかつた。

暴風雨の翌日何時も海に多少の荒れがあつた時には、その航路は非常に危険であつた。舵手が少くとも凡ての海峡を心に暗んじて居ない限り、その航路を選ぶと云ふ事は無茶な話であつた。

九時半過ぎ頃、レキユエルリーで網打ち人が網を持つて歸る途中で暫らく立ち止まつてコロンベルとスーフルレツスの間で端艇の様のもを目撃した。その端艇は危険な状態にあつた。その場所で、非常に危険な烈風が突然吹き起るのは普通の事であつた。スーフルレツスと云ふ名は、偶然な機會で其處を通り合せる船に對して吹き付ける様に見える突然の烈風から命ぜられたのである。

月が昇つてゐたその時刻には、潮は満ちてゐて、海も穏かであるからリウーの小海峡で、リウーの鳥の淋しい番人は非常に驚かされた。長い黒いものが徐かに彼と月との間を通過した。高くそして狭いこの黒いものは、擴がつて動いてゐる屍衣に似てゐた。それは岩の背から出来てゐた岩壁の頂上の線に沿つて滑走した。リウーの番人は黒の淫賣婦を見たと思つた。

白の淫賣婦はトリー・デ・ベ・ゲモンに住んでゐる。赤の淫賣婦マルキー・パンクの北にある、シリユースに、黒はリウーメーの西のグラン・エタクトルに住んでゐる。月の輝く晩に是等の連中は外をコンと歩き廻はる。

その黒い形のものには確かに帆であつた。彼女が歩いてゐる様に見えた岩の長い群は實際走つてゐる端艇の船體を其の背に隠して、其の帆だけを見せる様にして居たのかもしれない。然し番人は其の時刻にリウーとラベシユレス、そしてアンギユリエールとレレー岬の間を冒険して走るなど何と云ふ大膽な事をする船だらうと彼は疑つた。そしてどんな目的を持つて居るのだらう？彼にはそれが黒の淫賣婦であつたと云ふ方が一層眞實の様に思へたのである。

月が森の中にあるセントピータースの時計塔を過ぎつゝあつた時に、ロツクイヌ城の軍曹は城の吊

り橋を吊り上げてゐながら、サンブユールよりも近いがオートカンネーを越した灣の端で確かりと北から南へ下航して居る様に見えた帆船を見た。

ブラアンモンの後にあたるゲルンセイの北海岸の、海面から峰の形をして突つ立つて居る岩壁や懸崖ばかりから成り立つて居た小灣の灣曲した中に不思議な上陸地點があつて、其に對して千八百五十五年以來此島に住み、そして多分是等の文章を書いた人であつた一人の佛蘭西人が、今一般に用ひられて居る「四階の港」と云ふ名をつけた。その當時モアと云はれた此の港或は上陸地は半ば自然的の、又半ば人工的の岩の高臺であつて、海拔約四千尺あり、海面とは傾斜面に二の大きな丸太を平行に併べて連絡されてあつた。漁船は鎖や滑車に依つて、二本の軌條の様な二つの大きな丸太の上を引き揚げられたり、或は引き下ろされたりした。漁夫達のためには梯子が備へてあつた。この物語のあつた頃には港には屢々密貿易者が來た。近寄る事が六ヶ敷ので、彼等の目的には適當して居た。

十一時頃二三の密貿易者——恐らくクリユバンがその助力を當にして居たその人達であつたらう——が荷物の袋を肩にしてモアの高臺の上に現はれた。一人の密貿易者は見張りをしなければならぬ、見張りをすると云ふ事は彼の仕事の一である。彼等は何物かを探し出した。彼等はブラアンモン岬の薄暗い外廊の彼方に突然出現した帆を見て驚いたのである。月が照つて居た。密貿易者等はそれが若しや大ハンウエス岩の後に待ち伏せしようとして居る沿岸巡邏船ではないかと疑を抱いて、精密に帆に注目した。然しその帆はハンウエイス岩を後にして、ブーブロンデルの北西を過ぎ、大海に出て水平線の青白い霞の裡に消へ去つてしまつた。

『あの端艇は一體何處に行のだらう？』と密貿易者が尋ねた。

同じその晩、日没後暫らくしてルブ・ド・ラ・ルーの古い化物屋敷の戸を誰か叩いて居たのが聞えた。それは褐色の衣服と、黄ろい靴下を着けて居た少年であつて、その着裝で、彼が小さい教會の小使であると云ふ事が分つた。提灯を手に提げて海邊を彷徨いて居た一人の年取つた女漁夫はその小供けた、そして次の様な問答がこの女漁夫と小さな書記との間に、その家の入口の前に話しかで續けられた。

『何んな用事かね？』

『此處の主人に用があります』

『今留守だよ』

『何處に御出でかね』

『わたしは知らない』

『明日は御在宅でしょうか？』

『わたしには分らん』

『こゝの方は立ち去られたのですか？』

『わたしは知らない』

『私は教區の新牧師のコードレーさんの所から來ました、牧師さんは此處の方を御訪ねしたいと望んで居られます』

『何處に居られるかわたしには分らない』
 『牧師さんが此處に住んで御居での方に明瞭御在宅か如何か聞いて来いと仰いました』
 『わたしには分らない』

第三章 聖書からの引證

其後二十四時間の間と云ふものは、メス・レタイエリーは睡りもせず、喰べもせず、飲みもしなかつた。彼はデリユシエットの前額に接吻して、まだ何の便りもなかつたクリユバンの安否を尋ね、彼は誰に對しても訴訟を提起する意志を持つて居ないと云ふ宣言書に署名して、そしてタングルイルを放免してやつた。

翌日の朝彼は腰を下すともなく又立つともなくデューランド號の事務所の卓子の上に半身を支へてゐた、そして話掛けて来る人には誰にでも親切に應對して居た。人々の好奇心が満足されたのでレ・ブラヴェイの邸宅は淋しくなつた、一般の人達は好奇心に驅られると同時に急いで慰問の辭を述べた。扉は再び閉められた、そして此の老人は又デリユシエットと只二人になつた。レタイエリーの眼に輝いて居た不思議な光が消へた。最初の悲報を受けて後彼の眼の中に一バイになつて居た悲しそうな眼付が又現はれて來た。

デリユシエットは彼のために心配して、ドゥースとグレースの忠言に依り、悲報の到着した時彼が編んで居た水夫用の一對の靴下を靜かに彼の傍に置いた。

彼は苦笑をした、そして斯う云つた。

『世間の人等はわしを馬鹿だと思つてゐるに違ひない』
 十五分許り沈黙した後で彼は云ひ足した。――

『御前が仕合である以上は何もかも善いのだ』

デリユシエットは靴下を持ち去つた、そして其の機會を利用してレタイエリーが長い間使ひ慣れて居た羅針盤と船の書類をも運び去つた。

午後になつて、食事時間の少し前に、戸が開かれた、そして黒い衣を着た二人の見慣れぬ人が入つて來た。その一人は老人であつて、他の一人は若い人であつた。

若い人と云ふのは既に此の物語の中に出て事た人であつた。

二人とも眞面目で重々しい様に見えた、然しその重々しさは違つて居る様であつた。老人の方は外見を整へる重々しさを備へてゐたが、若い人の方は心からの重々しさを持つてゐた。一方は習慣から生ずる。他方は思想から生ずる。

彼等はその着物の示す如く國教々會に屬して居た僧侶であつた。

若い人の風采に於いて人目につく第一の事實は、彼の容貌に明かに表はれて居る、その重々しさであつた、そしてそれは明かに彼の心から出て來たものであつて、彼の外貌には示されてない。莊重な熱情とは兩立しないものであつて前者は後者を純化して高めるのである。然し莊重な感じは個人的美容と云ふ人の目に付く表面的のものと連想する事は困難である。僧班に列して居るのであるから、彼

は少くとも二十四歳であつたに違ひない。然し十八歳以上には見えなかつた。彼は高揚されたる熱情のために創造された様な靈魂と、愛のために創造された肉體と云ふ是等二つの天の與へたものを持つて居た。彼は美しく、血色よく、清々しく細長く、そしてその風姿は曲雅であつた、そして若い娘の様な頬と優しい手を持つて居た。彼の舉動は、遠慮深くはあるが自然であつて快活であつた。彼の周圍にあるものは凡て皆な優雅で元氣よく、殆ど堪らない程であつた。彼の美しい表情はこの過度の人間的な誘惑を程よく正すのであつた、小供の様に白く規則正しい齒を現はす彼の笑の中に瞑想な敬虔なものがある。彼には大僧正の威嚴と小姓の様な優雅な所があつた。

殆んど汝にも見まはしい様な彼の美しい金色の毛髪は、彼の高く恰好の宜い前額に垂れ下つて居た。眉の間には、その顔上に擴がつて居る羽で掩はれた飛翔する思想に空想的に類似せるものを暗示する小さな二つの線が重なつて居た。

彼を見た人達は、慈悲深く、無邪氣で、純潔であの様な性質の人達の面前に居る様な感じがした、即ちその様な人達の幻想は人を聰明にし、その經驗は人を熱誠家にするのである。

彼の連れの老人はジャククマン・エロード博士其人であつた。ジャククマン・エロード博士は高教會に屬して居た、——此の宗派の制度は法王のない羅馬教である。其當時の英國の教會はブジーズム(ブジー博士の教義)と云ふ教義の形式で有力鞏固になつて來た幾多の努力に苦しめられて居た。ジャククマン・エロード氏は殆んど羅馬教の一種である英國々教のその宗派に屬して居た。彼は高慢で固苦しくて、偏屈でそして權力振るのであつた。彼の内的な洞見は殆んど皮相的に透入しなかつた。彼の

舉動は尊大であつて、その出現は目立つて見えた。彼の風采は貌下と云ふよりも師と云ふ方であつた。彼のフロックコートは法衣の様式で少し切つてあつた。彼は控の間の生れながらの主教であつた。彼が偶々英吉利生れであつて、神學教育を得けたと云ふ事は彼を新約全書よりも舊約全書になじませた。そして彼はその様な運命に置いたのであつた。彼の一切赫赫たる名聲はセント・ピーターズ港の牧師、ダレンセイ島の副僧正、ウインチェスターの大僧正代理と云ふ高職に含まれてゐた、確かに是等は名譽であつた。是等の名譽のためにジャククマン・エロード氏が相當の紳士にならねないと云ふ譯はなかつたのである。

神學者として彼は斯道の批評家の尊敬を博して居た、彼は英吉利のソルボンヌたるアーチエスの法廷に於ける權威者であつた。

彼は眞に學者の風采を備へて居た、即ち學者的な眼の收縮、逆立した鼻孔、終始露出した齒、薄い上唇、厚い下唇等である。彼は各種の學位、高祿、畏友大僧正の信任、並に常に彼のポケットに入れて居た聖書の所持者であつた。

メス・レティエリーは全くボットして居たから二人の僧侶が入つて來ても、何の影響もなく只僅かに眉を動かしただけであつた。

ジャククマン・エロード師は前に進んで、御辭儀をして、彼の最近の進級を眞面目な重々しい威儀のある言葉で披露したのであつた、そして慣例に従つた彼は町の人達殊にメス・レティエリー氏に、教區の後任者たるセント・サムソンの新教師であつて今後メス・レティエリー氏の掛り教師であるジョー。

エベネゼー、コードレー氏を紹介せんがために來訪したのであると云ふ事を告げた。

デルシエットは立ち上つた。

エベネゼー師であつた若い教師は彼女に挨拶した。

メス・レタイエリーはエベネゼー・コートレーを見てそして「悪い船乗」と呟いた。

グレースは椅子を勧めた。二人の來訪者は卓子の近くに腰を下ろした。

エロッド博士が話を始めた。此の家の主人の上に大きな災害は生じたと云ふ事を彼は聞いて居た。デューランド號は沈没した。彼はレタイエリーの牧師として慰問と忠言をするために來た。此の難破は不仕合であつた、然し償ひの出來ない事ではなかつた。吾々の心の中を調べて見ようではないか、吾々は幸運に得意になるものであるか？幸福の海は危険である。困難には快よく堪へねばならぬ、神の御意は不思議である。メス・レタイエリーは破滅した。然し富は危険であつた。諸君は不信の友人を持つかもしれない、貧困は彼等を四散せしめ、諸君を只一人にするであろう。デューランド號は年收一千磅を齎らしたとの話であつた。それは聰明な人にとつては十分以上であつた。吾々は誘惑から逃れ去ろうではないか、吾々は黄金を渴仰しない様にしようではないか、損害に頭を下けてそれを無視しようではないか。孤立は善果に満ちて居る。アジャーが彼の父のデベオンの驢を引張つて歩いた時に温い泉を發見したのは淋しい所であつた。吾々は測り知る事の出來ない神の御心に違はない様によ。僧のジョツプは貧困の揚句に富を信じた。デューランド號の沈没は、たとへそれが一時的のものにもせよ、何等の利益もあるまいとは何うして云ふ事が出來よう。例へばジャクスマン・エロッド博

士の如きもシエフィールドに於て目下盛んに行はれて居る有望な事業に若干の投資をして居たのである。若しメス・レタイエリーがその殘餘の財産を以て同じ事業を經營して見たいと思ふならば、彼は彼の資本を其の都會に移したかも知れない。それは目下波蘭に起つた叛亂を鎮壓に従事して居る露帝の軍隊に供給する武器軍需品の廣汎なる製造工場であつた。それには三百割の利潤を得られる望があつた。

「露帝」と云ふ言葉にレタイエリーは目が醒めた様であつた。

彼はエロッド博士の話を遮つた、――

『私は露帝の軍隊には關係したくない。』

ジャクスマン・エロッド師が答へた、――

メス・レタイエリー、皇族は神に依つて認められて居ます、聖書に『ケーザルのものはケーザルに返せと書いてあります。露帝とはケーザルの事なのです』

レタイエリーは少し又夢に後戻して、そして呟いた、――

『ケーザル！――ケーザルとは誰の事です？そんなものは、わしは知りません』

ジャクスマン・エロッド師は續いて勸告した。彼はシエフィールドの問題を押し付けなかつた。

ケーザルを侮蔑する――のは、共和主義であつた。共和主義者たる人を理解する事が出來た。その場合には、彼は共和國の方に彼の心を轉ずる事が出來た。メス・レタイエリーは英吉利よりも亞米利加に於ての方が一層よく彼の財産を回復し得たかもしれない。若し彼がその殘餘の財産を非常に有

利なる事業に投資したいと望んだならば、彼は只二萬人以上の黒人を使用して居るテキサス富源開發の大會社の株を持てばよかつた。

『わしは奴隷などは相手にしたくない』とレタイエリーが云つた。

『奴隷は聖書に承認された制度です。『若し人が奴隷を殴つても決して罰せらるゝ事はない。なぜなれば奴隷は彼の金錢ある』と云ふ事が書いてあります』とエロッド師が答へた。

グラースとドウースとは部屋の戸口で博士の言葉に聞きとれて居た。

博士は話を續けた。前に云つた様に、彼は何處から見ても立派な人であつた。そしてメス・レタイエリーは個人的にも社會的地位に相違があつたが、彼は非常に親切に精神上並に世事上の援助すらも提供する様になつて來たのである。

若しメス・レタイエリーの財産が減少して露西亞又は亞米利加の投機事業に有利なる投資をなす事が出來ない程であつたなら、何故に彼は彼に似合の政府の保護を受けぬのか？彼に對している／＼澤山な立派な地位が開放されて居た、そしてこの牧師は喜んで彼を推舉しようとして居た。總督代理の地位が其時丁度空いて居た。メス・レタイエリーは人望があつて尊敬されて居た、そして大僧正監督たるジャクマン・エロッド師はメス・レタイエリーのために此の地位を與へる努力を吝まなかつたであらう。總督代理は重要な地位である。彼は皇帝代理として議會の會期中町の議事堂の會議や法律の實施に出席するのである。

レタイエリーはエロッド博士を見詰めた。

『わしは處刑するのを好まんです』と彼は云つた。

此の時迄同じ語勢で話して居たエロッド博士は今嚴な調子になつて、彼の音調は少し變つて來た。

『メス・レタイエリー、死の苦痛は神の命じ給ふ所です。神は總督の手に劍を置かれました。聖書には「眼には眼を以て對し、齒には齒を持つて對せ』と書いてあります』

『エベネゼー師は、極く少し程彼の椅子を博士の方に引き寄せ、そして自分だけ分る様な聲で話した、――』

『此の人の云つてゐる事は命令されてゐるのです。』

『誰に依つて？何物に依つて？』同じ調子でジャクマン・エロッド師が尋ねた。

『若い人が騒ぎ聲に答へた、『彼の良心に依つて』』

ジャクマン・エロッド師はポケットに手を入れて、厚く綴じた釦金のある小さな本を取り出して、そして聲高く云つた、――』

『良心は此處に在る』

その本は聖書であつた。

それからエロッド博士の言葉の調子は、柔くなつた。彼はその非常に尊敬して居たメス・レタイエリーのために御用を勧めたい望みであつた。彼の牧師として相談相手となるのは彼の權利であつて又義務であつた。然しながらメス・レタイエリーは意の儘にした。

メス・レタイエリーは更に壓倒的な夢遊状態に陥入つて、最早話を傾聴しなかつた。彼の傍に腰を下

ろして物思はしけであつたデルシエツトも又彼女の眼を見上げなかつた、そして彼女が沈黙して其の場に在ると云ふ事は餘り激しくならなかつた談話を更に手持無沙汰にしたのであつた。何も云はない立會人はなんとなく重々しいものである。然しながらジャクマン・エロード博士はそれを感じない様であつた。

レタイエリーが最早返事をしないので、エロード博士も勝手な事をした。相談は人から受ける靈感は神から受ける。僧侶の相談にも靈感はある。相談を引受けるのはよろしいが、拒絶するのは危険である。ソコーはナザニエルの勤告を侮つた爲に十一の悪魔共に捕へられた。チブユリアヌはその家から使徒アンドリユーを逐ひ出した、めに天刑病に罰つた。魔術師のバルジュサスは聖徒ボロの言を笑嘲した、めに罰があつて目が潰れた。エルクセイとその姉妹のマルタとマルテナの三人は高さ三十リグもあるキリストは悪魔であると明かに彼等に證明したヴァレンチナスの警言を無視した爲に終身懲役に處せられた。ジュデスと云つたアホリバマは會議の議決に服従した。リユーバンとブニールは彼等の名が實際に示すが如く天からの相談に傾聴した。リユーバンとは「幻影の子」と云ふ意味であり、ブニールとは「神の顔」と云ふ意味である。

メス・レタイエリーは手で卓子を叩いた。

『おゝ、それは私の通りであつた』と彼が叫んだ。

『如何して？』とジャクマン・エロード師が訊いた。

『それはわたしの通りです』

『あなたの過ち？何故です？』

『ヂューランド號をわたしが金曜日に出航させたからです』

ジャクマン・エロード師はコードレーの耳に囁いた、――

『此の人は迷信深い』

彼は聲を高めそして教訓的な語調で再び云つた。

『メス・レタイエリー、金曜日を信心するなどは下らない事です。そんな童話などをあなたは信じてはいけません。金曜日は他の日と同じでチツトも變りはありません。寧ろそれは幸運な日です。メランドは金曜日にセント・オーガスチンの町を創立しました、ヘンリー七世がジョン・カボットに委任状を與へたのも金曜日でした、メーフラワー號の巡禮者がプロヴィンスタウンに上陸したのは金曜日です、ワシントンは千七百三十二年二月廿二日の金曜日に生れました、クリストファー・コロンブスは千四百九十二年十月十二日の金曜日に亞米利加を發見しました』

是等の話をした後で彼は立ち上つた。

一緒に連れ立つたコードレーも亦立ち上つた。

グラリスとドゥースとは二人の僧侶が暇乞をしようとして居るのを見て折戸を開いた。

メス・レタイエリーは見もしなければ、聴きもしなかつた。

ジャクマン・エロードは、きれぐにコードレーに云つた、――

『彼は吾々に撻揆もしない。是れは悲しいのではなく自失して居るのである。彼は氣を狂はすに違

ひない』

然しながら彼は卓上から彼の小さな聖書を取り上げてそれを伸ばした手の間に支えた。——丁度人が鳥の飛び去る事を恐れて手にもつて居る様に。此の態度は其の場に居合せた人達に氣を付けさせた。グレースとドウスとは熱心に前方に身を屈めた。

彼の聲は出来得る限りの莊重を極めたものであつた。

彼は話し始めた、——

『メス・レティエリー、吾々は聖書の一頁を読んだ上で御別れしませう。聰明なる人達が苦惱の生涯に於て慰安を得るのは此の書物からです。不信心の儕はそれ／＼理屈を持つて居ます。然し信心家は直ちに此の聖書の中に信仰の實を持つて居ます。手に入れた最初の本は何かの機會で、それを開けば信仰上の相談相手にならぬこともありません。しかし聖書はどの頁を開けて見てもそこに天の啓示が現はれて居ます。それは惱めるものに取つては神の恩恵であります。然うです聖書は彼等の傷を吃度療す藥であります。苦惱に接した時、この聖書に相談するが宜いのです。——即ち場所を選ぶ要はありません、何處でも開いて、目に付いたその文を信じて讀めば宜いのです。人間が撰擇しなくとも神の方で選んで下さつてあるのです。神は何が吾々に一番適當して居るかと云ふ事を宜く御承知です。神の指は吾々が讀むを吾々の目には見えない様に差して居ますどの頁でも、間違なく信仰の光に輝いて居ます。吾々は他の光明を求めないで神の光明をしつかりと求めようではありませんか。それに天からの言葉であります。信仰と敬虔の念を呼び起す經句の中に吾々は屢々吾々の現在の苦惱の神祕的

な意義を見出すのであります。吾々は先づそれに傾聴してそしてそれに服従しようではありませんか。

メス・レティエリー、あなたは惱んで御在です、然し私は此處に慰藉の書を持つて居ます』

ジャクマン・エロード師は鉦金のバネを押して、彼の頁の間に挿し入れた。そして彼はその手を暫くの間その開いた本の上に乗せて、心を静め、そして心に徹する様に彼の眼を見上げて聲高々と讀み始めた。

彼の讀んで行つた章句は次の通りであつた、

『そしてアイザックは夕刻野原に於て沈思するために出掛けた、そして彼は腫を上げて、彼方より來る駱駝を見た。

そしてレベツカも彼女の腫を上げた、そして彼がアイザックを見た時、彼女は駱駝から下りた。

なぜなれば彼女は召使に云つた、私達に逢ふために野原を歩く此の人は誰です？』

『そしてアイザックは彼女を彼の母のサラの天幕に連れて行きて、そしてレベツカを貰つた、そして彼女は彼の妻となつた、そして彼は彼女を愛した、そしてアイザックは彼の母の死んだ後も慰められた』
コードローとデルシエットは互にチラツと見合つた。

第二卷

第一編 悪魔のギリアット

第一章 近寄り難く、立退き難き場所

前夜ゴルンセイ海岸の様々な場所から様々な時間に見えたボートは、讀者が御察しの如く、古い和蘭式の單棉船であつた。ギリアットは岸に沿ふて、岩間の水路を擇んだ。それは一番危い道であつたが、又一番眞直ぐな路であつた。最も近い道を行かうといふのが、その唯一の考へであつた。破損した船は待つてはゐない。海は急ぎ立てる借金取りである。一刻の遅延は取り返しのつかぬことになるだらう。彼の心配は、危険に迫つてゐる機關を、至急取り外さなければならぬといふことであつた。彼がゲルンセイを引揚げた目的の一つは注意を惹くことを避ける爲めであつた。彼は法網から通れる者のやうに、狐鼠々と出發したのである。そして人間の目から奈何して隠れようとかと配慮してゐるやうであつた。恰も聖サムブソンと、聖ピーター・ボートを眼の前に見て通るのを好まぬものゝやうに、東の海岸を避けて、比較的住民の少ない、反對の岸を靜にすりぬけて來たのであつた。暗礁の

間ではたゆまず橈を漕ぐことが必要であつた。併しギリアットはそれを科學上の原則に基いて處置した。靜かに海水を汲み取つて、そろ／＼とそれを落しながら、暗いうちを精一ばいに、又成るだけ音を立てぬやうに進んだ。人は彼が善からぬ行爲をやつてゐると信じ得られぬでもなかつた。眞實のところ不可能にちかい企てに没頭して、しかもあらゆる機會に反對せられ、生命までも賭けてゐながら、彼は只競争者の出でんことの外何にも恐れなかつた。

日が明け初めると、空間に開いてゐるらしい、人知れぬ眼は、海の唯中に、最も淋しく、最も危険な場所の一つに、二つの物を認めたであらう。一つの物が他の物へ近寄るまゝにその間の距離は減じて來た。巨きな浪の動くなかに、殆ど認められない様であつた。それは帆をかけた一隻の小舟であつた。此小舟の中に一人の男が居た。それはギリアットを載せたボートであつた。モ一つのものは動かす、巨きく、黒く、奇怪な形を浪の上にぬき出してゐた。二本の高い柱は潮の外、宙に一つの水平は横木を支えてゐた。それは二つの柱の頂上に架けた橋のやうであつた。此遠くからは何物だか得體の知れぬ變な形の橋は、互に二つの方立を觸れ合はしてゐた。それは門に似てゐた。廣々した海原の只中に、何の爲めに斯麼ものが立つてゐるのか？それは素敵に大きなドルイド教の拜場で、王者の出來心から、其處、海の眞中に建てられ、深さにその仕事を比例させるに馴れた手によつて築かれたものと、人は想像したかも知れない。その粗末な輪廓は、晴れた空にくつきりと欹立つてゐた。

晨の光りは東に強くなつた。地平線の明るさは海上の暗さを濃厚にした。反對の空には月が落ちかけてゐた。

此二つの柱はゾウブル岩であつた。その間に槌と挟まれた、巨大な塊りは、デューランド號の殘骸であつた。

斯くの如くその餌を儲りと押へてみせびらかしてゐる岩は、見るも恐ろしかつた。無生物は時として、人間に對して、陰險な敵意を賦與せられてゐるやうに見えるものだ。此岩の態度にも威嚇するものがあつた。二つの岩は待ち構へてゐるやうだつた。

打ち負かされた舟と、勝ち矜つた岩——是以上に傲慢不遜なものはない。二つ岩は、前日の嵐で、未だ水が流れて、まるで今角力をとつた角力者が汗をかいてゐるやうだつた。風は凩いでゐた。海は穩かに小波を立てた。水面に、泡の美しい條が立つて、暗礁の在所を示した。蜜蜂の呟きに似た音が海から聞えた。二つの黒い柱のやうに、直立するゾウブル岩を除く他、あたりは皆眞平であつた。岩は或る高さまでは海藻で髭が生えてゐた。それから上のその峻しい腰は、ところ／＼鏝のやうに輝いた。彼等は再び戦はうと手ぐすねひいて待つてゐるやうだつた。見る者は此岩は、その頂きを海の底に出してゐる山脈に、根を占めてゐると思つた、その外觀は一種の悲壯な力に満ちてゐた。

通例海はその行爲を隠蔽する。海はその行爲が曖昧ならんことを望む。海の測り知られぬ深底は沈黙を守る。海は滅多にその奥底を打ち明けるを肯じない神祕に自身を包むものだ。我々は海の野蠻な性質を知つてゐるが、誰かその暗い行爲が奈邊に及ぶかを語り得るか？海は明け放しで、同時に秘密である。海は用心深くその行爲を隠蔽し、その行爲をあらはさうとしない。船を破り、浪でそれを覆ひ、そして恥ぢるやうにその仕事を嘆み込んでしまふ。海の罪の中には偽善がある。殺し、盗みその

贖品を隠し、知らんふりして、微笑んでゐる。海は吼えるが、又穩かなこともある。併し此處にはそんなことは一つもなかつた。水面以上に、デューランド號の破壊した船體を持ち上げてゐたゾウブル岩は、勝ち矜つたふうを見せてゐた。二つの岩を、灣の中から差し伸べて、船の亡き骸を、嵐に曝らしてゐる二本の怪物の腕として、想像に描いても差支えはあるまい。その有様は刺客がその兇行を見せびらかしてゐるやうであつた。

時刻の森嚴は場面の印象を一層力強くした。曙の神祕な壯麗には我々の夢の世界と、現實の世界との間にある境界の如きものがある。こんな時刻の過度期にはそれに何かしら幽玄なものがある。二つのゾウブル岩の、巨大な形は、恰も花文字のHのやうで、デューランド號はその間の横に曳いた一字となつて、壯大な薄暗の裡に地平線を背景として現はれた。

ギリアットは海員の服装をつけてゐた——ゲルンセイ襦袢、毛糸の靴下、大きな靴、手織りのジャケット、衣袋のついた、地の厚い股引、頭には、その頃水夫の間に大流行で、第十八世紀には「水夫帽」として知られた、赤い屑糸の大黒帽子を被つてゐた。

彼は岩を認めて、その方へ舵をとつた。

デューランド號の状態は、沈没した船と正反對であつた——それは宙に架つた船であつた。

是以上變手古な問題が救船者に提出せられたことが嘗てなかつた。

ギリアットが其處に着いたときは、日中であつた。

我々が既に言つた如く、そこに海といふものは僅よりなかつた。かすかに水の動くのは、岩の間に

それが全然閉ぢ込められてゐたからであつた。大小の水路は何れもこの小刻みな運動に従ふのである。水路の内部は、多少に抱らず、常に白い泡が立つものだ。ギリアットは迂潤とはツウブル岩に近寄りなかつた。

彼は測鉛を三四度も投げてみた。

彼は積み荷を卸した。

永い旅に出なれてゐるので、彼はいつも必需品の數々を家に用意してゐた。彼はビスケット一袋、ライ麥の粉一袋、鹹魚一籠、清水の入れた大きな罐一個、花を濡いたノルウェイ箱に二三枚の粗末な羊毛の襦衣、防水布の外套、タール塗の防水布、夜、彼が服の上から羽織る羊の皮などを入れて携へた。ル・ビユ・ド・ラ・リュを去るとき、彼は以上のものと一緒に大きなパン一塊を取り急いで小舟に積み込んだ。彼は急いだので、道具としては只その大きな鍛冶用の金槌、鉈、小斧、結節のついた繩をもつていつたつきりだつた。絡み罫と、繩梯子とを用意していけば、どんな峻しい岩にでも登れる。又物馴れた水夫ならばどんな急傾斜にでも攀ち登る道を見付けるに困難でない。セルリ島に遊ぶ者は、どんなことをアーヴル・ゴスランの漁夫たちが、その節結のついた繩でやり伴ふせるかを知るだらう。ギリアットの鉤絲も、その外の漁具も皆小舟に積まれた、彼はそれを只器械的に、習慣によつて其處に置いたのであつた。といふのは若し彼の計劃が永引くならば、彼は岩や暗礁に富んで魚網や延繩の必要が少くない多島海に、或る時期の間住まふと思つたからである。

ギリアットが大岩についてまはる時は、速き潮であつた——彼の目的に都合のいゝ状態。分れる潮

は小さい方のツウブル岩の根本に、水平に、或はちつとばかり傾斜し、持送りに支えられた奇怪な形の板のやうな、盤岩が露はれてゐた。此盤岩は時に狭く、時に廣く、大きな垂直な巨大な圓柱に沿つて、不平均な距離を置いて立ち、薄い蛇腹の形をして、二つの岩の間に舟體を膨らかしてゐるチュールランド號の眞下のところまで續いてゐた。破船は萬力にはさまれたやうに、其處にしつかりと押へつけられてゐた。

此歩廊の連續は近寄つて、位置を測るに便利であつた。それは又小舟の中のもの、假りに卸すのに便利であつた。だがその水面上に在るのは僅か二三時間に過ぎないので、急いでする必要があつた。上げ潮と共に、盤岩は再び泡の下になるのであつた。

ギリアットが小舟を突入せしめて、停止したのは此盤岩の前にあるいくらかの平面、いくらかの傾斜であつた。濕つて、ぬら／＼した海藻が厚くその上を覆ふて、そこ／＼に傾いた表面を一層滑つこくした。

ギリアットはその靴を脱ぎ、跣足でぬら／＼した海藻の上に跳び下り、岩鼻に小舟を繋いだ。それから彼は花崗石の蛇腹に添ふて、出来るだけ遠くまで進み、破船の直下の岩に着いて、下からそれを檢めた。

出ヅユールランド號は、捕へられ、吊り下げられ、水面上約二十呎ばかりのところ、二つの岩の間に箆め込まれたかのやうであつた。舟をそこまでもつていつたのを見れば、海は餘程荒れたに相違ない。荒らい海が斯處ことをするのは、大洋に馴れた人には別段驚くに足らぬことである。單に一例を引

け、千八百四十年一月十五日、ストーラ灣で、一暴風はその猛威を揮つて、双桅船を、殆ど無疵のままに、コルヴェット型ラ・マルヌ號の破船して上を、すつかりと乗り越さして、懸崖の裂目に、槍出しを先きにして、動かぬやうに嵌め込んでしまつた。

併しズウブル岩は單にデューランド號の一部を持つてゐるつきりであつた。

浪から波はれた船は、恰も旋風の爲めに、水から根抜きにされたやうなものだ。颶風は舟を逆巻く浪の反對の力に對して捻ぢたのであつた。又舟は斯くの如く時化の双爪で反對の側に捕へられて、恰も木舞ひのやうにボツキと折られたのであつた。機械と水掻車とを具へた艫部は、泡の中から持ち上げられて、あらびの限りを盡くした旋風によつて、ズウブル岩の隘路に追ひ込まれ、その中腹まで没入して、そこに止まつたのであつた。嵐の打ち下した手元は狂るはなかつた。斯く二つの岩の間に追ひ込むのに、嵐は巨大な金槌をもつて打つたやうであつた。前甲板は拂ひ去られ、海の中に捲き込まれ、暗礁の間で、粉味塵になつた。

船艙は破れて落ち込み、溺死した牛の屍體を海上に散亂せしめた。

前部の舷側、船牆の大部分は在舷水掻車の覆ひや、小斧一打で容易く落される程破損した締め金の御蔭で、なほ捲索にブラ下つてゐた。

こゝかしこ梁材、船板、帆布の屑、鎖の切れ端、その他破船の殘物にまじつて、打つ碎かれた、ぎざ／＼な岩の破片が散らばつてゐた。

ギリアットはデューランド號を細密に検査した。龍骨は彼の頭上に屋根の狀をなした。

晴れた空は廣く、遠く水の上に延びて、かすかな風で、ホンノ僅か皺が寄つた。太陽は廣大な空色の圈の中央に、かゞやかしく昇つた、絶えず水の滴りが破船を放れて、海に墜ちた。

第二章 遭難目録

二つのズウブル岩は形も亦高さも相違してゐた。小ズウブルは彎曲し、尖つて、其上にやゝ軟かである赤色の、長い岩脈が枝をなして、花崗石の内部に分け入つてゐた。此赤い堤防の端には攀ぢ登るに都合のよい破面があつた。此破面の一つは、破舟の稍々上に位置して、その中に塑像を安置せられる、壁龕となるまで、浪の爲めに精々細工せられ、掘り出されてゐた。小ズウブルの花崗石は表面は圓く磨かれて、觸つてみれば、恰も試金石のやうに軟かであつた。けれどもその軟かさは、その丈夫さを損はなかつた。小ズウブルは一端に於て恰も角の如くなつて終つてゐた。大ズウブルは磨かれて、滑かたで、つや／＼して、垂直で、石工の鏝で方形に切られたやうに見える。一枚岩で、黒い象牙で出来てゐるやうだつた。一つの穴、一つの裂け目もその滑かな表面になかつた。その傾斜は近寄り難く見えた。罪囚でもそれを遁走の用に使ふことは出来なからうし、又鳥と雖、その巢をかけることは出来なかつた。その頂には平面があつた、丁度「人岩」のやうに。けれども大ズウブルの頂きには登れなかつた。

小ズウブルに登ることは出来るにしても、その頂上に留つてゐることは出来なかつた。大ズウブルにはその頂きに留まることは出来ても、それに登ることは出来なかつた。

ギリアットは模様を眼ざとく見てとり、小舟に戻り、その中の物を一番大きな平岩に陸揚して、防水布の中に巻き込み、固い丈夫な梱荷となし、繩をつけ、包みを浪の届かぬ、とある岩の隅に押し込み、それから小ヅウブルに手をかけ、跣足で踏ん張り、角から角、凹んだところから凹んだところを攀ぢ登り、遂に高く破船と同じ平面にまでとどいた。

水掻車の高さに達したとき、彼は船首にとび移つた。

破船の内部は慘憺たる有様であつた。

大争闘の痕が到る處に看られた。其處には海と風との恐ろしい荒らびが明かに見えた。暴風雨の行爲は海賊の暴行に似てゐる。蹂躪せらるゝ、引つ剝がされた破船以上に犯罰の犠牲に似たものはない。嵐の雲、雷、雨、浪、暗礁、是等が恐ろしい共犯者である。

引ん剝がれた甲板に立つなら、嵐の靈の烈しい足踏みのやうなものあることを夢想する。あたりは到る處その荒れた痕跡がある。鐵細工の變に捻れてゐるのは、風のやつた恐ろしい震動を證明した。甲板の間には癡狂院の檻房を見るやうに、あらゆるものが破壊せられてあつた。

その餌をすた／＼に打ち砕くこと、海程ひどい獸が居ない。浪には曲り爪がいつばいにある。北風は嘯む。白濤は喰ひ盡す。浪は飢えた顎をもつ。海は、巨大な前脚を持つ、獅子の如く捕らへると同時に引き裂いて、打つ。

デュラドン號の目立つた破壊は特に細密精細に亘つた一事であつた。それは身の毛のよだつた引ん剝しと、掠めとりであつた。その多くは計畫をきめて爲されたやうであつた。見る者は覺えず叫んだ

『なんとといふ悪戯だ！』と。裂けた板は其處此處美術的な縁が出てゐた。此特異は颶風の荒らびに通である。削り、裂き取るのは偉大な荒掠者の出來心である。その仕方は本業的な拷問者のそれである。それが爲す災禍は、巧妙な刑罰の觀を呈する、人はそれが人間の一番惡るい慾情に基いて激成せられたと想像するであらう。それは野蠻人の如く残酷を以て典雅ならしめる。それは殺す傍ら骨又骨を解剖する。それはその犠牲を苦め、自らの復讐を爲し、その仕事を樂み、それは惡意のつまらぬ仕業にまで墮するやうだ。

颶風は我々の緯度では稀有である。その爲めに、普通それを豫期してゐないから、一層危険である。強風の途に當る岩は嵐の樞軸となる。恐らく嵐はヅウブル岩を中點にとつて、その周圍を旋廻したのであらう、そして斯く突然、岩の抵抗にあつて龍巻にかはつたのであらう。一度颶風が起れば、船は石投器にかけた石よりも軽くなるのである。

チユーランド號の受けた傷は、人間の體を二つに裂いたやうなものであつた。舟は胴體が割れて、臟腑みたやうな石のかけらが中から澤山出た。いろ／＼な綱具が流れ、震ひ、鎖がちや／＼に鳴り動いて、岩の神経や織緯は露き出しになつてゐた。碎けてゐないものは外づれてゐた。

板金の碎片は馬梳きのやうに釘が立つてゐた。あらゆるものが破壊の痕跡を止めてゐた。木挺は只鐵の一片と化し、測深錘は一塊の金屬と變じ、滑車は木屑に、帆桁は繩の切れ端になつて、纏れた繩の持や、帆の縁を縫つた糸などが、壞滅の痕を示してゐた。あたりは皆慘憺たる破壊の仕業があつた。鉤を外づされ、釘を引き抜かれ、碎け、廢物となり、歪み、穴があき、元の面影を止めるものとなか

つた。その恐ろしい塊りに、何一つくつき合つてゐるものがなく、皆裂け、外づれ、壊れてゐた。其處にはあらゆる争闘の場面に特有な何となしに辻褃の合はぬ、又流體の混亂——戦争と稱する人類の争ひや、渾沌と稱する物質の混亂まで——があつた。あらゆる物が沈み、流れ去つた。嘗てはその勝ち誇つた色を示した權威ある構造は今とはたゞ何をしてゐるのだらう。

浪は此重傷を負ふ孤獨の浪人に對して、輕蔑してゐるかの様に、下からそのしぶきを吐きかけてゐた。

第三章 丈夫だが、安全でない

ギリアットは舟が一部分だけ残つてゐるとは思ひがけなかつた。

シエルチエル號船長の記録は、他の點にはなか／＼詳しかつた岩が、斯處に中央から二つに割けようとは期待してなかつた。此破壊が起つた刹那はえらい時化のうちシエルチエル號の船長が「悪魔の物音」を聞いたときであつただらう。船長は此大浪がぶつゝかる直前に、遠ざかつてゐたに違ひはない。そして彼が大浪と見たのは龍巻であつただらう。後に彼が破船を見に、近寄つたときには、彼は單に船の残り岩塊の間に挟まつた残りを見るを得たのであつた。換言すれば船部は大きな穴となつてゐたのだ。

それだけを除けば、シエルチエル號船長の記録は嚴密に正確であつた。船皮は用に堪えなかつたけれど、機關は完全であつた。

斯る偶然に破船には火事に於るか如く屢々である。海難の理論は人類の智恵が及ばぬところである。帆檣は短かく折れて、舷側に落ちかゝつてゐた。煙筒は曲つてさへもゐなかつた。機關を支へた大きに鏡板は、それを一緒に保持して、只一片となつてゐた。水掻車の木製の外箱はバラ／＼にはなれて、窓の鏡戸の薄板のやうだつた。けれどもその隙間から見える水掻車それ自身は立派であつた。只その二三の浮標が失くなつてゐるきりだつた。

機關の外、大きな後部の揚錨機が破壊を免れた。その錨鎖は其處にあつた、そしてその小桁の造りの頑丈な御蔭で、索捲きの緊張して板から離れ去らぬ限りは、なほ用にたへた。甲板の牀は殆ど到る處歪んでゐた。そしてすつかりガタビシ／＼となつてゐた。

地方、船側板は二箇のゾウブル岩の間に挟まつて、支へられてゐるので、丈夫さうに見えた。

この機關だけが保存せられたことは少し皮肉であつた——不幸の皮肉に何物かを加へた。見えない力の暗い悪念は、時として斯處ひどい嘲笑をやる。機關は助かつた、けれどもその保存はそれを少しも損失に終らしめぬのではなかつた。洋は只それを暇に飽かして壞はさうとしてゐたのだ。それは猫がそのとつた鼠を翫つてゐると同様であつた。

その運命は其處に留まつてゐて、日々に解體せられることになつてゐた。それは荒い海の玩具になるのであつた。それはそろ／＼と小さくなつて、恰も融けるやうに失くなるのであつた。それに對してどうしやうか？此巨大なると同時に繊巧な、機械と齒車との塊り、その重さに釘付けにせられ、その寂寥の裡に破壊の要素に渡され、岩に挟まれて、風と浪との運動に曝露されたものが、その酷い場

處の襲みの下に、徐々たる破壊を免れるといふことは、想像するさへも狂氣の沙汰であつた。

デューランド號はヅウブル岩の捕虜であつた。

どうして彼女がその位置から退り得られやうぞ。

どうして彼女がその捕はれから救ひ出されやうぞ。

人一人、免れることが既に難しい。それであるのに問題は斯うだ——巨大な、面倒臭い機關の免れ！

第四章 準備測量

ギリアットはそのいろんな仕事で八方から責められた。中にも緊急なことは、小舟の安全な繫留所を捜すにあつた。次には自分の雨宿りであつた。

デューランド號は、右舷よりも、左舷を下にしてゐるので、右舷の水掻車は左舷のよりも高かつた。

ギリアットは右舷の水掻車の覆ひの上に登つた。其場所から、よしや岩の瀬戸が急角度を爲して、ヅウブル岩の後にのび、二三の舷を出してゐたけれど、彼は地形を視察することが出来た。

此測量は彼の行動の豫備であつた。

ヅウブル岩は、既述の如く、鉛直の非をもつた小さな懸崖の、あるかなきかの小徑に對つて、狭い入口を作る、二箇の高い破風の端のやうであつた。斯く斧を以て斷つたが如く、奇妙な形の通路を、原始的海底の構造に見るとは稀有でない。

此隘路は九十九折で、引潮のときでさへも、ついで水のなかつた例がない。非常に激動せられた水流は、端から端に、始終それを横斷した。その曲り角の鋭さは、風次第で、便利よくも、又不便利にもなつた。時にそれはウネリを破つて、それを瀧落しにする、又時にはそれを激成せしめた。此後の結果を來すことが一層屢々であつた。障害物が海を憤らせて、それを極端に押し進める。泡は浪の誇張である。

此狭く、曲りくねつた岩間の水路に於ける風は、同様な壓搾を受け、同様な悪性となるのである。嵐が小便づまりをしたかたちである。その素敵な音はなほ素敵で又鋭い。それは棍棒であり、投槍である。それは引つかたはら突き貫く。嵐が戸の隙間を漏れる風となつたと思へばよい。

こんな海の街路をその間に残してゐる二つの岩の鎖は、ヅウブル岩より低い平面に、臺をつくり、漸次低くなつて、遂には浪の下の或る距離に於て、全然沈没する。

ヅウブル海峡よりも高さが低く、けれども一層狭い、も一つの同様な海峡が、隘路の東の入口をつくつてゐた。岩の峰は二重に延びて、群岩の極端に、四角な城砦の如く立つ、「人岩」まで、水面下に海路のやうなものを作つてゐることは推し量られた。

減水の時には——ギリアットが視察してゐたのは丁度其の時であつた——實際沈んだ岩の二つの列はその頂きを露はし、或るものは高く乾き、そしてその全體を以て、間斷なしにその平行を續けてゐた。

「人岩」は境界をなして、二箇のヅウブルの西に突き出た列の、全形の東の方を支へてゐた。

全體を、俯瞰すれば、ゾウブル岩を一端に、「人岩」を他端に置いて、曲りくねつた珠數繋ぎに岩が
つらなつてゐた。

ゾウブル岩は全體から見れば、互に觸れ合ふばかりに、鉛直に突起した二個の巨大な柱に過ぎずし
て、岩の下に横はる山脈の一頂點を形造つてゐるに過ぎなかつた。此巨大な峰は無限の深底から昔唄
起したものであつた。激浪怒濤がそれを打ち砕いて、鋸の齒にした。只峰の尖端だけが覚えてゐた。
是が列礁であつた。浪に隠くれた残餘は、きつと素晴しく大きいに相違ない。嵐がヂューランド號を
植え付けてしまつた隘路は、此巨大な柱の間にあつた。

電光形の此細路は各部ともに略ほ同じ幅であつた。洋がそんな風に拵へ上げたのだ。その永遠の混
亂は時として此奇妙な不正形を生むのである。海の行動には幾何學にやうなものがある。

隘路の一端から他端まで、二つの并行した二箇の花崗石の壁が、丁度ヂューランド號の船腹の幅だ
けの距離をおいて、向き合つてゐた。二箇のゾウブル岩の間は、小さなゾウブル岩が割られ、反り却つ
てゐるので聊か廣くなり、水掻車を容れるだけの餘地をもつてゐた。それが他の部分に入らうものな
ら、車は木つ葉味塵となつてゐたのだつたらう。

隘路の内側で、岩が高く、二重になつた正面は見るも凄かつた。我々が大洋と稱ぶ水の沙漠を探險
して、海の未知の事物にめぐりあふとき、總てが奇怪で、且つ定形がないのに驚くのである。ギリア
ットが隘路を破船の高みから見ることが出来た限りは、凄いものであつた。洋の岩の咽喉に我々は屢
々破船が、奇怪にも、永久に人格化した痕を認めることがある。ゾウブル岩の隘路はそんな咽喉の一

つでその結果は身の毛の竦つものがあつた。岩の酸化したところが、血の塊りの粘りついたやうに、
崖の斜面にあらはれてゐた。それは屠場の壁のとぼつちりに似てゐた。納骨堂の鬼氣が、此場所を襲
ふてゐた。此粗い、いろ／＼な色をした海の岩——此處には金の合成が解體して岩に雜れば、そこに
はジメ／＼した皺が處々、紫の痂皮を被つたり、醜怪な碧の斑點や、銹色の飛沫をくつ／＼けてゐる——
は、人殺しのあつた様に人を思はした、それは暗殺が行はれた部屋の、洗はないで抛つと置かれた壁
のやうであつた。或は人間が其處で押しひしがれて、そこ／＼に、その運命の痕跡を印したのだと想
像もされやう。峰のそびえた岩々は、苦悶を寄せ蒐めたともいふやうな妙な、感じを起さした。と
ころ／＼まだ生血が滴つてゐるらしくも見えた。此處の壁は濕つて、觸ればどうしても血が指にべと
りと粘り付いて來ずにはゐないやうであつた。殺した痕は鮮かに到る處に認められた。二重に並行し
た急傾面の根本には、水際に沿ふて、或は丁度浪の下に、又は岩の崩れた洞の中に、或ものは紅に、
他のものは黒く、紫に、不思議に、内臓と似た、丸い石の途方ない大きな愧りがあつた。それは人間
の肺、心臓、肝臓などが、その暗鬱な場所に取り散らされ、腐敗してゐるのだと見ることも出来た。
巨人達が其處で腹を裂かれたのかも知れない。下から上まで花崗岩は長い、赤い線を通してゐるのが、
棺桶から血が滲み出してゐるにも比せられた。

斯る光景は、海の洞穴で屢々あることだ。

海上で遭難して、洋中の孤岩に偶々假りの宿をとつた者は、その居心地の悪い宿の形が決して心を惹かぬものではない事を發見する。其處には金字塔形をつくつた一峰の岩がある。大きな岩を輪に列べたやうな環狀岩がある。又廊狀岩もある。後者の最も驚くべきものだ。それ、營にその壁の間に於ける溝の小歇みなく、苦悶してゐるが故ばかりでない、又二つの海岩の斯く並び立つことに當然附屬してゐるものらしい、ある隙りした氣象學的な特色が存するからである。二箇の眞直は側壁は、眞個に電池の趣がある。

是等廊狀岩の布置は肝要な事實である。斯る位置は第一に、空氣と水の運動に影響する。廊狀岩はその形狀によつて機械的に次には恐らくその高さ、愧型の相互に近接した、對立することから、磁氣的に浪と風とに作用を及ぼすのだらう。

海の此形狀は、風に散らされた一切の勢力をそれ自らに惹き寄せ、嵐に對して、妙な集中力を附與する。

それだから是等の暗礁の附近では、きつと嵐が烈しい。

風は復合のものたることは記憶すべきである。風は單一なものとは信じられるけれど、それは決して單一ではない。その勢ひが單に理學的であるばかりか、又化學的である。併し是だけではない——それは磁力的である。その効果は屢々不可解である。風は空氣的のものたると同じ程度に電氣的である。或る風は北光と共働する。アイギユの岸から吹く風は、高さ百呎の浪を起す——ヂユモン・ヂユルワイルが驚いて記すところである。『コルヴェット型艦はどう跟いていつたらいゝか判らなかつた』と、

彼は言ふのである。

南の海では、水は時として、巨大な沸騰の有様で膨れ上るのである。斯る時には、洋は、野蠻人共がそれを見まいとして、遁け去る程恐ろしい光景を呈する。北の海の疾風は違つてゐる。それは氷の鋭い簇とまざつて、その吹きまくるや、息も吐かれず、エスキモー人の櫓を雪の上に吹き戻す。他の風は焼きつける。阿弗利加のシムーン風は支那では颱風印度ではサムイエル風である。シムーン、颱風、サムイエルは悪魔の名と信じられる。その風は山の高いところから吹き戻す。或る嵐がトルツカ火山を硝子化した。此熱風——赤い雲を襲ふ、墨汁色の旋風——は吼陀聖典に載せてある『見よ赤き牝牛を盗まんと、來る黑色の神を』と。

此總ての事實に、我々は電氣の神祕な痕をみとめることが出来る。

風は實際電氣に満ちてゐる。浪も亦その通りである。浪も亦その性質が復合である。我々が見るその浪の下に、なほ見えない浪がある。その成分は無數である。一切の要素中、海が一番深遠である。

此渾沌を曉らう努めて御覽、他の總ての物を一列に、平均ならしめる程巨大な此渾沌を、それは世界的收容所、生命と芽萌の溜池、變形の鑄型である。それは蒐めて後分散する。それは集積して後播く。それは喰つて後創造する。それは地上のあらゆる廢水と、汚水とを受けて、それを實に化す。

それは氷山では固體、浪では液體、江灣では流體である。物質として見れば、それは主體である。勢力として見れば、それは抽象である。それは一切の現象を平均し、統合する。それは無限に結合してゐるといふもよい。力と混亂とによつて、それは證明に到達する、それは有らゆる差異を溶解して、

自分の統一にまで吸収する。その要素はその本性となる程数多い。その一滴は完で、全體を代表する。その澤山な嵐で、それが平衡をとる。プラトンは天體の目まぐるしい踊りを見た。奇妙なことだが、本當に海は、地球が太陽を環るその宏大な旅程に於て、その乾満を以て、地球の平衡となる。

海の一現象のうち、他の一切の現象が表はれる。海は、吸管からの吸ひ上げられる如く、龍巻から吹き上げられる。嵐は唧筒の原理を行ふ。電光は空中からと同様海から迸る。海上時に或る鈍い震動を感じる。そして磁黄の臭氣が錨鎖庫から出てくる。洋は燃える。『悪魔がその大釜に海を入れた』デ・ルイターが言つた。春秋の彼岸を色づける或る暴風に於て、怒濤に逆らう船舶は一種の光りを發する。磷光が互に相躡ふて、綱具に沿ふて通り、時には仕事をしてゐる水夫が此焰の鳥を捕へようとして手を伸ばす程近寄ることがある。リスボンの大地震の後、熱い、熔爐から來たやうな狂風が、市街に向つて六十呎の高さある浪を打ち寄せた。大洋の波動は、地球に顛動に、密接に關係する。

是等の測り知られぬ勢力は、時に非常な溢張を生ずる。千八百六十四年の末、マルヂヴ群島の一つがマラバル岸から百リーグを距るところで、實際沈没した。それは難破した船のやうに、海底に沈んだ。朝その島を出帆した漁夫共は、夜歸つて何物をも發見しなかつた。漁夫共は辛くも海の下に自分達の村のあることを判別し得たに過ぎなかつた。その場合、小舟は家の難破の傍觀者であつたのだ。自然が文明の御蔭で束縛されてゐる歐洲では、斯る事件は稀有で、又有り得べからぬやうに思はれてゐる。併しジェルシイやゲルンセイの島には、元々ゴールの一部を爲してゐたので、我々が此條をさかしてゐる時代、彼岸嵐か、蘇格蘭のファス・オブ・フォースの懸崖の大部分を缺損したこともあつた。

是等の凄まじい勢力が、リュセ・フィオルとして知られ驚くべき海峡に於けるより以上に、恐ろしく結合せられて、出現してゐるところは何處にもない。リュセ・フィオルは海洋の峽岩のうちで最も恐ろしいものである。その恐怖はそこでだけ盡くされてゐる。それはノルウェイの荒磯スタワンゲル灣の近く、北緯五十九度のところにある。水は黒く重く、間歇的な嵐の發熱に惱んでゐる。北海、此寂寞のたゞ中に、大きな暗い街路が聳える——人跡の至らぬ街路が。誰もそこを通つたことがない。どんな舟も敢てそこに這入らない。それは高さ三千呎の兩岩壁の間に、十リーグの長さに亘る廊下である。海に入口を開く通路は斯廢のものである。隘路はその眩、曲り角をもつこと他の海の街路と同じである。——水の不規程な運動で造られたので、決して變直なものとは出來ないのだ。リュセ・フィオルは海は殆ど常に靜平である。上なる空は澄んでゐる。場所は恐い。風は何處にあるか？空にない。雷は何處にあるか？天にはない。風は海の下にある。稻妻は岩の中にある。時折り水が顛へる。或る、空に雲のないとき、垂直な岩の約半程、水面上千又は千五百呎の高さに、又北側よりも寧ろ南側に、岩が突然雷鳴を發して、電光が飛び出て、又戻つてくるそれは一度長く伸びて、再び手に戻つてくる小兒の玩具のやうである。電光は縮つたり、大きくなつたりする。懸崖から懸崖にとぶ。再び岩に入り、又現はれ、その遊びを始め、その頭数を舌を増し、尖端を逆立て光らし、届くところを打ち、又繰り返し、聽て、氣味の悪いやうに、突然、消えてしまふ、鳥の群は恐れて飛び立つ。見えぬものから逆出するその砲火より以上も不可思議なものは世にない。一つの懸崖は、一面から他面に、打撃を雨下して各

々他を攻撃する。その戦争は人間には関係ない。それは通過し難き灣内の二つの岩が古くから敵對しあつてゐることを現はす。
リュセ・フィオルでは、風が江灣の水の如く渦巻く。岩は雲の職分を営み、雷は火山の火の如く迸出する。此奇妙な隘路は蓄電池である、その電極は二列の懸崖である。

第六章 既

ギリアットは眞面目にゾウブル岩と角かぶ爲に、充分に海の岩を知つてかゝつた。何よりもさきに、我々が今も言つたやうに、ボートを、安全に繋ぐところを發見する必要があつた。

ゾウブル岩の後ろに蜿蜒たる濠の如く延びた列礁の二列は、其處此處で互ひに連絡し合つて、暗路の存在と、危つかしい路に、口をあけて再び樹幹のやうな主要隘路に連絡する洞穴の存在を示唆してゐる。

是等の岩の下部は馬尾藻で、又上部は地衣で覆はれてゐた。海藻の一樣な平準線は高潮時に於ける水がとゞく高さとも風の折りの海の限度とを表示した。水の届かぬところは金銀の色をなして、白や黄な地衣によつて、花崗石に連絡した。

岩の或る點には圓く尖つた殻貝が澤山附着してゐた——花崗石の菌である。細かい砂の集つた、奥角の他の諸點には、浪よりも寧ろ風の爲めに、その表面にうねる青いアザメの枝があつた。

鋸齒狀の海岸線には、風から遮蔽せられてうにの穿つた小さな穴を見ることが出来た。此棘の塊つた貝殻は、さながら生きた穂のやうにその針で轉がり、その殻は巧みに列し又銀ひ合した一萬の甲羅から成り立つてゐるが、なぜか知らぬ此うには俗に「アリストートの提燈」と名がついてゐる。それは五本の齒で花崗石、それに孔をあけて住つてゐる。薄香とりが、そのうにを發見するのはこんな穴である。彼等はそれを半分に割り、牡蠣のやうに、生まで喰ふのである。或る者はパンをその柔かい肉に漬けて喫べる。だから一名——海の卵とも稱ぶのである。

引き潮に露はとなつた向ふの列礁の頂きは、四方を岩の壁に殆ど圍まれた一種の小灣をなして「人岩」の急斜面の下に寄り添ふて延長してゐた。此處に明かに碇泊所があつた。それは足踏の形をして、只一方だけ、その海の迷路に於ける總ての風中一番猛烈でない東風にだけ開いてゐた。水は其處に閉ぢ込められて、殆ど動かなかつた。遮蔽は比較的安全であつた。のみならずギリアットは多く、好き嫌ひを言つてはをられなかつた。

若し彼は低潮を利用する積りなら、急いでするのが肝要であつた。天氣は清朗、平穩に續いてゐた。無禮な海は一時は穩しい氣質になつてゐた。

ギリアットは岩を降りて、再び靴を履き、索を解き、又も小舟に乗り、水に浮び出た。彼は岩に沿ふて漕いだ。

「人岩」に着いて、彼はその小灣の入口を檢めた。動かぬ海に、定着した浪の線、水夫より外には誰の眼にも見えない一種の皺が水路を表示した。

ギリアットは霎時、水の中にある殆ど見えないその境界を研究してゐた。それから彼は容易に下手廻しにして、巧く水路に這入る爲め、少しばかり手をゆるめてゐたが、突然橈を一つ搔いて、彼はその小灣に入った。

彼は水深を測つた。

碇泊所はお訛へ向きのやうだつた。

スループ型船は、年中どんな時代にでも、殆ど平氣で其處にかゝつてをられるだらう。

一番恐ろしい岩礁もこんな靜かな隅つこを持つてゐるものだ。岩礁の間に斯の如くして發見しられる港は、悍猛なベツウイン人の歡待のやうで——打ち解けて安全である。

ギリアットは出来るだけ「人岩」に近くその小舟を着けた、けれども岩に觸れないだけの距離を置いて、彼は二挺の錨を投じた。

それが濟むと、彼は腕を拱き、自分の位置を考へ始めた。

舟は安全にかゝつた。此處に一つ問題がとけた、けれどもモ一つ持つてゐた。彼自身は何處に宿らうか？

彼は二つの場所を擇んだ——一つは小舟中の船室の隅であつた。それはどうにか住まへぬこともなかつた。モ一つは登るに難くはない「人岩」の頂上であつた。

此宿りのどつちからも、落潮の折りには岩から岩を跳んで、殆ど足を濡らすことなくして、チュールランド號が挟まつてゐるヅウル岩の間の小徑に入ることが出来るのであつた。

けれども低潮はほんの僅かな間しか續かなかつた、そして其以外の時は、彼はその宿からも亦破船からも二百呎以上も押し隔てられるのであつた。岩礁の間を泳ぐことはいつでも難しい。若し海がちつとでも穩かでないなら、それは不可能である。

彼は小舟にも又「人岩」にも宿る考へを止した。

附近の岩に止まることは出来なかつた。

低い岩々の頂は、一日二回揚げ潮の下に隠れた。

高い岩々の頂は不斷に水沫を受けて、不愉快なヅブ濡れとなるにきまつてゐた。

破船に居るより外仕方がなかつた。

そこに宿つてゐられやうか？

ギリアットはそれが出来てくれと念じた。

第七章 航海者の室

一時間後、ギリアットは破船に戻り、甲板に昇つて、梯を降りて、船中に入つて、彼が最初の訪問で概括的に然して置いた測量を完成した。

揚錨機の助けにより、彼はチュールランド號の甲板に、彼が小舟の積荷で造つた包みを引き揚げた。

揚錨機はよく役に立つた。それを廻はす鐵棒も失くなつてはゐなかつた。ギリアットは只破船の中にゴタ／＼と寄り集つてゐるものうちから、自分の要るものを探せばよかつた。

彼は断片の間に一挺の鑿を發見した——疑ひもなく大工箱から落ちたのだ——そしてそれを彼の僅かな道具に加へた。

此外に——用に立つものがないので——彼はそのポケットに一挺の水夫用ナイフを携へてゐた。ギリアットは、終日破船の上で、掃除したり、支柱を施したり、取り片付けたりして、働いた。

日が暮れたとき、彼は次のことに氣が付いた——

破船全體が風に顛へた。屍體(舟)は彼が歩む一步毎に揺れた。機關の入つた船腹の、岩の間に入り込んだ部分を除けば、一つとして安定、堅固なものになつた。そこだけは横材が花崗石によつて力強く支えられてゐたのだ。

彼の住居をデューランド號に定めたのは、不謹慎であつた。それは重さを増した。然るにその荷を加へるよりも、それを軽くすることが遙に肝要であつた。破船を重くすることはどの途、彼が求めるとは反對のことであつた。

廢滅の塊りは、眞個、最も注意して取扱ふことを要した。それは死期の迫つた病人のやうなものであつた。風は充分にその終焉を手傳ふのだ。

おまけに、相憎く其處で工事をしなげりやならんのだつた。破船が持ち堪へねばならんどさくさばかりとそれを痛めるだらう——恐らくはその力の堪えない程。

その外、ギリアットが眠つてゐる間、夜半に何か椿事が發生するならば、彼は必然船と共に死んでしまふのだ。助けは少しも出來ない、一切は終るだ。壊れた船を救ふには、船の外に居るのが絶対に

必要である。

外に居てしかもそれに近く——之が問題であつた。

困難は彼がそれを考へたとき、一層複雑になつた。

彼はこんな状態の下に、何處に宿を發見し得れやうぞ。

ギリアットは目を瞑つて考へた。

そこには二つのツウブル岩より外、何物もなかつた。がそれは全然希望がないやうであつた。下からは大ツウブル岩の頂の上に、一つの突起のあることを認め得られた。

平つたい頂きをもつた大ツウブル岩や「人岩」の如き高い岩は、頭を刎ねられた峰の一種である。それは山の中や大洋に多い。或る岩、特に大海で出逢ふ岩は、半ば仆された樹のやうな印を帯びてゐる。小斧で截られたやうである。それは事實、彼の疲れを知らぬ海の開拓者たる嵐の打撃に身を任かしてゐるのである。

尙ほ外に海の騒ぎ立つ深い原因がある。だから花崗石のその原始的塊型に、無数の疵痕がつくのである。是等の海の巨人のうち或る者共はその頭を打ち落されてゐる。

時として此頭は、どんなわけかしら、墜ちないで、傷いた胴體の頂邊に、壞はれたまゝに残つてゐることがある。こんな奇妙なことは決して稀でない。ゲルンセイに於ける「惡魔の岩」、アンダイライ谷の「テーブル岩」などは、斯る奇しな、地質學的謎の最も驚くべき例である。

高原の上に認められる此突起が、石に自然にできた不整形でなければ、それは必然、破壊した頂上の、破片が残つたものでなければならぬ。

恐らくその突然的には或る穴——人がその中に匍込まれる穴があるだらう。ギリアットはそれ以上を望まなかつた。

けれどもどうして彼はその高原に達し得られようぞ。どうして彼は、その垂直に、硬く、丸石のやうに磨られて、半分は粘々した緑藻に覆はれて、石鹼のやうに迂つこい表面をもつた岩壁を攀ぢられやうぞ？

高原の峰は、デューランド號の甲板より高いこと少くも三十呎であつた。

ギリアットはその道具箱を取り出し、繩に結び目を拵へ、それを絡み縋で自分の帯に引っかけ、小ヅウアルを登り始めた。彼が攀るにつれて、登るのが一層困難になつた。彼は靴を脱ぐのを忘れてゐた。それが彼の困難を増したのだつた。併し大骨折、大奮發で、彼はその目的點に到達した。安全にそこへ着いて、彼は身をのばして、眞直に立つた。そこには僅かに彼の足を置く餘地があるばかりであつた。そこを宿とするには難しかつた。柱苦行者(柱の上に生涯を立ちつくす天主教の行者)ならば其處で満足したかも知れなかつた。その要求にもつとしつかりしたものをもつギリアットは、もつと便利なところが欲しかつた。

大きな岩の方へ身をまけて小ヅウアル岩は遠くから眺むれば、それに會釋するものゝ如くであつた。二つのヅウアル岩の間は、下の方では五六十呎もあるのか、一番高いところでは只八呎か十呎離れて

ゐるのみであつた。

彼が攀ぢ昇つたところから、ギリアットは、大ヅウアルの高原を部分的に覆ふた岩の層を一層劃然と見ることが出来た。

此高原はその一番高いところで、彼の頭上より少くとも十五呎上になつてゐた。

懸崖がそれを隔てた。灣曲した小ヅウアルの峻坂が、彼の足下をすべつて末は見えなくなつてゐた。

彼は帯から結び目のついた繩を外づし、岩の面積を素早く見て、鈎縋を高原へ投げ上げた。

鈎縋は岩を掠すつて、迂つた。端に鈎の附いた、結節のある繩は彼の脚下に落ちて、小ヅウアルの岩側に垂れた。

彼はその試みを改めてモ一度やつた。彼は裂け目や穴があるだらうと思ふ花崗石の突起を望んで、更に一段遠く繩を抛つた。

今度はうまくいつて、鈎が引つかゝつた。彼は下から曳いてみた。岩のはじが缺けて、重い縋のついた、結び繩は脚下の岩を打つて、再び迂り落ちた。

彼は三度鈎縋を抛つた。

今度は落ちて來なかつた。

彼は繩を引つ張つてみた。それは抵抗があつた。縋はしつかりと食ひ込んでゐた。

縋は彼が見ることを得ない高原の或る一點に引かゝつた。

その不明な支點に彼の生命を頼まなければならぬのだつた。

彼は躊躇しなかつた。

事は急に通つてゐた。彼は一番捷路をとらなければならなかつたのみならず、他の方法を案出する爲め、ヂューランド號の甲板に再び降ることは不可能であつた。

ヒョツとしたら亡るかも知れない、又墜ちることはまづ確かであつた。それは昇るよりも降る方がズツト容易であつた。

ギリアットの行動は水夫らしくて、きはきとしてゐた。彼は決して力を浪費しなかつた。彼は常に、着手してゐる仕事にその努力をと合はした。だから通常の筋肉を使つて出した力が異常なものとなつたのだ。彼の二頭筋は普通の人のそれよりも一層強力であつた。けれども彼の胸は一層しつかりとしてゐた。事實彼は生理的の力に、精神的の意氣を附加したのであつた。

成就せらるべき仕事はゾツとするやうな恐ろしいものであつた。

それは二箇のゾウブル岩の間を、細い一條の繩にブラ下つて渡ることであつた。

屢々人間はその義務と、信仰の途上、眼前に恐ろしい疑問に衝突するものである。貴様は之をやる

積りか？』といふ……

ギリアットは一度その繩を試した。鉤は縫りとかゝつてゐた。

左の手にハンケチを捲きつけ、その右の手で節のつたい繩をとり、それを左の手で覆ふた。次に一方の脚を伸ばし、他の方を岩に鋭く當てがつて、機みをくつて繩が揺れないやうにして、彼は小ブルの高みから、大きな岩の急坂へ直下した。

震動は烈しかつた。

ほん／＼と跳ねかへつた。

彼の握り緊めた拳は交互に岩につき當つた。ハンケチはゆるみ、拳はより割けた。事實いさ少しで碎けるところであつた。

ギリアットは其處で一寸と、眼がクラ／＼としたがブラ下つてゐた。

それでも彼は綱を手放さぬ程氣はしつかりしてゐた。

彼がその脚で綱をとらへるまでは、急にまはつたり、揺れたりして、少しの時間が要つた。けれども彼は遂に成功した。

我に歸つて、兩手と共に、その素足で綱を捕へたとき、彼は下を見た。

彼は、是まで幾度となく非常に高いところを昇降するに役立つたその綱の長さを心配することは要らなかつた。事實綱はヂューランド號の甲板に曳きすつてゐた。

再び下りることの出来るのを確めて、彼は手足を動かして、再び登り始めた。少時して彼は頂上に達した。

今まで一度も翼のないものが其處に足がかゝり得たことはなかつた。高原はところ／＼鳥の糞で覆はれた。そしは不規則な不平方四邊形——大ゾウブルの巨大な花崗石の三稜形から缺け落ちた塊りであつた。此岩塊は中央が水盤のやうに凹んでゐた。雨の仕業である。

ギリアットの想像は誤らなかつた。

岩塊の南角に、彼は一層高く聳えた岩の群塊を發見した。恐らくは頂上の崩壊したものであつたらう。此巨な鋪石と見える岩々は、若し一定の野獸がそこへ行くことが出来たとしたならば、其間に身を潜めるに足るだけの餘地をもつてゐた。その岩々は、丁度廢趾の推積したやうに、隙間を残して、互に凭れ合つてゐた。それは岩窟をも空洞をもつてゐなかつたが、海綿のやうに小さな孔を澤山もつてゐた。その孔の一つは充分人を入れる程の大きさがあつた。

此孔には苔の床と、少しばかりの草とが生えてゐた。ギリアットはその中に、鞘のやうに身を差し込むことが出来た。

此孔は入口のところ約二呎の高さがあつた。それは奥に向つて縮まつた。石棺が時としては斯様な形をもつものだ。岩の塊は南西に向ひ背合せにつらなり、孔は雨を防けたが、北風には吹き曝らしてあつた。

ギリアットは其所が氣に入つた。

二箇の主要問題は解けた。則ち單樁船は港を得て、彼自身も雨宿りを得た。

彼が洞穴の重なる利點は破船に近寄り易いことであつた。

鈎錨は二つの岩の間にはさまつたので、しつかりと引つかゝつてゐたが、ギリアットはなほその上に巨きな岩を輾ばして、のせかけ、一層丈夫にした。

彼はデューランド號の上で、悠りと自由に仕事が出来た。

だから彼は打ち寛いだ。

大ヅウブルは彼の住居で、デューランド號は彼の仕事場であつた。あちらこちらを往來したり、昇つたり、降りたりするにもまさつて容易なことはなかつた。彼は節のついた綱によつて、容易に甲板に上り降つた。

その日の仕事はいふものであつた。計畫は都合好く着手せられた。彼は満足して、空腹を感じた。彼は食糧を入れた籠を解き、ナイフを開き、燻した牛肉の一片を切り、黒パンを少し裂きとつて、清水の燻から口うつして一口飲んで、結構な晚餐をとつた。

うまく働いて、うまく喰べることは二つの満足である。満ちた胃は、安らかな良心に似てゐる。此夕餉が終つたとき彼に残された日の光りは未だ少しはあつた。彼は之を利用して、破船を軽くすることを始めた。それは焦眉の急であつた。

彼は破片を蒐めるのに當日の幾分を費した。彼は用にしたつものは一切、機關の入つてゐる、丈夫な區劃に移した。たとへば木、鐵、綱、帆布の如きものを。いらぬものは海に抛り込んだ。

揚錨機をつかつて甲板に引き揚げた單樁船積荷は、彼がそれを引括めて荷造りして置いたけれど、邪魔になつた。彼は小ヅウブルの側面、手の届く高さにある壁龕の様な凹みを測つてみた。此自然の、戸のない押入は、岩に往々見受けるものである。この押入に幾分物を入れて置かれると彼は想ひついた。彼は孔の後ろに、道具と着物の入つた二つの箱と、ライ麥の粉とビスケットの入つた二つの籠を置いた。前には——ちつと端近かであつたらうが、他の場所がなかつたので——彼は食糧品の籠を置いた。

彼は衣裳箱から羊皮と、頭布のついた、ダブ／＼の上着と、雨合羽とを用心の爲めに取り出して置いた。節を結んだ繩に、風の當りを弱くする爲め、彼はその最下端をヂューランドの綱具どめにしつかりと結びつけた。

ヂューランド號はうんと押籠められてゐるので、此綱具止めはひどく歪になつてゐた。そして綱の端を、握り緊めた手のやうに、しつかりと押へて居た。綱の上端にはなほ面倒なことがあつた。下の部分をびんと張つて置くのはよかつた、が急傾斜の頂き、腦付きの繩が、高原の峰に當るところは、岩の鋭い角に擦れて切れる恐れがあつた。

ギリアットは取つて置き、廢物の中を捜して、帆布の屑を取り出し、古い大綱の束の中からいくばりかの小繩を抜き出して、それをポケットに收めた。

水夫ならば、ギリヤットが、その帆布と、繩の切れ端をもつて、節のある綱の、岩角に當る部分に巻きつけて、かぶせ、その摩擦を防ぐのであらうと、押したゞらう。斯る行爲を『裏うちする』といふのである。

こんなものを用意して、彼は外套を着、戎衣の上から合羽をかけ、赤い大黒帽の上に頭布を引き卸し、皮二つの脚を頸のまはりにつけて、斯く身支度して、彼は今大ヅウブルの側にしつかりと結び付けられた綱を取り、海の或る險惡な城砦の攻撃に、攀ぢ昇つて行つた。手を擦り削いてゐるたけれど、ギリアットは容易に頂上に登りついた。

入り日の蒼白い餘光は、空に消えつゝあつた。下なる海ではもう夜であつたらう。少しの光りがヅウブル岩の高いところに残つてゐた。

ギリアットは餘光を利用して、節付きの繩を結んだ。彼はその繩を岩の角に幾度も／＼巻きつけた。繩には一巻き毎に厚い帆布で、繻帯が施してあつた。全體が、或る程度まで、女優が第五幕の苦悶や、哀想を演る爲めに、その膝の上に置く布に似てゐた。

此巻きかたが終ると、ギリアットはその踞んだ位置から身を伸ばした。

彼が仕事をしてゐる間暫時、彼は空中に何やら變なものゝ羽搏きを感じた。

そしは、夕暗の中に、素敵な大蝙蝠がその羽搏つてゐる音に似てゐた。

ギリアットは眼をあけた。

大きな輪が頭の上の蒼白い黄昏空に廻つてゐた。

斯麼輪は晝にかいた聖人達の頭にははつてゐる。けれども聖人のは黒地に黄金色であるが、ギリアットのは蒼白い地に黒であつた。その結果は變であつた。それは大ヅウブルの周圍に、夜の後光のやうに擴がつた。

輪は段々近寄つて、又退いた。段々狭まつて、それから又廣くなつた。

それはかもめ、かひつむり、鶉などの巨大な一群——びつくりした海鳥の巨大な群であつた。

大ヅウブルは恐らくその壻であつて、とまりに來たのであつたゞらう。ギリアットはその家の一室を占領してゐたのだつた。思ひ掛なく相宿の仲間が出來たので、彼等が騒いでゐることが明かであつ

た。

一個の人間は、彼等が未だ嘗て其處で見掛けたことのないものであつた。荒い羽搏きは或る時間續いた。

彼は見なれぬお客様がその場所を立ち去るのを待つてゐるらしかつた。ギリアットは夢のやうな眼付で鳥を眺めてゐた。

飛びかふ鳥の群はとう／＼その企てを罷めたやうだつた。輪は突然螺旋形となつて、海鳥の雲は、群岩の極端にある「人岩」の上に降りて、其處で協議し、熟考してゐるやうであつた。

ギリアットは花崗石の穴に落着き、石に覆ひをかけて枕にした後も、永い間鳥共が、御互に喋つたり、又順々に泣事を言つてゐるのを聞いた。

聽て鳥も黙つて、萬物皆眠つた——鳥は自分等の岩の上に、ギリアットも自分の岩に。

第八章 Impertinence Volucres.

ギリアットは熟睡した。けれども彼は寒かつた、そしてそのお陰でしよつちう目を醒された。彼はひとりでにその足を奥へ、その頭を洞の入口へ向けてゐた。彼はその寢床から角の立つた石を澤山取り除いて置かなかつたから、その石のせいでよく寝つかれなかつた。折々彼は目を半ば開いた。時々彼は轟しい音を聞いた。その音は大砲の轟くやうに、上潮が岩々の洞穴に入る音であつた。

彼が周圍の事情は幻覺を起すやうにできてゐた。まほろしが彼を取り巻いてゐるやうであつた。ほんやりとした夜が一層その効果を増した。そしてギリアットは、或る非現實の領域に没入した。彼は一切が夢ではないかと自分に訊いてみた。

それから彼が再び眠りに落ちた。今度は本當の夢で、彼はセント・サムソンや、レ・ブラヴェや、ル・ピユ・ド・ラ・ルユなどにゐた。彼はデルウシエツトが唱つてゐるのを聞いた。彼は現實なものうち居た。彼が眠つてゐるうちは、目をきまして、生きてゐるやうで、も一度目をさましたときは、眠つてゐるやうに思はれた。

事實、此時以來彼は夢に生きてゐるやうであつた。

眞夜中頃、騒がしい眩きが空に立ち始めた。ギリアットは眠つてゐながらも、ほんやりとそれをおぼえてゐた。多分風が立ちそめたのであつたらう。

一度、寒さに顫へて目が醒めたとき、彼は以前よりも稍餘計に目を開いた。雲が天上に動いてゐた。月が、その後ろに大きな星を一つ従へて、空を走つてゐた。

ギリアットの心は、夢に出逢つたことで一ぱいになつてゐた。暗の中の物影は、眠むたい時の印象かごちやく／＼に雜つて、輪廓が大きくなつた。

明け方には、彼は半ば凍えてゐた。けれども彼はすやく／＼と眠つた。

突然日の光りが颯とさして、彼を眠りから醒ました。でなければその眠りは危険であつたらう。岩の寢床は日向になつてゐた。

ギリアットは欠伸をして、身を伸ばし、寝てゐるところから飛び出した。

彼の眠りは、その前夜の事情を直ぐには呼び起すことが出来なかつた。

段々現實の意識が返つて來た、そして彼が朝食のことを考へ始めた。

天氣は晴朗であつた。空は冷たく、澄みきつてゐた。雲はなくなつてゐた。夜の風が地平線を掃き

去つて、太陽があか／＼と昇つた。一日晴天が始まつてゐた。ギリアットは悦んだ。

彼は外套と、脚絆とを脱ぎ棄てた。之れを毛を裏にして捲きあげ、繩ぎれで結び、雨宿りをする洞

穴へ押し込んだ。

之が濟むと、彼は寢床を拵へた——前夜ひどい目にあはされた石を取り除くことであつた。

彼は寢床をこしらへた。彼はチューランド號の甲板に繩を垂らして、食糧品の籠を入れて置いた壁

籠へ行つた。彼は籠を餘り端近くに置いたため、夜中風がこれを掃き落して、海の中へ轉がし込んだ。

それを取り戻すことの容易ならぬは明かであつた。その處から彼の籠を持つていつた風には悪戯な、

悪靈が憑いてゐた。

それは對敵行爲の開始であつた。ギリアットはそれをさとつた。

海と親しくなつた人々には風を一箇人、岩を生ある者と見るのが自然なやうになる。

ビスケットとライ麥の粉以外には、昔から破船の水夫が「人岩」の上で、生命を繋いだ貝だけが残つ

たきりだつた。

網や鈎絲で生きていくことは無用であつた。魚は騒がしいことが嫌ひで、天性岩の附近を好まない。

曳き網、四つ手網の漁夫は、只その網を破るに過ぎない、暗礁の間にあつて、無駄骨を折るに過ぎないだらう。

ギリアットは、辛くも岩から離れたかたし貝を二つ三つ列べて朝食にした。彼は貝を剥がすに、危くそのナイフを折るところであつた。

儉ましかかな食事を認めてゐる間に、彼は海が奇體に騒がしいのを感じた。彼は見廻した。

それはいくつかの低い岩々にたつた今下りて、その羽を搏ち、互によろけかゝり、叫びつ、呼びつ

してゐる海鳥の群であつた。皆同じ居所に集つて騒いでゐた。此群は嘴や爪を以て、何物かを壊してゐた。

それはギリアットの食品を容れた籠であつた。

風の爲めに、尖つた局所へ轉がし落され、籠は裂けてゐたのだつた。鳥共は直ぐにそれへ集つたのだつた。彼等はその嘴に食品のあらゆる斷片を咬へ去つた。ギリアットは彼の燻肉や、鹹魚の持ち去られるのを遠くから眺めた。

今度は鳥共が攻勢をとつてくる番であつたのだ。鳥共は報知をした。ギリアットが彼等の嘴を強奪したのに對して、彼等は彼の夕餐を奪つた。

第九章 岩と、その用ひ方

一週間経つた。

時は雨季であつたけれど、一粒も雨が降らなかつた。ギリアットは此事を感謝した。けれども彼がやり始めた事業は、一見人間の力では及びもつかぬものであつた。そんなことをやつてみるのは狂氣のわざと見える程、成功の危まれるものだつた。

愈々しつかり仕事に接觸してみると、その困難や危険が明かに知るものである。始めから後は面倒だらうと見てする仕事はあるものぢやない。始めはどれでも抵抗に對しての闘ひである。第一歩は容赦なく我々が欺されたことを教へる。我々が接觸する困難は棘のやうに刺す。

ギリアットは直接に障害物の前に立つた。

いくらか成功の機會をとらへて、船體の四分の三を岩の間に埋めた破船デューランド號から機關を引きあけるには、斯る場處、斯る時季で、破船を救ふには、殆ど千人の人が入用であつた。然るにギリアットは只一人であつた。

大工道具、器械用の道具や機械も必要であつた。ギリアットは鋸、小斧、鑿、金槌を一挺づゝ持つてゐた。彼はいゝ工場と、小舎とを求めてゐた。ギリアットは身を覆ふ屋根を持つてゐた。食糧も亦必要であつたが、彼はパンすらも持つてゐなかつた。

彼がその週間を通じて、岩の上に働くのを誰でも見やうものなら、彼の仕事は何であるかを見きは

めるのに困つたであらう。彼は最早デューランド號も、二つのヅウブル岩も氣にとめぬやうに見えた。彼は只暗礁の間に離離として、破船の小さな部分を救ふのに熱中してゐるやうだつた。彼 高潮毎に、それを利用して、破船が播き散らしてゐたあらゆる物を岩々から撈りとつてゐた。彼は岩から岩へ、海が散らかした——帆布の裂片、鏡の屑、嵌屏のかけら、割れた板、折れた帆桁、此處に横木が一本其處に鎖が一筋、彼處には滑車が一箇と、あらゆるものを拾ひ上げて、渡りあるいた。

同時に彼は注意深く岩窟を皆測量した。彼が大失望にも、一つとして住み得られるものもなかつた。彼が大ヅウブルの頂上の間に夜を明かし、寒い目にあつたのに懲りて、彼はもつといゝ宿をしきりに欲しがつた。

其孔の二つは、まつたく廣々としてゐた。よしや岩でよきた自然の舖石は殆ど到るところ傾斜して、でこぼこであつたにしても、その中に立ち、又歩くことさへも出来ぬではなかつた。風と雨とはその中に意のままにまぐれ込んだが、一番の大潮でもそれにはとどかなかつた。その孔は小ヅウブルの近くにあつて、何時でも這入られた。ギリアットは一つの孔を倉に、他を鍛冶場に宛てた。

彼が岩々から蒐められる限り蒐めた帆布、繩ぎれなどもありだけ使つて、彼は、木や鏡を束ね、帆布を包みにして、破船の断片を荷造りした。彼はそんなものを用意深く一つにからけた。岩の凹みに彼は橋頂索ブリッジワイヤを發見してそれによつて、彼は大きな材木を揚げる事が出来た同様に彼は暗礁の間に散らばつてゐるのを見付けた。鎖の雑多な部分を海から曳き摺りあげた。

ギリアットは斯麼仕事を驚くべき精々しさと、粘り強さを以て爲した。彼は何でも計畫したことを

一切やりおほせた。彼が蟻にも似た忍耐を遮るものは一つもなかつた。

其週間の終りに、彼は此花崗石の倉庫に、船具を蒐め、嵐の爲めに、形のない断々にせられたものを順序をと、のへて納めた。帆の下索の置場、シートの置場などが其處にあつた。舳の索は絞轆にまじつてはるなかつた。バレルはその孔の數どほり、整つてゐた。綱の覆ひは、壊れた錨の環から、ほぐされて、房に結ばれた。滑車のない三孔滑車は綱から取り離された。纜耳、その他の船具も、嵐で全然破損はしてゐなかつたけれど、備付の場所とは異つた區劃にあつた。一切の梁材、木細工、その他いろいろ、類似のものが別々に積み上げられた。出来るところでありさへすれば何處へでも、彼は船底から取つた板片を、彼是と取り雜せて始末したのであつた。岩礁の先端と、纜の捲きあけ小綱との間には何の紊れもなかつた。又その他の同じ種類のものにも混雜したところがなかつた。各部がちやんとその場所に置かれて、破船全體がそこに分類せられてゐた。それは納屋で見られる渾沌の一種であつた。

大きな石に張つた帆は、裂け、破れてゐたけれど、雨に濡れて悪いものを保護するの役に立つた。破船の舳は碎けてゐたけれど、彼は三つの滑車のついた、その吊錨架二つを取りとめることが出来た。

彼は又突梁ヤリだしをも見付て置いたが、その結駐索をほぐすのに、ひどい面倒をみた。それは非常に堅く、又締つてゐた。船の習慣で、揚錨機の助けをかり、且つ乾燥した天氣に巻いてあつたのだつたから。併しギリアットは、後で大きに役に立つ見込みのある此太い綱を、ほぐしとるまで辛棒した。

彼は又首尾よく小錨をも發見した。それは一つの岩にかゝつてゐたのを、引潮で現はしたのであつた。

タンゲルウィユの室で、彼は白墨一つを發見して、それを彼は大事に藏つて置いた。彼は何かに印をつけることがあるだらうと思つた。

一箇の十能と二三の立派な手桶とで、此仕事の道具がすっかり揃つた。チューランド號の石炭庫に残つたものは、彼は皆自分の倉へ運び入れた。

一週間後、取り片付けが終つた。岩は綺麗に掃き潔められ、チューランド號は軽くなつた。今は機關以外には、船體に重しをかけるものが何にもなくなつた。

前部に垂れ下つた舷櫓の部分は船體をいためなかつた。其塊りはとめがないので、岩の縁に支えられて、吊り下つてゐた。けれども引つぱるには大きくて、幅が廣く且つ重く、そして彼の庫に邪魔をするのがつた。ギリアットはそれをそのままにして置いた。

彼は此作業中は始終、深い思案にくれてゐた。彼は船首像、ゲルンセイ人の所謂人形を求めて、搜したが、徒勞であつた。それは永久に浪が持ち去つた物の一つであつた。ギリアットはそれを見付け出すには、その兩手を失くしても惜まなかつたらう——若し當時特別に兩手の用がなかつたならば、

倉庫の入口と、その外には、二つの屑が塚に積み上げてあつた。一つは鑄直して使へる鐵屑の塚、モ一つは燃やされる木の塚。

ギリアットはいつも朝まだきに仕事をした。睡るとき以外、彼は一寸とも休まなかつた。

あつちこつちに飛び翔ける海鳥は、仕事をしてゐる彼を打ち成つた。

第十章 鍛冶場

納屋は出来上つて、ギリアットは鍛冶場を建てた。

彼が擇んだ他の孔は、非常に深い鑛山の、坑道にあるやうな、一種の通路がその内にあつた。彼は最初之を自分の住居にしようと思つた。けれども此通路は、しよつちう、ひどく風が吹きとほつてるので、彼は止むを得ずさうすることを歇めた。此空氣の流通は絶えず、新たになるので、彼は此處に鍛冶場を置いたらと先づ思ひついた。それは自分の部室には宛てられないので、鍛冶場に使用することにした。障碍を轉じて我々の目的に使ふには、成功までになか／＼手数のかゝるものだ。風はギリアットの敵であつた。彼はそれを召使ひにしようとした。

或る人間に當てはめられた『何の役にでもたつもので、何の役にもたぬもの』といふ諺は岩の洞穴にも當てはめられる。彼等は何の利益をも只では提供しない。我々は一方には浴槽形に便利に出来た岩の凹みを見付けるが、それは裂け目があつて、それから水が漏れる。此處に岩の部屋があつても、それには屋根がない。此處に苔の床があるが、濡れてぐしょ／＼してゐる。此處に眩掛椅子がある、併し堅い石で出来てゐる。

ギリアットが企てた鍛冶場は、自然によつて荒刻りせられたのであつた。けれども此粗鑛を、使へる形になほし、此洞穴を工場、鍛冶場に改築する以上に、面倒なことはない。三つか四つの大きな岩

の、煙筒の形をして、末は狭い裂目に終つたものを以て、偶然は、一呼吸毎に九萬八千回の空氣を吐き出す。長さ十四呎の巨大な昔の、輪とは全く異つた一種の大きな不恰好な、輪をつくつた。是は全然ちがつた構造であつた。颶風の速度はきつぱりとは測れない。

此力の過剰はわづらはしいものであつた。不斷の通風を整へるのは難しかつた。洞には二つの便利があつた。即ち風がその端から端まで吹き通し、水も又同様であつた。

是は海の浪ではなく、奔流といはんより、寧ろ泉の如く、絶えず、滴り墜つる流れであつた。

白い濤により、たえず岩に打ち揚げられる。泡——時には空中百呎も擧げられる泡は、凹みを瞰下す、高い岩々の間にある。自然の空洞を、海水で満した。此溜池が溢れて、傾斜面の稍後ろに、幅約一時、長さ四五尋の瀧をかけた。折々の雨も溜池を満す助けとなつた。通る雲が始終、驟雨を岩の水盤に墜して、溢れかした。水は鹽氣を帯びて、飲むには適しなかつたけれど、澄んでゐた。此小流は、優しい雫を爲して、長い海草の端から、丁度頭の髪の端からでも墜ちるやうに、滴り墜ちてゐた。

彼は此水を洞穴の通氣を調節する用にあてたらばと思付いた。粗雑に、取り急いで拵へた二三の木管——その一つには呑口のついた——と一本の煙筒と、止めも分銅もない、單に上の方に風の漏れない装置を施し、下に呼吸抜きをついた、下水溜の大盥をもつて、ギリアットは我々が既に述べたやうに、聊か鍛冶と、機械とを知るものから、彼がもたなかつた輪の代りに、今日カニヤルデルと稱ぶものより稍々不完全だが、ビレーニー山下の民が、昔トルムベと稱んだものよりも、稍々御粗末でない、輪をつくつた。

彼はライ麥の粉をもつてゐた。そして彼はそれを以ていくらかの糊を拵へた。彼は又白い大索をもつてゐたので、それをほぐして麻屑とした。此糊と、麻屑と、幾つかの木片を以て、ヂューランド號から發見した、以前に發火信號の裝填に使つた火藥嚢を用ゐて、小さな空氣孔をつくり、そこだけを殘して、彼はあらゆる隙間を塞いだ。此火藥嚢はギリアットが鍛冶の爐に當てた大きな石に向けて、横に臥かされた。粗屑で出來た栓が、必要な場合には、それを閉すやうになつた。

此後彼は薪と石炭を爐に積み上げ、露き出しの岩に當て、その鋼を打ち當て、ほそくした麻屑にその火花を移し、それで以て爐の火を焚きつけた。

彼は靴を試みた。それは工合がよかつた。

ギリアットは單眼巨人の矜りを感じた。彼は空氣、水、及び火の主人であつた。彼が風に一痛の肺臓を與へて、荒い通氣を、必要な靴に變えたから、空氣の主人、彼が小な瀧をトロムへに改めたから、水の主人、此濡つた岩から焰を出さしたから、火の主人であつた。

洞穴は殆ど到る處上向きに開いてゐたから、煙は曲つた斜面を燻して、自由に漏れ出た。永久に白い泡ばかりを受けるものに定まつてゐた岩は、今燻らす煙とお昵懇になつた。

ギリアットは鍍砧火として、大きな滑かで、目の細かな、丁度必要なだけの形と、廣さとを具へた圓い石を一つ擇び出した。それは彼が槌を打つ基礎と爲つた、けれども覺束なく、又非常に危險なものであつた。此岩の端の一つは、圓るめられて、二點が尖つてゐるから、他に良いものがないので、圓錐形の兩角の代りを勤めた。併し金字塔形の兩角は欠けてゐた。それは古代のトログロチテースの石

砧であつた。浪に磨かれた表面は、殆ど鋼の硬さを以てゐた。

彼は自分の鐵砧を持つて來なかつたのを残念がつた。ヂューランド號は、嵐の爲めに二つに折れたので、彼は普通前船に收めてある大工の道具箱や一切の道具を見付けだしたいものだと思つた。けれども持ち去られたのは、丁度その前半部であつたのだ。

彼が岩に發見した此二箇の割れは互に近接してゐた。倉庫と、鍛冶場とは互に連絡してゐた。

毎夕、仕事が終わつたとき、彼は水に溺したバスケットや、岩間に得られる限りの食物たる海膽、蟹、又は二三の *Crabbes de mer* を少し晚餐にして、彼が節付けた綱のやうに顛へながら、再び大ヅウブルの上の岩窟に攀ち登つて、寝るのであつた。

彼が日々の仕事は物質的であるので、彼が送る生活のうちで、うっかりと氣にとめないでしまふことが増していつた。事實極まれば放心となる。さまざまな變化に富んだ彼が肉體的の勞働は、彼の位置、彼の仕事について、呆りとなることを少しも妨げなかつた。普通、生理的疲勞は地に結びとめられた糸である。けれどもギリアットに企てられた事業そのもの、珍奇さが彼を心象的な、薄暮の領域に閉ぢ込めた。彼は時には雲の中で、槌を打つてゐるが、よく見えた折りもあつた。他の時には彼の道具が武器のやうに見えたこともあつた。彼は或る隠れた攻撃の危険をおさへ付けてゐるやうな、或はそれに備へてゐるやうな妙な感じを抱いた。綱の撚りをほぐし、帆の糸をとき、一對の梁材を立てることが、斯るときには、戰の武器を造つてゐるやうであつた。彼の救船事業について彼がとつた數千の細かい苦痛は、遂に、彼をして、餘り不手際で、すつかり見え透いてゐる攻撃に對して、用意して

みると似寄つたことに終らしてしまつた。彼は思想を言ひ現はす詞を知らなかつたけれど、それを悟つてはゐた。彼は職人であるといふ感じが愈々薄らいで、彼の習慣は愈々多く未開人といふ感じが多くなつた。

彼の仕事は自然の力を打ち従へ、それを指導するにあつた。彼は仄かにそれを感じてゐた。それは彼が思想の不思議な擴張であつた。

彼の周囲には、眼の及ぶ限り、徒費せられ、失はれた、果しない努力の大觀があつた。人心にとつて、大海の底知れぬ、無限の空處に、活動する力の滿ち滿つることを冥想する程、わづらはしいものはない。心は自然に斯る力の目的を求めらるやうになつてゐる。空間に於て小歇みなき運動、疲れることなき海、常に何處へか急ぐやうに見える雲、努力の莫大にして、神祕な蕩盡——凡て是が問題である。此不斷の運動は何處へ向ふのであるか？是等の風は何を建設するか？此巨人の呼吸は何を築きあげるか？嵐の此咆哮、震動、嗚咽は何に終局するか？此驚しさは、何であるか？此疑問の引き差しは、海そのもの、滿乾の如く、永却にたえないものである。ギリアットは自分に對しては答へることは出来た。彼の仕事を彼は知つてゐた、けれども遠く、遙に彼を取り巻く不斷の騷擾は、その永却の疑問を以て、目茶苦茶に彼を惑はした。彼自らには分らず、器械的に只外界の壓迫により、奇妙な、無意識な當惑以外には、何の効果もなしに、ギリアットは、この夢のやうな氣に於て、彼の努力を、どうにかして海波の、異常に徒費せられた努力と混淆していつた。どうして、彼の位置にあつて、彼はどうして、恐ろしい、勤勉な海の影響を免がれ得ようぞ。思索の及ぶ限り、浪の波動、泡の耐久、岩の

目に見えない毀損、四方の風の猛烈な打撃を思索するせずして、何を思索し得られやうぞ？それが不斷の更新、その岩盤、そのダイアの如き雲、極りない苦痛と、疲勞とは如何に恐ろしいことであらうぞ！

無目的か？然らず！けれども何の爲めに？噫、無限の不可知なる貴君ばかりが之を知らしめすので御座います。

第十一章 發見

岸近い岩は時に人が訪ねてくるが、沖の岩には決して人が來ない。そんなところで何をするのだ？其處から何物をも供給し得られない。果樹も其處にない。牧場も、獸も、人間の用ゐられる泉もない。それは人目のないところの裸體である。その峻しい崖を水面高く擡げ又はその鋭い尖を水面以下に隠してゐる岩だ。免れ難き破船より以外には、何物も其處には發見せられない。

古い海語に「イゾレ」と稱ばるゝ此種の岩々は我々が述べたやうに、變な場所である。そこには只海のみがある。海は自分の意志を行ふ。地上生物の痕跡が、少しも海をわづらはさない。海はそれが近寄ることを含羞む。人間は海によつては恐怖である。浪の永久な獨り言は其處では邪魔を受けない。浪は岩に働き、その破れを繕ひ、その峰を尖らし、それをぎざ／＼にし、それを改造する。海は花崗石を貫き、軟石を侵蝕し、硬石を裸にする。海は掠奪し、鑽蝕し、穿孔し、割る。海は岩をあなぐらを以て満たして、それを海綿狀となし、内部を割り取り、外部を彫刻する。海のものたるあの秘密の

山に、海は自分だけに洞穴や、拜殿や、宮殿を拵へる。海は壯麗怪偉な植物をもつ。それは刺す浮藻や、根を生した怪物から成り立つ。海は斯る恐ろしい壯麗をその底の薄暗に隠し去る。隔絶した岩々の間には、海を打ち成る眼がない。間隙が海の運動を妨げる事もない。海に、人間には近寄れない、その神秘的な側面を自由に展開するのも其處に於てである。此處に海はその生活の恐ろしい、あらゆる秘密を保つてゐる。此處に海の不可知な驚異が集つてゐる。

岬、前岸、出鼻、突角、暗礁、淺瀬は、我々をして言はせれば、眞の建築である。陸地の地質學的變化は、海の廣漠たる運動に比較すれば、至極聊かなものである。その岩礁、此海の住居、此金字塔と、浪の龍巻は、此本の著者が、或る場處で「自然の美術」と稱へるところの、神秘的藝術である。その體裁はその宏大である。偶然は此處では意志に似てゐる。その構造は多様である。その業は岩珊瑚の藪のやゝつこやしい迷路、本寺の宏壯、五輪塔の華麗、山の雄大、寶石細工の纖巧、彫刻の凄愴などざらにある。それは胡蜂の巢のやうに、窩房に滿ち、動物園のやうに窟に滿ち、土鼠穴のやうに地下の通路に滿ち、バスチユの如く土牢に滿ち、野營の如く艮に滿ちてゐる。それは戸口をもつてゐるが、閉塞せられてゐる。その圓柱はあつても、打ち碎かれ、その塔はあつても、よろけ、その橋はあつても、中斷してゐる。その部屋は用ゐられず、只鳥に向く室が此處にあれば、魚に向く室が其處にあるつきりだ。それは通れない。その建築の様式はいろ／＼で、とりとめたところがない。平衡の方法をかへりみ、又は顧みず、中絶し、停止し石に石を積み拱様に始まり、豪輪に終る。エンセラドスは石工である。驚くべき力學が此處にその問題を苦もなく解いてみせる。恐ろしく覆ひ被さつた岩

が今にも墜ちさうで、しかも墜ちない。人の心はどんな力で、その目も眩むほどの巨岩を支えられてゐるのか推測がつかない。暗い入口、裂け目、巨大は垂下等千變萬化である。此バベル塔を支配する法則は人間の推測の及ばぬものである。此偉大な、世に知られぬの建築家は何の計畫をも立てないけれど、總てに成功する。ごち／＼やに集つた海は、怪偉な紀念碑をつくつて、理智を絶して、しかも平均を保つてゐる。此處に力以上のものがある。それが永却である。併し秩序は缺けてゐる。浪の荒い騷擾が石の曠野に入つて來たのだ。それは化石した嵐のやうなものである。その粗野な建築程強い感銘を與へるものはない。常に立ちながら、常に仆れるやうに見え、そのうちにはあらゆるものが支撐を與へ、又その支撐を引き去るが如くにも見える。對抗する線と線との争ひが一箇の建物をつくり、洋と、嵐との彼の古き抗争の痕跡を以て滿たしてゐる。

此建築はその恐ろしい傑作をもつてゐる。ゾウアル海はその一つであつた。海はそれを仕立て、憂鬱な懸念を以つて、完成した。水がそれを舐めて、形を拵へた。それは醜惡で、奸結、暗くして、洞穴を以て滿たされてゐた。

それは枝がさして、その枝々が、底知れぬ深みへ、自らを失ひ行く、海底洞の、完全な組織をもつてゐた。此迷路のうちの或るものは退潮のときには露はれた。人は其處へ這入れるが、生命がけである。

ギリアットは、その救船事業の爲めに、是等の洞穴全部を探見しようと決心した。厭はしくもないものは一つも無かつた。到る處の洞穴には、屠場の異様な光景が、あの變な屠殺の痕跡を、洋のあらゆる

る誇張を以つて現してゐた。こんなふうには剝られた坑の中で、永久の海壁に、斯る醜怪な自然の壁畫を今まで見たことのない者はその形の奇怪に驚くのである。

是等の無慈悲な洞穴は又いかさまで、横着なものである。そこにまご／＼してゐる人こそ災難だ。満潮は天井までその洞穴を満たすのだ。

海のかたし貝、海苔などはその間には豊富にある。

そんなものは穴の中に一緒くたに集まつた澤山な石に堰きとめられてゐる。その滑のかな、大なる石の或ものは、一噸以上の重さがある。それはいろ／＼の大きさ、いろ／＼の色彩をもつてゐる。がその大部分は血の色を帯びてゐる。或ものは髪の毛のやうな、ぬら／＼した海藻に覆はれて、海に路をあけた、大きな碧の土鼠のやうに見える。

洞穴の二三は、卒然半圓形の屋根に終つてゐた。他のものは、秘やかな循環の、大脈管で、暗らい曲りくねつた裂目をつくつて、海の中に伸びていつた。こんなものが、海底市街の小徑であつた。けれどもそれは入口から奥まるにつれて、漸次と小さくなり、遂に人が通れる程の道を残さない。灯した炬火をたよりにして覗き込んでみても、ギリアットは貝水の滴る暗い洞穴の外、何にも見ることを得なかつた。

或る日、探險しながら、彼は此罅隙の一つに冒險を試みた。潮合ひが此企てに好都合であつた。それは穩かで、目のきら／＼照つた、美しい天氣であつた。海から起る突發的な出來事の爲め、危険が増すやうな惧れは少しもなかつた。我々が述べたやうに、二つの必要から、彼が斯る探險を餘儀なく行

つたのであつた。即ち、仕事の助けとなるべき破船の断片やその他のものを拾ひ集めねばならなかつたし、又食物とする蟹や、海老を獲らなければならなかつた。海の上の貝は段々と減つてきてゐたのだから。

罅隙は狭くして、通路は困難であつた。ギリアットは外に照る日光を認め得た。彼は骨を折つて、出來る限り身をねぢ曲けて、出來る限り遠くまで洞穴に侵入していつた。

彼は疑はずして、岩の内部をクリユバンがヂューランド號を乗り揚げた點まで進み入つた。それには廊下、坑、部屋などが丁度、埃及王の墓のやうに、一ぱいあつた。此洞穴の網目は總ての迷路中で、最も錯雜したもの、一つであつた。水の働き、小歇みなき海の堀鑿したものであつた。地下の迷路の枝々は、或は浪際に口を開き、又は煙筒の形をして、深く、眼に見えない、一つ以上の出口によつて、外なる海に續き通ふてゐた。クリユバンが海の中に潜つたのは此附近であつたらう、併しギリアットは是を知らなかつた。

此罅の洞穴に於て——其處では罅は危険のうちに算へられなかつたことは事實だ——ギリアットはまはり、攀ぢ、屢々頭を打つ／＼、しやがみ、又立ち、幾度も足場を失ひ、又踏み止まり、苦勞しながら進んでいつた。次第に廊下は廣くなつた。一道の光りが現はれ、次で彼は不意に奇妙な形の洞穴の入口に自身を見出した。

日の光りは丁度いゝ時分に來た。も一步で、ギリアットは、井戸、恐らくは底のない井戸に墜るところであつた。斯る洞窟の井戸は、最も強壯な泳ぎ手すらも、やられてしまふ程冷たく、又自由を失はせる力をもつた。

のみならず、その峻しい海壁のどこにも、も一度攀ぢ登り、又は縋りつく方法はなかつた。

彼はパツタリと駐つた。彼はたつた今脱け出た罅隙は、狭い、すべりした、突角で終つた。峰のある壁の透持である。彼はそれに靠れて、内部を檢めた。

彼は大きな洞穴の中に居た。彼の頭上には、近頃解剖したと人は思ふかもしれぬ大きな髑髏の内側に似ないこともない一つの天井があつた。天井の溝形筋のぎざぎざした水切りの肋骨は、頭蓋骨の、枝をさした織緯や、鋸齒状の縫合線を眞似たやうであつた。それは石の天井と、水の牀をもつてゐた。洞の四壁の間にビタ／＼打つ水は、うねる瓦のやうであつた。洞穴は四方とも閉ざされて、窓一つ、空氣孔一つも見えなかつた。壁に破れもなく、天井に裂け目もなかつた。光りは下から水を通して來た——妙に暗い光りが。

ギリアットは、薄暗の廊下を探見してゐる間に瞳孔の縮まつたので、蒼白い光で、身のまはりにあるものを何でも見分けることが出來た。

彼は、ジェルシイのブレモン洞、ゲルンセイ島のクルウ・マイエ、貿易者が贓品をかすので、斯く名づけたセルク島のプウチリなどを訪ふて馴れてゐた。けれどもそんな驚くべき洞穴のどれでも、彼が其時入つた地下の、海底室には比ぶべくもなかつた。

彼が脚下の水底に、彼は沈降した弧門のやうなものを見た。此天然の筋違骨たる弧門は浪につくられたもので、その二つの暗く、深い支柱の間で輝いてゐた。光りが外海から此洞穴に入るには、此沈没した門を通してくるのであつた。灣から上方へ放射する妙な光りである。

きら／＼する光りは、大きな扇のやうに水の下に擴がり、岩々の上に反射した。その直接の光線は、長い、廣い矢に分れて、下の暗にくつきりと浮き上り、一つの岩から、他の岩へかけて一層明るく、或は一層鈍くなつて、其處此處硝子板を通つてくるやうに見えた。その洞穴に光りのあつたのは事實だ。けれども光りは此世のものではなかつた。之を観る人は、恐らく路は或る星に下りた夢をみてゐると思ふだらう。煙きは一箇の謎で、スフィンクスの瞳から發する水色の光りのやうであつた。洞全部は毒敵に大な又奇妙に華やかな髑髏の内部を表はした。圓天井は腦の腔で、弧門は口、目蓋は缺けてゐた。その口を外なる白晝にかつと開いて、差し退く潮を、交互に吞吐する洞穴は光りを嚙み、苦味を吐き出す、或る賢く、兇悪な生物らしく見えた。海水の硝子様の媒介を経てこの入江に透してくる光りは、アルデバランから來る星光のやうに、碧になつた。水は、濕つた光りに満たされて、液状のエメラルドの如く見えた。珍らしく優美なアクワ・マリンの色彩が、柔かい色を洞穴中に擴げた。屋根はその大臑葉と、その多端な分岐とをもつて、神經の如く、金線石の柔かな反射を發した。漣は天井に反映して、順序よくたえず墜ち、また解け、その輝く鱗を擴げ、また縮め、神祕な、目まぐるしい舞踊をおどつた。それを觀る人に何か怪しい、幽靈のやうな印象を與へた。人は何の獲物があるか、どんな期待が實現されるかを怪みながら、此活きた火の、壯麗な網目を、ぞく／＼身ぶるひなが

ら進んだ。穹窿の突起、又は岩角から、嫺々と緑のやうな植物が多分その根を或る上方の水溜りにある花崗石によつて洗はれながら、その絹のやうな端に、眞珠の雫を一つ宛滴らして、長く垂れ下つてゐた。此雫は時折り柔かな音を立て、ボタンと水に墜ちた。その場の光景は奇妙であつた。是以上美しいものは想像せられなかつた。是以上うら悲しいものは何處にも發見せられなかつた。それはそのうちに死が微笑し、且つ満足して坐つてゐる、驚くべき宮殿であつた。

第十三章 其處で見たもの、其處で出逢つたもの

輝く陰、此驚くべき洞穴は斯麼ものであつた。

浪の音は此洞穴中に聞えた。外の波動は、呼吸のやうに整然と内なる水の平面を揚げつ、抑へつした。それが無言のうちに溢張し、減退するところは、一箇の神祕は、靈が此巨大な器官に満ちてゐるやうに思はれた。

水は魔術のやうに澄み透つてゐた、そしてギリアットは、様々の深さに、穴や、又愈々碧りの濃厚な、突き出た岩の表面を認めた。ある眞闇な穴も其處にあつた。恐らくは測り知らぬ深い穴であらう。

海底門の兩側には、粗末な、省略しられた孤門が、陰を以て満されて、小さな横孔の存在を表示した——中央洞の低い物置きで、最低潮のときにだけ這入れるものだらう。是等の口は、傾斜しに板狀で、多少尖つた角度を持つた根をもつてゐた。幅二三呎の小さな砂濱が、水の働らきで露き出したな

つて、内部へ向つて延長し、奥の方へ消えていつた。

此處彼處、長さ六呎以上もある海藻が、風に長い髪をなぶらせるが如く、水の下に波打つた。そして其處には海の植物の森が見えた。

水の上と下とに、洞穴の壁は、頂から根本まで——穹窿より、見える限りの深さまで——海の怪奇な、昔スペインの航海者がブラデリアス・デル・マルと稱んで、人間の眼には稀にわかる、華かでもつて、壁貼がしてあつた。橄欖色をした、華麗な苔が、花崗石の突起を擴大し、覆ひ隠してゐた。あらゆる突き出た點から、細い、ワレッツシユの莖が垂れてゐた。是は水夫共が晴雨計として用ゐるものである。洞穴中に動く、軽い呼吸はその艶々しい海藻の紐をあちこちと動かした。

此植物の下に、始終、海の玉手篋の稀有な寶玉があらはれた。象牙貝、しどろ貝、王冠貝、箱貝、紫貝、單殻、双殻などが燦爛としてゐた。鐘形の娶笠貝は、小さな小舎のやうに、到る處、岩に附着して、列をつくつて、植民地を分割して、その間を海の小昆虫たるオスカブリオンが匍ひまはつた。二三の大きな丸石が洞内に入つてゐた。貝がそこに宿つた。蟹やいせ海老は海のお洒落者で、レースや縫箔を着込んで、丸石黨の群集に接獨することを避けてゐる。貝塚のきらめきは、浪の下の或ところでは、異様な光りを放射し、その裡では眼は混亂した空色や、黄金色や、眞珠貝のやうな、水のあらゆる色に掻き紊されるのだつた。

洞穴の片側、水線より稍や上に、一つの美事な、奇異な植物が、海藻の縁についた房のやうに附着して、その仕事をつとけて、それを成就した。此植物は、厚く織ばつて、くちやく／＼に絡み合ひ、殆

ど黒色で、到るところ無数の瑠璃色の小さな花で、點をうつた、大きな、ごちやんくして、薄黒い花どりのやうに見えた。水中では、それに小さな、青い焰のやうに燃えた。水の外ではそれは花であったが、水の下では碧玉であつた。是等の植物に装はれた、洞穴の根本に溢張する水は、岩を寶石で覆ふが如くに見えた。

浪が高まるにつれ是等の花は色艶を増し、低まる毎に、再び鈍くなつた。人間の運命もその如くである、——呼吸は生命で、絶息は死である。

洞穴の怪異の一つは、岩そのものであつた。此處に壁、其處に弧門、此處に又もや柱か、壁柱か、出来て、ところ／＼硬く、露き出して、時としては、互に密接して、最も緻巧な自然の彫刻が施されてゐた。何と名付くることの出来ない或る精神が、充分に此馬鹿けて大きな花崗石の塊に籠つてゐた。それは驚嘆すべき海の美術であつた。此處に四角に斷たれ、いろ／＼の部分に圓い腦で飾られ、仄かに浮彫りせられた、一種の欄間がある。その朦朧とした此彫刻のなで、人はミケランジェロの爲め大掴みに粗描してゐるプロメトイスを夢みるであらう。その大天才は、僅かにその槌を二三度振つただけで、此巨人の、朦朧した仕事を仕上げ得たらうと思はれた。別な處では、岩はサラセン人の擔き楯の如くダマスコ模様がついたり、或はフローレンスの花麩のやうに彫刻が施されてあつた。

此配合は野蠻ながら、幸福なものであつた。岩と植物とは、殆ど相觸れないやうに見えながら、その曲線で互に支え合つてゐた。野蠻な岩と、朽葉色の花とは強く抱擁し合つてゐた。是等の脆く、打ち震へる花冠は、太い柱の柱冠やら、結束やらとなつた。それは怪獸脚を掴む妖精の指のやうに見え

た。岩は植物を支え、植物は岩に縋り付き、その抱擁は優雅ながら、恐ろしかつた。

斯く神祕に二つの畸形が結び付いてゐる結果から、至上の、言ひしらぬ美が生れた。自然の業は天才の業に少しも劣らず、絶對的で、威壓するところがある。自然の業はその不用意を以て人心を制壓し、直座に服従せしめる。我々はその不用意を、豫め思案したこと、觀じ、その意味を諒解しない。自然は、その仕事に似て、恐ろしいものが、精妙なものを産む時以上に、我々を吃驚させない。

此奇怪な洞穴は、我々をして言はしめるならば、又そんな辭が許されるならば、「星づけ」られてゐた。人心は其處に、目に見えぬ力に、痴呆となされて、それに屈服した。此穴を満した光りは、天啓の光りであつた。洞穴は人心の創造したものか、それともひとりで出来たものか？人の眼にはそれは不可能な事物の輻輳した現實——見えるには見えても、信するに難き現實と映じた。

海の下から此中に這入つて来たのは日光であつたか？此薄暗の水溜りに顫へてゐたのはまさしく水であつたのか？是等の弓形の屋根や門は、人間の眼に、洞穴と見せかける爲め、夕暮の雲で造つてはなかつたか？脚下にあるのは何の石ぞ、融けて、薄い空氣になつていく、此どつしりとした棒は何であつたか？浪の下に半ば見える、燦し星のやうな、巧妙な寶石は何であつたか？浮世と？縁の土と、人間の顔とは此處からどれだけ離れてゐたか？どんな魔術がその神祕な薄暗をおびやかしたか？どんな情緒が、その同情を、浪の下なる植物の不安な騒しさにまじえたか？

長方形である洞穴の極端に、奇怪にも形のしかりとした、素敵に大きな拱様があつた。それは洞穴中の洞穴の一種、中に拜殿をもつ神殿の如きものであつた。此處に、神殿の帷の如く中を隔る明ら

緑の或物一枚の後に、四角な邊をもつて、祭壇に似た一つの石が浪の中から拔出てゐた。水がそれを八方から取り圍んでゐた。そこにはあだかも女神が今しがた降臨しましたやうに思はれた。人は、その坑の中、又はその祭壇の上に或る天國の形が、美しい肌を出して、憂れはしげに永久に其處に駐まつてゐるが、人間が近寄ると見えなくなるのだと、夢想したかもしれない。内にそんな幻影がないものとしたなら、其の堂々たる部屋のある理由をさすることは困難であつた。闖入者の畫の夢は再び不思議なまほろしを呼び起したであらう。清い光りの洪水は、ほのかに見える白い肩に落ち、額は曙の光りを浴び、卵形のオリムピヤ顔をして、上半身は神祕な優雅に満ち、腕はやさしく垂れ、髪は曙光にきちんと結ばれ、身體は純白に形つくられ、神聖な雲に半ば包まれて、處女の眼眸をもつて、海より昇るヴェヌスの神が、渾沌から出たエヅカー——斯摩水が人心を満たした夢であつた。

恐らくその時、神聖な裸體が祭壇の上に憩ふてゐたであらう。言ひ難き恍惚^{エクスタジー}を放射する此足臺の上に、一箇の白い光明、生きて蠢と立つ女神を想像し得られたであらう。

自然の祕密の間に於ける、一種の豫言者であるギリアットは、其處に考へながら、繾綣あつた感動を以て、突つ立つてゐた。

突然、彼の脚下數呎の下、その水の液狀寶石のやうな悦ばしい澄明のうちに、彼は不思議な形を爲した或る者が近寄るのを見た。長いぎざ／＼な帯が、浪の搖ぐ裡に動いてゐた。それは泳がなかつたけれど、意のままに突進してしまつた。それは、目的を以てゐた。何處やらへ急速に進んだ。それは奇妙な形をして、水で洗ひ落せない埃を身にくづ／＼つけてゐた。それは見る者をぞつとさせるばかりでな

く、不潔であつた。見てゐる者はそれが何か怪しいものだと感づいた。それは生きてゐるものであつた。でなければ、それは單に幻影であつた。それは洞穴の一層暗いところをもとめて、遂にその中に消え去つた。

それが陰の中に滑り込んで、消え失せたとき、濃い陰は一層暗くなつた。

第二編 仕事

第一章 何にも持たない者の手段

洞穴は容易にその探見者達をひきつけて離さなかつた。入り込むのも難しかつたが、出るのはなほ一層難しかつた。併しギリアットは切り抜けることが出来た。ギリアットは元のところへは戻らなかつた。彼は捜すもの一つも見付なかつた。彼は珍らしいものを悠々と見てゐる暇をもたなかつた。

彼は直ぐに鍛冶場に働いた。道具は不足してゐた。彼は道具を造りに取りかゝつた。薪として破船、動力として水、鞆として風、鋳砧として石、技術として彼の本能、力として彼の意思をもつてゐた。

彼は熱心に、彼の仕事を嫌むた。

天氣は彼の仕事に微笑してゐるやうに見えた。それは乾燥が續き、彼岸嵐も吹かなかつた。三月が來てゐるが、靜穩であつた。日は長くなつた。空の青、場面に於ける總ての運動のおだやかさ、正午

の快晴が心配を拭き去つた。浪は日光に嬉しげに踊つた。ユダの接吻は裏切りの第一歩である。こんな愛撫なら洋は放埒に振りまくのである。洋の微笑は女のそれの如く、時としては信用しられない。僅な風があつた。水力輪はその時節にしては大變よく働いた。風があり過ぎれば、その助けとなるどころか、却て邪魔をするのであつたらう。ギリアットは鋸を一挺持つてゐた。彼は自分の爲めに鋸を拵へた。鋸を以て彼は木を、鋸を以て石を攻撃した。それから彼は鍛冶の二本の鋏腕——やつとこの代りに、ペンチを利用した。やつとこは挟み、ペンチは持ち扱ふ。一方は閉ぢた手、他は指のやうなものだ。段々彼は澤山の補助物をつくり、その武具を拵へた。彼は木で、鍛冶場の衝立てを造つた。彼が主なる仕事の一つは滑車を擇り分けて、それを修繕するにあつた。彼は捲揚機の絞轆及び心車を修繕した。彼は壊れた根太の不整形になつたところを切り棄て、端を削り直した。彼は、前にも言つたやうに、大工仕事の必要から、木片を澤山しまつて置いた。そして、その形の大きな木目の性質に従ひ、それ／＼一方に積み上げて置いた。一方に檜、他方に松、短かいものは長いものから別にして——。是が彼の必要な折りに、随時用ゐる貯蓄であつた。

捲揚車を造らうと企てる者はたれでも、梁材や、小綱をもつてゐなければならん。けれどもそれだけでは充分でない、彼れ、綱索を持つてゐなければならん。ギリアットは大小のゲールを貯へてゐた。彼は破れた帆を引き裂いて、立派な繩にした。是を以て彼はロープをつないだ。けれどもつなぎ目は腐れやすかつた。だから斯るケーブルを急いで使はなければならなかつた。彼はタールを持たなかつたから、索は生地のままにして置くほかはなかつた。

ロープが繕はれたので、彼は鎖の修繕に取り拵つた。

石の鋏砧の、横に出た、圓錐形双角の部分に當るもの、御陰で、彼は粗末な、けれども丈夫な環をつくる事が出来た。是を以て彼はいくらかの長さの鎖を一緒につなぎ合せて、長いものとした。獨りで鍛冶をやるのは、面倒以上のことである。併し彼は遣り遂ふせた。彼は只、比較的小さなもので、片手のやつとこで扱ひながら他の手で槌をふるひ得られるものを、鍛え造つたことは事實であつた。

彼は船橋の鋏格子を、様々の長さに切つて、各々の一端を尖らし、他端を平かにした。此方法により彼は長さ約一呎の長い釘を造つた。此釘は船橋をつくるに多く用ゐられるもので、何でも岩に定着せしめるのに必要なものだ。

こんな仕事は一體何の爲めであつたらう？ 今に分る。

彼は數度となく小斧の刃をつけ、鋸の目をたてねばならなかつた。鋸の目を立てる用に、彼は三角鋸を拵へた。

折々彼はデューランド號の揚鐵機を用ゐた。鎖の鈎は折れた。彼は代りを造つた。

やつとこやペンチの助けをかり、又鑿を捻廻しに用ゐて、彼は船の水掻車二つを取り外づしにかゝつた。彼はそれをやりとけた。それはその構造の特殊なるが爲めになし得られたのだつた。車を覆ふた外箱は、車を藏つて置く用になつた。此箱の板を以て二つの箱を造り、二つの水掻車を、一片々々、各部を注意深く敷へて、その中に藏つた。

彼の白墨は此目的に大切な用を勤めた。彼は二つの箱を破船の一番丈夫な部分に置いた。此準備が終つたとき、彼は大困難に逢つた。デューランド號の機關をどうするか、彼の眼前に横はる問題であつた。

水掻車を分解することは出来ると知れてゐた。が、機關の方は大きに事情が違つてゐた。

第一、彼は機關の細部に亘り、殆ど全く知るところがなかつた。斯麼盲目的の働きは、彼に取り返しのつかぬ損害を與へるかも知れない。よしや彼がそれを分解しようと敢て企てみたにしても、彼が洞穴を鍛冶場とし、通風を輔とし、石を鋳砧とすることが出来た以上に、他の道具が必要であつた。だから機械を分解しようとするれば、それを破壊する危険があつた。

此企ては一見全然出来ないことのやうに見えた。

此計畫の表面の不可能は、行手を塞ぐ石壁のやうに、彼の前に立つた。

奈何したらよからう？

第十四章 準備

ギリアットに一つ考があつた。

第十六世紀の、科學の暗黒時代——フモンソンが電氣の第一法則を、又ライルが第二則を、クウロムが第三法則を發見した遙か以前——自分の息子より外には手助けをもたず、お粗末な道具を以て、

ラ・シャリテ・シユル・ロワルの大時計室に於て、大工のサルブリが、荷車の絞轆に、齒車の如く入れまざつた、五つ、或は六つの問題を、一舉に解決した以來、針金一本切らさず、齒一枚缺かさずして齒車の中から輪を取り出し、一つにしたまゝで、驚くべき無難作な、時計臺の第二階か第一階へ、全部鍍と鑲嵌とで造られて『その中に人が夜看視の出来る程大きな』、素晴らしい時の通知者を、その機械、その階筒、その鼓、その鈎、その分銅、その發條の鞘、その水平な振子、その留め、その大小の鎖、一箇五百ポンドもあるその石の分銅、その鐘、その舌、時を打つその撞木と共に取り下す方法を發見した、貧乏な職工の、かの偉大な、驚くべき成功以來——私はいふ、『此奇蹟を成就した、又その人については、後代の者が名をすらも知らない、その人の時代此かた、ギリアットが想ひめぐらしてゐた計畫と、比較し得らるべき何物も企てられたことがなかつた』と。彼が成就せんと夢想してゐた仕事は一層恐ろしいもの、換言すれば遙かに織巧なものであつた。

巨きさ、織巧さ、困難の紛糾といふ點から見れば、デューランド號の機關に於ても、ラ・シャリテ・シユル・ロワルの時計に於けるに劣らぬものであつた。

習らぬ機械師はその子息の助手をもつてゐた。併しギリアットは單獨であつた。

ミユン・シユル・ロワルから、ネゼルから、或はオルレマンからさへ集つた群集は、必要な場合はサルブリの手傳ひをやり、その親しい聲で彼を激勵することも出来たが、ギリアットはその身邊に風の音以外の聲、浪の押寄せる以外の群集をもたなかつた。

そんな計畫が向ふ見すでないならば、無智の怯懦より以上に不思議なものは世にない。無智が大膽

となるべき、彼女は時としては、そのうちに羅針の如きものを持つ。往々、學問のある頭腦よりも、單純な心がより明かな、眞理の直觀をもつものだ。

無智は企てを誘ふ。その仲間たる好奇心と共に一勢力を形造るのは、驚異の状態である。智識は屢々調子を紊し、用心をし過す。ガマが若し彼の前途に横するものを知つてゐたならば、彼は嵐の岬の前に尻込みしたであらう。若しコロムブスが大地理學者であつたならば、彼は亞米利加の發見を仕損じたであらう。

モン・ブラン峰の二番目にうまく登りついた者は學者ソツシユルであつたが、一番目は小羊飼ひのバムであつた。

是等の實例は、例外であつて、その爲めに規則として存する科學から、何等割引するものでないことは、私も認める。無智な人は發見し得られる。發明する人は學者である。

單橋船は依然として「人岩」の人江に繋留せられて、海はそれを其處に安らかに残した。ギリアットは、萬事それと連絡がとれるやうに前以て準備したことは、記憶すべきである。彼は單橋船を訪ふた。そして注意深く、その幅を二三箇所、特に中央部を測つた。それからヂユーランド號に戻り、機關室の牀幅を測つた。此幅は勿論、水掻車を入れないで、彼が小舟の最幅廣な部分よりは二呎狭かつた。だから機關は單橋船の甲板に積み得られるのだつた。

がそれをどうしてそこに持つて行かれうか？

第三章 ギリアットの傑作はチェリオの傑作を助けに来る

此時分ギリアットの仕事をしてゐる附近をうろつくやうな遠ひ漁夫は、二箇のヅウル岩の間に奇妙なものを見て、その頑冥な心に酬るを受けたであらう。

漁夫の眼前には、等しい距離をおいて、一つの岩から他へ延びて、何よりも丈夫な支柱たる岩に押し込んだと見える、四本の頑丈な梁木が映じたであらう。小ヅウルの上の、岩の突起にその端は置かれ、押立てられてあつた。大ヅウアルの上に、それは樋で、梁そのものに立つて、人への力強い手によつて打ち込まれてゐたのだつた。是等の支柱は岩と岩との距りよりは稍長かつた。だからそれは丈夫であつた。だから又それが傾いてゐた。それは大ヅウアルには鋭角を爲し、小ヅウアルには鈍角を爲してゐた。その傾斜はほんの僅かであつた。がそれは不平均で、不完全であつた。併し此不完全の部分は、ヂッキを受けるやう、用意してあるものと見られた。此四つの梁材に四組の捲揚機械が附着してゐた。各機械はその繩が下つて、その端に單滑車がついてゐた。此距は危険ならぬ程には餘りに遠かつたが、行ふべき仕事の都上止むを得ぬものであつた。此捲揚機にケーブルがつけてあつて、それが遠くから見ると絲のやうであつた。此捲揚の下に、ヂユーランド號の巨大な船體は絲によつて吊りおされたやうに見えた。

併し船は未だ吊りおされてはゐなかつた。組桁の下に、八箇の堅坑が甲板に穿たれた。四つは左舷、四つは右舷の機關のところだ。他に八つの穴がその下に、龍骨を貫いて出來てゐた。四つの滑車から

甲板を貫いて、眞直に降りるケーブルは、龍骨を通過して、他の側にある穴を通して、再び船中に入り、再びデッキを貫いて上方に出て、戻り、梁材まはりに捲きつけられてゐた。此處に梁材によつて支持せられて、一本のケーブルに結ばれ一人の力で動かされる一種の捲揚機械があつた。このケーブルは鈎と滑車とにとほしてあつた。此巧妙な装置は、今時のウエストン滑車の簡易な長所に、古代のヴィトルヴィアスのものを折衷したやうであつた。ギリアットは故人ヴィトルヴィアスのそれも知らなければ、況してまだ生れもせぬウエストンのを知りもしなかつたが、それでも是を發見したのであつた。ケーブルの長さは組桁の不平均な傾斜により、様々に異つた、そして此不平均を幾分か訂正した。タールを塗らない麻は斷れ易いので、ロープは危険であつた。此點では鎖が優つてゐたらう、けれども鎖はうまく滑車に嵌らなかつた。

器械は欠陥だらけであつた。けれども一人の細工としては、それは驚異すべきものであつた。その他は、いろんな細部、それは馴れ機械師には恐らくは判るだらうが、他の者には勝手の判らぬところが、省略しられてゐたことは知れてゐる。

煙筒の頂上は中央なる二つの梁材の間を通つてゐた。

自分の知らない發明を自覺せずして竊窃したギリアットは、三百年後、少しも疑はずして大エサプリの器械を再造した——粗末、不精確で、それを敢て用ゐようとした彼に對して冒險な器械を。

此處で我々は、最もひどい欠點も、一箇の機械が、暴くもあれ、悪くもあれ、動くのに妨げないことを説かして貰はう。それは跛をひくだらうがそれは動く。羅馬の聖ピーターの廣場にある岩塔は、

統計學のあらゆる原則に反した方法によつて建てられてゐる。彼等大帝の馬車は、一步毎に顛覆するかと危まれるやうな構造である。けれどもそれは進んでいつた。マレーイの機械は何たる畸形であつたことぞ！萬事に水力の法則とは反對であつた。けれどもそれはルイ第十四世に立派に水を供給した。何事が起らうとも、ギリアットは信仰をもつてゐた。彼は單槽船の浪除けに、彼がその幅を測つた當日既に、各舷側に、ヂューランド號の甲板にある四つの環と、きつちり同じだけの距離をおいて。二對の鉄の環を取り付けたぐらゐに、その成功を豫期してゐた。

明かに彼は其心に完全に、且つ決定した計畫をもつてゐた。一切の機曾は彼に反對であつても、彼は明かに一切の用心だけは、少くとも自分の助けとなるやうにして置かねばならんと、決心してゐた。彼は無用と思はれることをやつた。

手堅い用心のしるしである。

彼の遺り口は、前にも述べたとほり、機械のことに馴れたものでも、見る者を惑はした。

彼が大骨折でもつて、又頸骨をへし折る危険を冒して、自分が鍛へた八本乃至十二本の釘を二つのヅウブル岩の隘路口の根本へ打ち込む、彼の仕事を見た者は、何の爲めに此釘を用ゐるのかと判らず、どうしてそんな面倒をするのだらうと怪んだであらう。

若し彼が、破船にブラ下つた残つて前部の浪除けのところを測り、次に此部分の上縁に、丈夫なケーブルを着けて、それを支持してゐた留緒を、斧でもつて斷ちきり、それを退潮に乗じてその下部を押し、一方自分では上部を引いて、隘路から曳き出し、最後に大骨折りで、小ヅウブルの根に釘を打

ち込まれた、盜路自身の入口よりも、大きな板や、材木の大きな端を、ケーブルで結へてゐるのを見たら、人は更に一層譯が判らず、ギリアットが、若し其仕事の目的の爲めに、此塊りを二つの岩の間から取り除かうとするのであるなら、何故彼は海にその墜ちるに任せて、潮に引き去らせなかつたのだらうかと怪んだであらう。

ギリアットには恐らくその理由があつたのだらう。

岩の根に釘を打ち込んで、彼は花剛石にある一切の罅隙を利用して、必要なところはそれを擴げ、先づ木の杭を打ち込み、それに釘を打つた。彼は、南の側の、狭い通路の他端に立つ、二つの岩に同様な準備を、ざつとやり始めた。彼は此處にも釘たまりの下拵へをする積りで、ももあるやうに、一切の罅隙に、木の填物をした。併し之は單に用心であつたやうだ、何ぜかなれば、彼はもうその用がなかつたから。彼の貧乏は自然に彼を慎重ならしめた。彼は節約を餘儀なくされた、そして只人用なときだけその材料を用ゐねばならなかつた。是が數多い彼の難儀の最品であつた。

一つの仕事を終ると直ぐに、も一つの仕事が必要になつた。ギリアットは躊躇せずに仕事から仕事に移り、斷乎として、その巨人の進歩をとけた。

第五章 Sub re

斯る事を皆やり遂げた當日の人間の姿は恐ろしいものとなつた。

ギリアットはその多端な仕事に、直に彼の精力を消耗して、之れを恢復するのが容易であつた。

一方に難澁、他方には疲勞した彼を大に衰へさせた。彼の髪鬚は生え延びた。彼は孔のあいてない襦袢は只一枚もつたきりだつた。彼は跣足で歩いた。風が靴の片方を、海がも一方を持ち去つた。粗く、危険な石碇の破片は彼の腕や手に小さな疵をつけた。勞働の證だ。此疵、寧ろ引かすりは大したことではなかつたけれど、鋭い風や、鹹い海が、たえずそれを刺戟した。

彼は大抵飢ゑ、渴き、寒がつた。

彼が清水の貯へは盡きてゐた。彼のライ麥の粉は悪くなつたり、又は喰ひつくされてゐた。彼は僅かなビスケットの他、何にも残つたものを持たなかつた。

此ビスケットを彼は、沾すべき水もなく、前齒でポリ、く、と噛んだ。

少し宛、日に日に彼の力が減つた。

恐ろしい岩が彼の生命を消耗してゐた。

どうして食を得ようといふことが問題であつた。どうして水を得ようといふことが問題であつた。どうして休息しようといふことが問題であつた。

彼は僥倖にも海老か、蟹かを見付け出したときだけは喫でた。彼は偶々海島の崖角に下るを見てそこに攀ち登り、そして大抵、其處に小さな清水た湛えた窪みを見付けたときだけ、飲んだ。彼は鳥の後で、或る時には鳥と一緒にそれを飲んだ。海鷗は彼に馴れて、彼が近寄つても最早飛び去らなかつたのだから。彼は食物にひどく困つてゐながらも、鳥共に邪魔をしなかつた。彼は鳥について迷信をもつてゐた。鳥の方では又、その髪が紊れ、茫々として、鬚の長くなつた彼を少しも恐れなかつた。

彼の容貌の變化が鳥共に信用を與へた。彼は人間らしさを失つて、野獸に似てゐたのだ。鳥とギリアットとは事實大の仲好しになつてゐた。食乏の御仲間で、彼等は互に扶け合つた。彼が粉をもつてゐた間は、彼はその拵へた菓子を摘み缺いで鳥にやつてゐた。彼が一層困つてゐるときには、今度は鳥共の方で小さな水溜りを彼に教へた。

彼は貝を生で喰つた。貝は或る程度まで、彼の渴きを醫やす助けとなつた。蟹を彼は料理した。鍋を持たなかつたので、彼は石を火にくべて灼熱して、その間に入れて、蒸し焼きにした。ファロエ島土蟹の仕方を真似たのだ。

兎角するうち彼岸に入つた。雨が降つた、ひどい雨が。驟雨でも、土砂降りでもない、只細かく、鋭く、氷つて、その尖は彼の衣服を貫いて、又彼の皮膚を貫いて、彼の骨を刺した。それは飲料水を少し呉れた雨であつたが、又彼をづぶ濡れとなした。

扶けは惜み、辛苦は惜けもなくふりまく——之がその雨の特色であつた。一週間、ギリアットは夜も晝も此雨に惱まれた。

夜は、その岩窟のうちに、只その目的の仕事の過勞より外には、何物も彼を安眠せしめるものがかつた。大きな海の蚊が彼を刺して、目が醒めたときには全身腫れ上つてゐた。

彼は熱を病んで、その御蔭で持堪へていつた。熱は人を殺すものだが、彼を扶けた。本能によつて彼は、岩の乾いた裂目に生える、見窄らしい蝸牛草や、苔を甜ぶつた。併し彼の病氣については、彼は僅かに注意したに過ぎなかつた。

彼は自分の難澁を考へる爲に、その仕事の暇を裂く餘裕を持たなかつた。デューランド號の機關を救ふ仕事は、都合よく運んでゐた。彼には是で澤山であつた。

時折、仕事の必要から、彼は水に飛び込み、或るところに泳いで、上ることがあつた。彼は自分の住居の一つの部屋から他の部屋へ通るやうに、無雜作に水に飛び入り、又水を出た。

彼の衣服は決つて乾いたことがなかつた。それは雨水にづぶ濡れに蒸發することがなく、海水に涵されて乾くことがなかつた。彼はしよつちう濡れたまゝで暮した。

濡れた衣服を着て暮す習慣あるものだ。老人、母、娘は裸で、小兒は冬野天で雪や雨にうたれて、或る時は家の隅、或る時は倫敦の市街に抱き合ひながら暮す、愛蘭土の貧民連は、斯る状態の下に生き、又死ぬのである。

水に漬つてゐても、渴きは矢張りある。ギリアットは此奇妙な苛責に馴れた。時には自分の寛るやかな上着の袖を甜つて悦んでゐた。

彼が作つた火は僅に彼を暖めた。野天の火はさう氣持よくさせるものではない。それは一方には燃えて、他方には凍えかす。

ギリアットは時には、鍛冶場で汗をかきながら、身震ひした。

彼の身邊到る處に、恐ろしい沈黙の裡に、反抗が起つた。彼は自身を一箇の眼に見えぬ連合の敵と對峙してゐるものと見た。自然には淋しい non possumus(無所有)がある。その緩慢は、悲しい知らせである。宏大な迫害が彼を取りまいた。彼は熱と身震ひに苦んだ。火は袖の内に喰ひ入り、水は彼を

凍らし、焦きつるく渴きは彼を苛み、風は彼の衣を裂き、飢ゑは彼が器官の根を掘つた。是等のものは斷えず袖を壓迫して、精根を疲らした。大きな障害は、運命のやうな盲目的な無責任と蠻力を協せ、物をも言はずに八方から、彼を取り圍むやうに見えた。彼はそんなものが自分の上に、客敵なく壓迫して來るのを感じた。それを免れる方法はなかつた。彼の惱みは或る生きた者の迫害を想はした。彼は、始終或ものが彼に敵對して働き、いつも敵の姿が眼前にあつて、絶えず彼を係蹄に陥し、彼を屈服せしめたとしてゐるやうな感じを抱いてゐた。彼は争ひを避けることは出來たのに、踏み止まつてゐるから、此排除し難き敵と闘ふ外、仕方がなかつた。彼は自分に對して、是は何ものだと思つてみた。それは彼をとらへ、彼をしつかりと押へ、彼を壓仆し、彼の呼吸を奪つた。眼に見えぬ迫害者は、徐々と彼を殺してゐた。毎日壓迫は増大していつた、恰も神祕の螺旋が、も一卷き捲かれたものやうに。

此恐ろしい場所に於ける彼の状態は、闘士の片一方の心を、何か相手の方に詭計がありはしまいかと、怪しませる決闘に似てゐた。

今はそれが彼を取り圍む、晦い勢力の連合と思はれた。彼は自分を取り除かうとする決心が何處かそこいらにあるのを感じた。氷河が浮氷を驅ふのは斯くしてするのである。

此陰謀團は殆ど彼に手を觸れるやうではなくして、しかもいつのまにか彼をボロ／＼にした。彼に血を出させ、辛苦せしめ、闘ひのない前既に彼を撃破したやうであつた。彼は働いた、少からず——息をもつかず、休みもせず。併し仕事が進むにつれ、仕事師自らが地盤を失つた。彼の敢爲な精神

を畏れて、自然は、徐々に彼が體力の根を枯らす計畫を立てたと想像してもよかつたらう。ギリアツトは自分の位地を守り、その餘は將來に任じた。海は先づ彼を衰へさせた。次に來るものは何か？

二面のヅウブル岩——花剛石で出來て、洋中に待ち伏せしてゐる——が彼をかくまつた。岩は彼の入るを許し、彼の意志を行ふことを許した。けれどもその勸待は、龍の頸に似てゐた。

無限の表面をもつて、測り知られぬ又人間の意志を拒む場所を彼のまはりに又頭上にもつ沙漠——！——潮の干満——暗い斗牛——その各尖角は渦流の中に一箇の星であつて、光流の中心を爲す岩そのもの——生きてゐる者の無鐵砲を、冷然と擁塞する、奇妙な、名狀し難い陰謀——冬の風——雲——彼を包み、そろ／＼と彼を取りまき、彼を閉ぢ込めて、生きた人のはまりに自然に出來てくる土牢で、彼を仲間から、引き離す、浪の攻圍——一切のものが彼に反對し、何物も彼の味方につかなかつた。彼自身は、隔離せられ、見放され、弱く、元氣沮喪し、忘られたものと感じた。彼の庫は空になつた。彼の道具は損じ、或は不完全であつた。彼は晝は飢渴、夜は寒氣を以て苛まれた。彼の苦みは彼を傷け、ボロ／＼にして、手には泡が出來、足からは血が滲み出し、四肢はつかれ頬は蒼醒め、眼は異様の光りを放つやうになつた。けれども是は只決心の牢乎たる焔であつた。

人類の眼は性格の力を現はすことが出來るやうに造られてゐる。ちらと瞥る目は、我々が有する人間性の多寡を示す。我々は眉の下にかゞやく智慧によつて、自己を主張する。小さな良心は瞬きし、大きな良心は光りを放射する。若し眼に光りがなければ、その頭に思想がなく、胸に愛がない。愛

する。眼は意慾し、意慾する眼はかゞやき又てらす。決断は眼に火を燃やす。それはおどろいた心を燃やしておこす賞讃すべき火である。

不撓なものは崇高なものである。單なる武勇は發作に過ぎない、單なる剛氣は氣質に過ぎない、單なる勇氣は徳たるに過ぎない。偉大な胸奥に潜む秘密は殆ど此一語に盡く、曰く *perseverando*……忍耐の勇氣に對する關係は車輪の心棒に對すると同じことだ。それは不斷に支撐點を新たにするにある。終局が地上的であらうとも、又また天國的であらうとも、終局までいつてみることに、そこに一切のものがあるのだから――。

その第一の例はコロムブスで、第二例はイエスである。十字架に到る道を踏むのは狂氣であるが、そこからは光榮が来る。自己の良心を晦まし、或はその意志を無力ならしめることを許さぬ者は、必然に苦み又勝つ。道德的行爲の順序に於て、讀くは企てることを妨げぬ躓きは起き上るものと。凡庸な人間は、尤らしい障害にあへば思ひとまるが、強い人間は思ひ止まらぬ。彼等は敗北と破滅とを豫想するが、勝利を確信しない。諸君は、何故エチアヌスが自分に向つて磔を打つ人を制しないかといふ無数の立派な理由を彼に附與し得られる、併し征服された者の偉大な勝利、我々が殉教と稱ふ彼の勝利を生み出す物は、相等な障害を輕蔑することから起るのである。

ギリアットの努力は總て、不可能に傾いてゐた。彼の成功は微々で且つ遅々たるものであつた。彼は甚だ輕少な結果を得る爲め、多大の努力を費さねばならなかつた。是こそ彼の闘ひに對して、その高尚、且つ悲壯な特色を附與したものであつた。

單に破船の上を越して四つの梁材を据え付け、救助すべき部分を分ち、之を隔離し、その破船に對して、破船のうちに、ケーブルの附いた四つの捲揚機械を備へつけるだけのことに、そんなに多くの準備、そんなに多くの努力、そんなに多くの經驗と、辛らい幾夜、危い幾日を費し、彼が孤獨の不運な唯一の結果が斯くあらうとは。原因の中に運命、結果の中に必要

ギリアットはその辛慘を甘んじて受けたばかりでない。彼はそれを態と擇んだのであつた。競争者は敵となるかも知れぬので、彼は競争者を懼れて、助手を求めなかつた。途方もない大計畫、冒險、危険、自づから増すその勞苦、仕事をしてゐる救船者自身の破滅、飢餓、熱、裸體、災厄、彼等のものを一身に引き受けたのだつた！彼の利己主義は此通りであつた。彼は、丁度徐々空氣の盡きてゆく、或る恐ろしい部屋の中に置かれた人のやうであつた。彼の精力は少し宛彼を離れ去つた。彼は僅かにそれを感じてゐた。

體力の枯渴は必ずしも意志を消耗しない。信仰は單に二次的の力であつて、意志が第一である。信仰が動かすと云ふ諺の山は、意志の爲し能ふことに他ならぬのである。精力に於て、ギリアットがやつた總てを彼は執拗に於て取り戻した。彼の荒い四周の海、岩、天の壓迫の影響を受けて、生理的の人間を破滅したことは、只その道德的人間を強盛ならしめるに過ぎなかつたやうに見えた。

ギリアットは一つも疲勞を感じなかつた。否寧ろ如何なる疲勞にも屈しなかつた。肉體の衰へを心で否認することはそれだけでもつて莫大な力である。

彼は自分の仕事が進む一歩々々の外には、何物をも見なかつた。彼は自らのみぢめさを悟つてゐるな

かつた。

彼の目的——今は殆ど成功に近しと見る——は彼を不斷の幻影で包んだ。

彼は『進め』といふ一語に含まれるより外の如何なる思想も、たずして、此苦みを耐え忍んだ。彼の仕事は彼の頭の中で飛んだ。意志の力は人を酔はせる。その酔は勇壯と稱ばれる。

彼は約百の一種となつた、海をその苦艱の舞臺とした。併し彼は困難と角ふ一人の約百、艱難に對して闘ふ約百、勝つ約百であつた。若しこんな名が哀れな水夫、蟹や海老の漁者に對して用ゐるのは餘りに偉大でないならば、彼はプロメシウスの約百であつた。

第六章 Sub umbra

時にギリアットは夜起きて、暗中を覗いた。

彼は變な感情を動かした。

彼の眼は黒い夜を見てゐた。あたりは物凄く、不安に満ちてゐた。

暗黒には壓迫の感がある。

影の妙な屋根、どんな潜水者も潜りきれない深い暗黒——その奇妙な、ひそやかに、かけつたやうな暗と打ち雜つた光り——種子が灰の埃りの如く、光線の飛散する原子——幾千萬の火のともれぬ洋燈——その祕密は誰も知らぬ火の宏大な閃き——その途上に、擁せらるゝ火花の如く煌々尖點の充満——死の確實さをもつ、旋風の混亂——神祕な、深い淵——同時にその顔を見せつ、隠しつする一箇

の謎——暗の假面をかけた無限——是等が夜と同じ意味の詞である。その重さは強く人の魂の上のにかゝる。

あらゆる神祕の此結合——宇宙の神祕と運命の神祕との——が人間の理性を壓迫する。

暗の壓迫は正反對の意味で、いろ／＼異つた靈に働を及ぼす。夜に對し、人間は自分の不完全を感じる。彼は暗を見て自分の弱いことを悟る。黒い天——それが盲目な人である。夜に面を對つて、人は跪き、平伏し、地に踞み、洞穴の方へ匍ひ、又は翼を求め。殆ど常に、彼は「無限の不可知」が眼前にあることを臆けに感じて、それから尻込みする。彼は時には自分にそれは何であるかと訊いてみる。彼は顛へ、又頷づく。時には彼はその方へ行きたがる。

何處へ行くのか？

彼は單に答へ得るのだ『あそこへ』と。

がそれは何だ、何が其處にあるのか？

此好奇心は明かに人の精神に對して禁じてある。その灣を橋架ける道は、彼の周圍に、皆斷ちきられ、又は失くなつてゐるからだ。此「無限」をわたす弓門は存在しない。けれども淵の端に於けると同じく、禁斷の智恵には招きがある。足に踏まれぬところを、眼は届く。眼がもうとほさぬところに、靈は翅をのす。どれ程弱く、或は手段をもたんでも、やつてみない人はない。その性質に應じて、彼はその神祕の前に質問し、或は尻込みする、或る者にはそれは壓迫する結果を來し、他のものには、その魂を偉大ならしめる。光景は晦冥、不確實である。

夜は晴れてゐるか？然らば影の深淵だ。夜は嵐が吹くか？然らばそれ蒸氣の淵だ。無限不意に自らを拒み、又捧ぐ試験を許さぬけれど、推測は自由にまかせる。それが無数の光點は、底知れぬ晦らさを愈々黒くする。寶石、閃光、星、不可知の宇宙に顯現した實在、人間に對する恐ろしい挑みである。是が絶對に於ける創造の境界標だ、是ぞ距離てふものゝないところの里程標、是ぞ不可能な一方には、又眞實な深度を測る低水標である。顯微鏡的のきらめく尖點、それがモ一つ、それからモ一つ、是は悟り難いけれど、なほ宏大である。此光りは竈である、その竈は一箇の星である、その星は太陽である、その太陽は宇宙である、その宇宙は空である。總ての數は「無限」の前に於ては零である。空である是等の世界も存在する。此事實によつて、我々は空と、非實在とを分つ差異を感じる。接近し難きに加ふるに、透徹し難く、透徹し難きに加ふるに、解説し難きもの、是天である。それ故にそれを冥想すれば、崇高な現象が起る——呆然として魂が雄大となる。畏敬は人類の屬性である。獸類は此畏れを知らぬ智は此森嚴な畏怖のうちに、自らの存否を見付け

る。陰は單である、恐れはそれからくる。同時にそれは複合である、其處から驚きがくる。その統一は我々を捲き込み我々から反抗の意志を奪ひ去る。その複合は我々にその身邊を見や、不慮を恐れ、警戒し、豫め備ふるところあらしめる。「一」の前に立つや、我々は服従する。「多」にむかつては我々は挑戦する。此故に暗黒は自らを多に融かし込む——物質に於ては見得べく、思想に於ては感じ得べき神祕な複合を。又それが警戒を一層必要ならしめる無言の事實でもある。

本文の記者は嘗て何處やらで、夜は、我々もそのうちに加はる此特殊な創造の固有にして、且つ普通の状態である、然るに空間の如く、持續の短かき晝は、單に星の近親たるに過ぎずと、言つた。

宇宙は磨擦なくしては、その夜の奇蹟は働かぬ。斯る機械の磨擦は、生命の燃焼である。其處に我々が「悪」と名付くるものがある。我々はその晦暝に於て、悪そのものを感じる——それは事物の神聖な秩序の遺傳的矛盾である。理想に向ひ、おほびらな反逆を爲す、「事實」の盲從的な冒瀆である。「悪」は或るヒドラの頭をもつた畸形で、宏大なる宇宙の各部に亘つて、その抗議を到るところに提出する。颶風に於てそれを發し、船の進路を惱まし、渾沌に於てその抗議を呈しては、一世界の誕生を妨害する。善に一致がある。併し悪は遍在で、生の理論を脱線せしめる。それは鳥に蠅を喰らへと、慧星に遊星を喰へと命ずる。悪の存在は創造の上に附せられた十字架痕である。

夜の晦さは頭をフラノ、させる。それに入り込まうとするものは、それに壓仆せられ、それと闘はねばならん。影に對する斯る争闘以上に疲らすものはない。それは消え去つたことの意味を解かうとするに等しい。

心の安息する定まつた場所はない。發足點は決して終局に導くものではない。

見込みのない程入り雜つた矛盾の解決、心が永久に迷はねばならん疑ひの迷路、眼に見えぬ手で、決然と打たれて、永久に皮剥ぎせられた現象の、果てもなき細別、測り知られぬ複雑に於ける法則の外觀的混亂——その爲めに礦物が植物と見え、植物が動物と見え、思想が重力となり、愛が光りを放ち、重力は愛する衝動となる。是が暗黒の現象である。又暗黒から生れた終りなき疑問をもつた不吉

な茫漠たる顔、その隙りと見える輪廓は「不可知」の輪廓を示唆する顔、自然の同時に起る力の此巨大な幻影——空間の茫漠たると、朦朧たるとにより、獨り眼にのみならず、又智慧にも見えない幻影——此見えぬ物の幻影は、人の精神を曇み込む「陰」の本體である。

彼はその詳細を知らないだらう、併し全體の莫大な重さが、強く彼の上に乗しかゝつて来る。彼はその魂がそれを憂ひると同じ程度に是にたえた。カルデアの牧者を、天文學者となしたのは、斯る重さの感じであつた。本意なき示現は、創造の孔から見えてくる。斯くして科學はかの女の眞生命を排出するといふべきである。彼女は無識な者を自家のものとし、此神祕な妊孕を受け各退隱は、屢々無意識に、物理學者となる。

晦暝は不可分であつて、「絶對」によつて住まれる。その深みのうちに、排拒のない排拒——我々を驚異を以て滿す行動がある。暗黒のうちに、創造の神聖な神祕は、總てその變化の形相に於て、自らを完成する。豫め考慮された存在、力、指定せられた運命は——それは皆果のない、豐饒な事業に自らを貸與する。畏怖すべきものが暗黒に住む。天體の宏大な進化、星宿、遊星群、獸帯の花塵、電流微分子流、分拯、引力の *Quid dicitur* 後には敵となる抱擁——一般的の對照たる偉大なる干満、中央に於ける不可量と自由、球の中には生命、又それを巻き込む光りと智、さ迷ふ原子、播かれた種子、阻止された繁榮、妊孕、敵對、奇異な豐饒、想像も及ばぬ遠き目まぐるほしく瓊環する液體、暗の裡に互にまじりつ、追ひつする奇妙な現象——總てこんなものが驚くべき機械の各部を形造る、是等が見えぬ車でめぐり、飛ぶ天體の囁きである、是等は暗黒の爲す仕業である。

それは學者に推測の糧を與へるが、無識者は只うなづいて、願へるのみである。神祕は其處にあつて、自己を示現する。併しそれは打ち克ち難く、理解し難く、又近寄り難い。我々はそれが我々を壓迫することを知つてゐる、何ぜかなれば我々は自分の頭上に黒く、判然しない證據のかゝつてゐることを感ずる、又我々はそのひどい重さの下に粉碎される。

到處我々は測り知られぬものに取り圍まれてゐる。總てのどの部分も我々には判らない。

そして此總てに加ふるに、此「内在」は「實在」を有するかといふ、恐るべき疑問が来る。彫が我々を曇み込む、我々は見、且つ聽く。

一方暗くなつた世界は動き又廻轉する、花は夜の動きを知り、蠅取草は夜の十一時に咲き、日の百合花は朝五時に、驚くべき正確を以て咲くのである。

他の深みでは、水の滴りに生きたものが住つてゐる。滴蟲は莫大に増加する。玄微の生物は彼等自らの壯觀をあらはす。玄微の反對側はあらはされ、一時間の後には、只一つのデアトム（單細胞を有する玄微の海藻）が三千萬のデアトムを生む。

誰か、斯く一齊に巨大の謎を呈する問題を解決するだらうか？

我々は信仰に訴へねばならん、が信仰だけでは、靜平を齎さない。信仰は形を求め或る解し難い要求をもつてゐる、そして此要求から種々な宗教組織が生える、何ぜかなれば何物も、不確定な信仰以上に好ましくないものはないからである。

人間の思想思想や企圖が何であるにもせよ、彼の位置がどれほど大きいにもせよ、彼が暗黒を測る

時、彼は曾に測らざるのみならず、彼は默想するのである。斯る現象から何が造り得られるか？此神祕な件々を怪物的とは見えぬことを如何なる説明を以て處置することが出来るか？

深遠にして、無數、澁晦、一齊にして、小兒の片言のやうに定かならぬ、何たる示現が續くことでも！示現は決してなされなかつた。影は無言である、併し沈黙は聴き得られる。

只一つの解決が此祕から免れる——神の觀念。その觀念は除き難い。それは人間性の主要部である。推測式、討論、否定、組織、宗教——總てこんなものがそれに影響する、併し彼等はその觀念の力を減ずることは出来ない。暗は肯定の詞を以て語る、併し内在する存在それは何か？我々は疑問にうたれる。總て是等の力が、或る説明し難き方法で、一致して働くことは、此晦き世界が均衡を得てゐることと證明せられる。空間に懸つた宇宙は墜ちずして、原子の小歎きもなき排出は何の差障りもなく行はれてゐる。人自らも此運動の一部となり、その波動に、我々は運命といふ名を附ける。何處に運命が始まつて、自然が終るか？事件と時季と、悲みと驟雨と、徳と星との間に何の差異があり、時間と浪との間に如何なる區別があるか？

宏大な運動機關は、靜平に廻轉を續けて、答へない。星のきらめく天空は車輪、秤器との幻影である。「至高の瞑想」と「至高の默想」の統合がそれ總てを通じて語る。實在と抽象とは共に彼等の全體に於て見得られる。我々は此晦暝の外を見ることが出来ない、我々はその勢力のうちに、暗のまる／＼逃けることも出来ないである。我々は機械組織の中にあつて、全體のうちの完全なる一部を形り、我々

々にはわけの分らぬ統一をつくつてゐることを悟る。我々は、我々の内なる神祕は、我々の外なる神祕と兄弟の論を結ぶと思ふ。その二重の神祕は、死の崇高なる先驅者である。何たる苦悶、又同時に何たる喜悅であらうぞ！無限と合一し、此合一を通じて導かれ、我々自身に必要な不死と——誰か知らうぞ？——可能の永遠とを賦與せられ、宇宙生命の宏大なる洪水から、此「我」の征服しられぬ執念を取り出したことを感じ、星を眺めて、その一つ／＼に向つて「私も又お前のやうに一箇の靈だぞ」と云ひ、暗黒を覗いては「私も又深淵であるぞ」といふ——是等が夜から生れた思想である。

總て是等の朦りした想像が孤獨によつて増加し、濃厚にせられ、ギリアットのの上にのしかつた。彼はそれを理解すること僅かであつたけれど、彼はそれを感じた。彼の心は曇つた、強力な智能であつた。粗野にして、教へられない偉大な精神であつた。

第七章 ギリアットが單檣船を手近に置く

此破船の機關を、ギリアットが想つたやうに救ふのは、前にも述べたとほり、牢を脱け出すに似てゐた。斯る脱出は何れも忍耐と勤勉とを要した。勤勉は殆ど奇蹟にまでも達し、忍耐は只長い苦悶に比せらるべきである。トーニスと稱ぶ或る囚人がモン・サン・ミシエルで、その蔭で、巧みに壁の大部分を隠す手段を發見した。も一人の奴はテュルで、千八百二十年、囚人の運動場のテレーヌから幾何かの鉛を切り取つた。どんなナイフを以て？誰も推測し得なかつた。又此鉛を何の火で溶かしたのか？誰もそれを發見することは出来なかつた。併し彼はそれをパンの堅皮で造つた鑄型で鑄たことは

知れてゐる。此鉛と、此鑄型とを以て鍵を造り、之を以て、彼は嘗て、只その鍵穴より外には見たことのないなかつた錠を開いてしまつた。此奇怪な天才の幾分をギリアットはもつてゐた。彼は嘗てボワロ一ゼの断岩を攀ぢ上り、又降りたことがあつた。彼は破船の男爵トレンクであり、その機關のラチュードであつた。

海は、看守のやうに、彼を監視した。

その外、雨が無慈悲に、邪魔をしたけれど、彼はそれから或る利益を得るやうに計らつた。彼は幾分か彼の清水の貯蓄を再び満たした。併し彼の渦きは消し難かつた、そして彼は曇が満つるや否や飲み干してしまつた。

或る日、それは四月の末日、或は五月の一日だつたと思ふ、遂に一切のものが彼の目的どほりになつた。

機關室は丁度八本のケーブルの間に閉ざれてゐた。ケーブルはうち四本宛兩側に、捲揚機械から垂れてゐた。彼は十六の穴を甲板の上と、龍骨の下にあけて、それにケーブルを通した。板は鋸でひき、材木は斧で切り、鐵物は鑿で断ち、覆ひは鑿でこぢあけた。機關の直下に當る龍骨は、四角に切りあけられ、なほそれを支える間、それと共に取り卸せるやうにしられた。總て此恐ろしく、捲れてゐる塊りが、只一筋の鎖で吊るされ、その鎖は只一つの鎖の跡で位置を保つてゐた。此状態斯る勞動と、それ程完成に近いとき、急ぐのは謹慎である。

潮は引いて、時機はよし。

ギリアットは水掻車の軸を首尾よく取り外づした。その端には障害を爲して、卸すのを邪魔するだらうと思はれてゐた。彼は此重たい部分を縦にして、機關室の内部に、しつかりと据えた。

それは此仕事を終るべき時であつた。その意志が強かつたので、その職人は疲れてゐなかつた。けれども彼の道具は磨滅してゐた。鍛冶場は段々と使へなくなつた。鞘の働きは悪くなり始めた。海水の小さな溜は、鹽の滓が溜つて、機械のつぎ目にこびり付き、その自由な働きを妨げた。

ギリアットは「人岩」を訪ふて、單槽船を極め、一切の状態が差支えないこと、特に四箇の環を左右兩舷に取り付けたことに安心した。それから彼は錨を揚げ、その重い舟を機で動かして、兩ツウブに横付けした。岩の間の隘路は舟を容れるに充分であつた。又水深もたつぷりであつた。彼が着いた日、此處に舟が入られることを知つて、彼は満足したのであつた。

併しその仕事は困難であつた。それは時計師の精細を要した。操縦は、彼の目的の爲め彼は艫から、舵を先に向けてやらねばならなかつたが爲めに、層一層面倒であつた。單槽船の櫓と綱貝とは、海の方角に於て、破船を離れて、立つてゐなければならなかつた。

此障害は、悉くギリアットの操縦を拙づくした。それは「人岩」の小灣に入るやうではなかつた。そこで單に舵のとり方一つであつたが、此處では押し、引つ張り、漕ぎ、水の深さを測ることを皆しなればならなかつた。ギリアットは此操作に僅か十五分を費した。けれども彼は成功した。

十五分か二十分の後、單槽船はデューランド號の下につけられた。それは殆ど其處に楔止めにせられた。二箇の錨により、彼は船を艫と艫とで繋いだ。二つのうちの丈夫な方の錨は、南西から来るだ

らうと惧れられた最強風に對して有効であるように卸ろされた。次に挺子と揚錨機の助をかりて、彼は單檣船の中に、水掻車の各片を入れた二つの箱を卸した。二つの箱はバラストの用を爲した。是等の邪魔を除かれて、彼は揚錨機の鎖の鈎を、調節用齒車スプリングにかけて、漂車を留め置かうとした。

此仕事の特種な目的により、古い單檣船の缺陷は有用な資質となつた。それは甲板をもたなかつた。だからその積荷はずつと餘計に深く積まれ、船内に安置することが出来る。その檣は非常に前に立つてゐた——普通の目的には餘りに前に偏り過ぎたぐらゐるに、だからその積荷は一層多くの場を占められた、そして檣が斯の如く破船の檣を離れて立ち、その荷揚げの邪魔になることがなかつた。それは畢竟に致であつた。けれども海上の致よりも安固なるものはない。

こんなことをやつてゐるうちに、ギリアットは突然海が荒れてくるのを悟つた。彼は何方から風が吹いてくるかと見廻した。

第八章 突然の危険

風は風は僅かにさとりられる程であつた。けれどもその風は西であつた。彼岸の間の風の悪い癖。荒れ立、海がゾウブル岩は及ぼす結果は風の方向によつて、様々に異なる。

驅り立てる風次第で、浪は岩の廊下に、或は東又は西から這入つてくる。東から入れ心海は比較的穩かである。西から入れれば、それは常に荒らしい。此理由は、東の風は陸から吹いて来て、力を蒐め

る時間を持たない、然るに西の風は太平洋から来て、廣大な大洋から、妨げを受けずして吹いてくるからであつた。若し西からなら、ほんのちよつとした風でさへも、重大である。それは果でもない場所に巨濤を捲き起し、隘路に入りきる以上に大きな嵩を爲して、衝突つてくる。

灣に巻いて入る海は常に恐ろしい。それは人民の群に同じである。群集は一種の液體である。若し這入れる量が、無理に這入らうと努める量よりも少ないときには、群集の中には生命がけの衝突が起り、水には猛烈な混亂が出来る。僅かでも西風が吹いてゐる間は、ゾウブル岩は、一日二回宛その荒い襲撃を受けた。海は起り、潮は迫り立ち、岩は抵抗し、狭い咽喉は小さな入口をあけ、それにむかつて猛烈に衝突する浪は、跳ねかへされ、吼え、隘路の兩側を、素晴らしい白浪が嘯むのである。斯くしてゾウブル岩は、西からの至極僅かな風の間、外は比較的靜穩であり乍ら、岩の内には嵐が狂ふ海の奇觀を呈する。水の此騒動は總て限定せられ、範圍を定められ、何等暴風の性質をもたない。それは浪のうちの只局部的な爆發であるが、恐ろしいものである。南と北の風なら、岩を斜に打つて只少しの白濤を隘路に起すのみである。東の入口は——之は心にとむべきことだ——「人岩」に接近してゐる。西に向つた危険な入口は向ふ端では、確實に二つのゾウブル岩の間にあつた。

ギリアットが破船ヂューランド號と共にあつて、又その單檣船をその下に繋つたのは、此西の入口であつた。

災難は心然と思はれた。風はひどくなかつたけれど、害を來すに充分であつた。揚け潮のうねりは多くの時間を經ずして、全力を振つてゾウブルの隘路に闖入してくるだらう。第

一の浪は既に押し寄せて碎けた。此うねりと、全大西洋の渦巻きはその後ろに巨大な海を控えてゐる。スクオールも、荒れも無いであらうが、單に目醒しい浪が亞米利加の岸に起り、四千哩を越える衝動を集めて、歐洲岸に巻いてくるのである。此浪、即ち巨大な岩の柵は、岩々のすき間に會つて、入口の物見樓の如く、或は隘路の柱の如く立つ二個のヅウアル岩の間に捕はれねばならん。斯く潮によつて膨らまされ、抵抗によつて力を増し、淺瀬によつて追ひ付けられ、風によつて驅り立てられ、それは猛烈に、その會ふ障害物の爲めあらゆる歪みを以て、岩を打つだらう。局限せられた海の狂氣は、岩壁の間に突入して、單槽船や、デューランド號に達して、それを破壊するであらう。

此あり得べき危険に備ふる柵は缺けてゐた。ギリアットは只一つをもつてゐた。

問題は海が、一跳してそれに達することを防ぐにあつた、その打撃を阻止し、その高まることを許すにあつた。その入ることを拒まずして、通路を塞ぐことであつた。全然危険である隘路に對する水の壓迫を妨げることであつた。爆裂を單に洪水とし、恰も浪からその暴力を、抽き取り、怒りを和けるにあつた。それは事實荒い障害を穩かな障害と代えるにあつた。

ギリアットは單なる力以上に有效な熟練を以て、遙にロープを咬へ、手に槌をもち羚羊が、樹林の猿の如く、岩の上に跳び乗り、ほんの僅かに出た岩角に、危い足を踏みしめ、水に飛び込み、水を出で、瀬の間を泳ぎ、岩に攀ぢた。斯くして彼は、デューランド號の前端を吊り下げた、又小ヅウアルの根元にしつかりと括り付けたケーブルを断ちきつた。その浪防けを、岩に打ち込んだ巨大な釘で保つ、一種の蝶番ひをホーサーのきつた端でつくつた。板の此道具を、大船渠の水門のやうに、その上

に吊り、それから舵を曲げるやうに、大ヅウアルの端に突き當てる浪に向ひ外方にその側面を向けた。又一方にヅウアルの蝶番ひは、小ヅウアルの上にある他突を留めてゐた。次に彼は前以て用意してあつた巨大な釘により、小ヅウアルと同様、大ヅウアルの上には同様留めを施した。斯く隘路の二本の岩柱に當てがひ、大きな木造物を完全に縛り付け、鐵目の上から帶をしめたやうに、一本の鎖を此柵の上にかけた。そして一時間足らずのうちに、海に對する此防壁は出來上つて、岩の咽喉は開戸がたつたやうに閉された。

平らにすれば筏とならうし、縦にすれば壁ともならう此重い材木や、板の寄せ蒐めから出來た強力な器械は、水の助けを借り、ギリアットによつて、手品師のやうな鮮かさで取扱はれた。防壁は荒れ立つ海がそれを氣付く以前に出來上つたと言つてもいゝ程だつた。

それはジャン・バルが、危く破船を免れたとき『我々は英國人をあざむいた』といつた名高い詞を用ゆべき場合の一つであつた。高名な丁督は、洋を罵るときには、それを「英國人」と稱ふことはよく知られてあつたのだ。

隘路の入口が斯く保護されてから、ギリアットは單槽船のことを思つた。彼は船が高潮につれて上れるやうに、二つの錨鋼を充分に弛めた。之は昔の水夫等が *monide avec des enbosures* と稱んだ同じ操作であつた。總てこんなことでギリアットは少しも慌てなかつた。必要はちやんと前以て判つてゐたのだ。

兎角するうち潮は速に上つて來た。浪の震動が、比較的穩かな天氣にでも、重大となる時機であ

つた。きつかりとギリアットが豫想したとほりになつた。浪は烈しく逆巻き柵に衝突し、碎けて、その下を通り過ぎた。外には大きなうねり、内には水が靜に流れた。彼は海の一種の *Fureulae caudine* をつくつた。海は征服せられた。

第九章 進歩よりも寧ろ行動

永い間元遣はれてゐた時機が到来した。

問題は今機關を小船に移すことであつた。

ギリアットは、右の手で左の舷を支へ、左の手を額に當て、霎時考へてゐた。

聽て彼は、左舷と右舷に、煙筒から曳いた四本のケーブルを留めた吊り索を截つた。吊り索は單に繩であつたから、彼のナイフで充分に目的を達した。

四本の鎖は解き放され、煙筒の側に垂れた。

破船の上から彼は自分で拵へた器械の上に攀ぢ上り、足で梁材を踏み、巻揚機械を扱め、滑車を調べ、ケーブルを手にとり、補足したものを檢め、タールの塗らない麻も水が浸み込んでゐるのに安心し、何一つ缺けたものなく、何一つくづれてゐるものも無いことを見出した。それから吊り下つた支柱の高みから甲板に跳び下りて、彼は揚揚機の近くに位置をとつた。デューランド號の此部分は、彼が二つのツウブル岩の間にメリ込ましたまゝ放棄して置かうとしたのだ。是が彼が仕事をする間の屯所であつた。

眞面目ながら、彼の仕事に必要なことより他には、何の衝動も受けないのに困らされながら、彼は捲揚機械に最後の一瞥を與へ、それから鑄をとり、全體を吊つてゐた鎖を擦り切りにかゝつた。

鑄のきしむ音は、岩の咆哮の裡に聞えた。調節齒車に附屬した揚揚機の鎖は、彼の届くところ、彼の手の至極近くにあつた。

突然烈しい音がした。彼が鑄でこすつてゐた鎖は、たつた半分きつたばかりに、ブツリと断られた。機關全部は烈しく搖れた。彼は調節の齒車をとらへる暇を僅に得たゞけであつた。

切れた鎖は岩に打つ付かつた。八本のケーブルはびんと張つた。ひき切られた巨大な塊りは、破船から離れた。船體の中腹は開いた。機關室の鐵の牀は、龍骨の下から見ると得た。

若し彼がその瞬間調節器をとらなかつたならば、それは墜落してゐたであらう。併し彼の強力な手が其處にあつた、それはしつかりと降りていつた。

ジャン・バルの兄弟、ビエール・ハルは彼の力の強い、賢い大酒呑、佛蘭西の大海將と親しく話をしたあの貧乏なダンキルクの漁夫は、アムブルチューズ湾に難遭してゐた單船ランゲロン號を救助に行つたとき、その荒い灣内の暗礁の間に、その重たい浮んだ塊を助けようと努めて、彼は主帆を捲き揚げ、それを濱藪で結へ、結んだものがひとりで断たれるまゝに任して、適當な時機に帆を風に渡してしまつた。丁度その通りギリアットも鎖の断れるに任かした、そして同じ非常手段が同じ成功の冠を頂いた。

ギリアットの手にとられた捲揚機械、持ち堪えて、よく働いた。その職分は器械の力を斯如く一つ

の統合した運動にして、多から一に減じて以て器械の力を緩和するにあつた。

直立して、その手を揚錨機 上に置けば、ギリアットは器械の脈搏を感ずることが出来るのだつた。彼が發明の天才が發揮せられたのは此處に於てであつた。

力の不思議な暗合がその結果であつた。

一塊りに取り外づされたチューランド號の機關が、單槽船に卸ろされるうちに、單槽船はそれを受取りに、そろ／＼と持ち上つた。破船と救難船とは互に、違つた方面から助け合つて作業勢力の半ばを節約した。

二つのヅウブル岩の間に徐ろに上る潮は、單槽船を持ちあげて、それをチューランド號により近く持つていつた。海は克服せられた以上であつた。それは馴らされ、且つ挫折せしめられた。それは事實機關の一部であつた。

高まる水は何の震動もなく、柔かに、陶器を扱ふ人のやうに、殆ど用心を以て船をあげた。

ギリアットは二つの勢力——水と機械との勢力を結び合はせ、つり合はせた。そして揚錨機をしつかと踏まへて恰もそのまはりの一切の運動を、その時皆服従せしめた恐ろしい塑像のやうに立つて、海の徐ろに上ることを利用して、取り卸しを徐々にするやう調和をとつてゐた。

水に何の激動も、撻揚機械に何の迂りもなかつた。それは切り従へられたあらゆる自然の勢力の共同動作であつた。一方には巨大な嵩を下ける引力、他方には小舟を上げる海。潮汐を起す天體の引力と、重と稱ぶ地球の引力とが、彼の仕事を助けようと、蹀し合はしてゐるやうだつた。彼等の用足し

には何の躊躇も、何の停止もなかつた。旺盛なる精神の下に此受働的の諸勢力は、能働的の補助となつた。一分々々と仕事は抄つた。破船と單槽船との間は知らぬまに狭まつた。接近は無言のうちに、そしてそこに立つ人の一種の懼れのうちに繼續した。元素は命令を受けて、それを履行した。

潮がそれを持ち上げることを止した時分に、ケーブルが迂るのを罷めた。突然、併し混雜なしに滑車は止まつた。巨大な機關は、恰も何者かの手でそこに置いたやうに、小舟の中に置かれた。それは直立、不動、確乎としてそこに立つた。機關室の鐵牀はその四隅を以て平らに船中に安置せられた。事業は成就した。

ギリアットは沈思して、思に呉れた。

彼は成功に損はれた驕兒ではなかつた。彼は大きな喜悅の重さに身が曲つた。彼は恰も脚が立たなくなるやうに感じた。そして彼の勝利を沈思しては、是まで危険に震へなかつた彼も顫へ始めた。

彼は破船の下ある單槽船と、その中にある機關とを眺めた。彼はそれが眞實であることを信じられなかつた。彼は成就したことを、嘗て豫期してゐたと思はなかつた。奇蹟が彼の手で行はれ、彼は當惑しながらそれを考へてゐた。

彼の夢はほんの僅かな間だけ續いた。

熟睡から跳び起きた者のやうに、彼はその鋸を取り掲げ潮の波で僅か十呎ばかり離されただけで、八本のケーブルを断ち、船跳上にび、綱をとり、四つの吊索をつくり、それを前以て用意してあつた環に通し、單槽船の兩舷に煙筒の四筋の鎖を留めた。此鎖はたつた一時間前まではまだチューランド

號の甲板についてゐたものであつた。煙筒が除かれると、彼は機關の上部を取り外づした。ヂューランド號の外は板の四角な部分はそのくつゝいてゐた。彼は釘を抜き、外は板や梁材の邪魔を小舟から除いた。それは岩の上へ落ちていつた。それで船足を軽くするに大なる助けを爲した。

その他、單檣船は、豫期の如く、機械を積んでもよく動きがとれた。それは水に沈んだけれど、丁度いゝだけの船脚になつたゞけであつた。大きくはあつたが、ヂューランド號の機關は、彼が嘗てヘルムからその單檣船にのせて歸つた石や大砲よりも軽るかつた。そこで一切のことが終つて、彼は只出發するばかりであつた。

第十章 與へられた恩寵が突然取り戻される

總てが終つてゐなかつた。

斯くヂューランド號の浪除けで閉された隘路口を再び開き、岩の外に、直に單檣船と共に突き出すことは簡單無雜作なことゝ見えた。洋では刹那が大事である。風は少しよりなかつた。沖には皺一つなかつた。美しい午後で夜も晴れる見込みが立つてゐた。海は眞個靜穩であつた、けれども汐は退き始めた。時機は出發に好都合であつた。ズブルを離れるとき退潮であるならば、水は彼をゲルンゼイに運んでいくだらう。セント・サムソンに曉方に着かれるだらう。けれども意外な障害が起つた。彼が一切の失見を帳消しにした手落ちが、彼の用意のうちにあつた。

機關は解放せられたが、煙筒はさうしてなかつた。

空に架つた破船にまで單檣船をあけた潮は墜落の危険を減じて、努力を省いた。けれども間隔の減少は、ヂューランド號の開いた。船體によつて作られた一種の骨組に、煙筒の頂をつゝかえさしてしまつた。煙筒は其處に恰も四つの壁の間に於るが如く、しつかりと嵌つてゐた。

海がやつてくれた務めは、そんな不僥倖な缺點を伴つた。餘儀なく服従させられた浪は悪い術をつかつて、復讐を遂げたやうであつた。

上潮のしたことを、退き潮が元へ戻すことは眞實であつた。

高さ十八呎以上もある煙筒は、破船の中に八呎も入り込んでゐた。水準は約十二呎までに落ちるだらう。斯くして落潮と共に降る煙筒は四呎の餘地を得て、容易に潜り抜けられるだらう。

けれどもその潜りぬけが出来るまでには、どれ程の時間がかゝるか？六時間。

六時間後だと、それは夜半に近い。そんな時間に出發するどんな方法があるか？日中でさへも危険に満ちた、是等の岩礁の間に、どんな水路を発見し得られやうか？どうして彼は眞暗な夜半に、その混がらがつた迷路、瀬の待ち伏せしてゐるところに、船をやる危険を冒されようぞ？

どうも仕方がなかつた。彼は明日を待たなければならなかつた。此六時間の損失は、少くも十二時間の損失を蒙らしめた。

彼は隘路の入口を開いて、仕事を進めることさへできなかつた。彼の水切りは次の潮時までは必要であつた。

彼は餘儀なく憩ふた。腕を組むだけが、彼が此岩に来て以來、未だ一度もしなかつた只一つの事であつた。

彼はこの餘儀ない不活動にぶり／＼して、殆ど、それが自身の咎でもあつたものゝやうに腹を立てた。彼は想つた『デルウシエツトは私のことを何と言ふだらう、若しあの女が斯麼に何にもしないところを見たならば？』と。

併し此間に彼の力を養つて置くことは不利益ではなかつた。

單槽船は今彼の自由に任かされた。彼はその夜をその中に明かすことに決心した。

彼はその羊皮を取りにモ一度大ヅウブルの上に登り、又降り、二つ三つ嫌が笠や、Chataignes de merを喰ひ、ひどく渴いたので、空になりかけた罐の水を二口三口飲んで、羊皮にくるまつた。その毛は氣持がよくて、彼は番犬のやうに機關の傍に横になり、赤い帽子を目深かに被つて、眠つた。

彼はぐつすと眠込んだ。それは人が大事業を爲し遂げた後に享受する眠りであつた。

第十一章 海の戦ひ

眞夜中、彼は突然目を醒ました、そして發條のはねかへすやうに揺すぶられた。

彼は眼を開いた。

ズウブル岩は彼の頭上高く聳えて、恰も白熱に煌く燃えさしのやうに照らされてゐた。岩の黒い全傾斜面には火事の反射のやうな光りがあつた。

何處から此火は來たのだらう？

それは水から來たのだ。

海の光景は異常であつた。

水は燃えるやうに見えた。眼の及ぶ限り、岩の間、岩の向ふ、海は焰を以て流れた。焰は赤くはなかつた。それは噴火孔の活きた火や、又は大熔爐の火とは何等共通のところがなかつた。火花も、ちらめきも、紫の縁も、音もなかつた。蒼白い長い尾が、水の上に屍體を包む布のやうに引きはえた。打ち震へるかゞやきは水の上に擴がつた。それは火事そのものではなく、寧ろ大火の幽霊であつた。それは或る程度に於て、石墳の内側を照らす、此の世のものならぬ焰のかゞやき、——燃える暗であつた。

朦りと、宏大で、廣く浸潤してゐるものは、その冷たい焰の薪であつた。それは盲目から發する妙なイルミネーションであつた。陰でさへもその鬼火の一部を形造つた。

海の水夫共は、此航海者に警戒を傳ふる奇妙な燐光をよく知つてゐる。それはイスニイ附近の大Vに於けるより以上に驚くべきものが何處にもない。

此光りで見れば、周囲の事物はその眞實を失ふ。幽靈のかゞやきは恰も透明なやうである。岩は單に輪廓となり、鉛網は白熱せられた鉄棒となり、水にある漁夫の網は、火の織物に見え、浪の上に出た櫂の半分を象牙の如く黒く、その餘は海中にあつて、銀の如く光る。水からあけた櫂の刃からの雫は、海上に星の雨を降らす。舟はその後ろに慧星の尾のやうな痕を残す。濡つて、光る水夫は焰の中

の人のやうに見える。若し諸君が水中に手を差し入れるならば、諸君はそれを焔に包まして引きあげるだらう。焔は死んでゐて、感じを與へない。諸君の腕は燃えさしになる。諸君は海中物の形が、浪の下にころがるのを、液體の火の中にあるが如く見る。泡がまたよく、魚は火の舌、或は蒼白い底に動く電光の斷片である。

此光明の反映は、單檣船に居たギリアットの閉ざした臉の上を通過したのだつた。是が彼の眼をさましたのであつた。

彼が醒めたのは時機を得てゐた。

退潮は終つて、水は再びのほらうとしてゐた。彼が眠つた間に脱け出した煙筒は、再びその上の穴へ入らうとしかけてゐた。

それはそろ／＼と高まつた。

モウ一吹あがれば、檣は又もや破船の中にはまり込むのであつた。一吹の高まりは一時口の潮に相等した。だから若し彼がその一時の脱出を自分の手のとよくうちに利用せんとするならば、彼はなほあと半時間の餘裕をもつてゐた。

彼は跳ね起きた。

彼の狀態は差迫つてはゐるたが、彼は數分間黙考、沈思して、浪の燐光を見てゐた。

ギリアットは海をその一切の形相に於て知つてゐた。海はそのあらゆる術策を弄し、又屢々彼はその恐怖から苦められたけれども、彼は久しく海の仲間であつた。我々が洋と稱ふ神祕の實在は、その

秘めたる思想に於て、彼が測り知ることの出来ないことも一つも持つてゐなかつた。觀察、冥想、孤獨が彼を日和見、即ち日和見の賢者となした。

ギリアットは頂索に急ぎ行いて、若干かのケーブルを延ばした。それから最早錨に繋がれずして、彼は單檣船のホート鉤をとり、舟を隘路の入口へ向け、ヂューランド號から二三尋、浪除けに近く押し出した。十分足らずのうち、單檣船は破船の下から退いた。最早煙筒が艮にとらへられる危険がなかつた。潮は今勝手に上るがよい。

併しギリアットの様子は今出發しようといふやうではなかつた。

彼はモ一度海の上の光りを眺め、考へ込んで立つてゐた。併し彼の思ひは出發についてとはなかつた。彼は今モ一度どうして單檣船を繋ぐか、隘路の出口に近くではあつても、以前よりも、どうして一層しつかりと繋ぐかと思つてゐた。

此時まで彼は只單檣船の二條の錨を用ゐたきりで、彼が見付けて置いたヂューランド號の小錨を暗礁の間に用ゐてはゐなかつた。此錨は、萬一の用意に、單檣船の片隅に、大綱やケーブルなど、皆曳むられぬやうに大きな節を前以て結んだものと一緒に置いてあつた。彼は今や此第三の錨を卸し、ケーブルをケーブルに結び付け、その一端を錨の環に通し、他端を單檣船の錨捲きにつけた。斯處工合にして、彼は一種の三角形、三重投錨をやつた。二つ錨よりも遙に丈夫である。是は皆きつい心配と幾重にも用心とをもつてゐることをあらはした。水夫は此操作に於て、舟が風下に流される惧があるとき、荒天繫泊法と似通ふ或るものを發見したであらう。

彼が視察してゐた、又それにモ一度眼をつけた燐光は、凄かつたが、同時に用に立つた。併しそれがなかつたなら、彼はすつかり眠りこけて、夜から瞞着せられたのだつたらう。海上の奇現象が彼を呼び醒し、彼の身邊のものをみせた。

岩々の間にそれが放つた光りは、眞實、氣味が悪るかつた。けれども不穩にそれがギリアットには見えただけでも、それは彼の位置の危険なことを彼に示した。そして單橋船を曳き出す操作に便宜を與へた。今後は彼が帆をあけられるときはいつでも、船はその積荷の機關を以て、自由に出来ることになつた。

けれども出發といふ考へは、彼の心には未だ先のことであつた。單橋船はその新位置につながれたので、彼は倉庫の洞穴に蓄へ置いた一番強い鎖を捜しに行き、それを二つのヅウブル岩に打ち込んだ釘につけて、此鎖を以て内から、角材や板の胸壁を防禦した。之は既に外からは十文字に鎖で保護されてゐるものであつた。隘路の入口を開くどころか、彼は却てその閉鎖を完全なものにした。

燐光はなほも彼を照した、併しそれは減じて行つた。併し夜が明け始めた。突然彼は手をやめて、耳を欻てた。

第十二章 賢者へ一言

かすかに、判然しない音が、何處か遠くから彼の耳に達したやうだつた。或る場合に、深海は鳴動する。

彼はも一度耳を欻てた。遠鳴りは又始まつた。ギリアットは彼に親しい何物かを認めた人のやうに頷いた。

數分の後、彼は、その時まで閉ざしてなかつた、東に向つた入口の、岩の間にある小路の他の端へ出て、重たい金槌を揮つて、彼がヅウブルの咽喉になした如く、「人岩」近くの咽喉壁に、巨きな釘を打ち込んでゐた。

此岩々の罅隙は、その殆ど總ては解の蕊である材木で充分に手配や設備がしてあつた。此側の岩は餘計に壊れて、澤山の罅隙があつたので、彼は兩箇のヅウブル岩の根元よりも、もつと多くの釘を打ち込むことができた。

突然、何か大きな呼吸がその上を吹き過ぎでもしたかの如く、水上の煌きは消え失せた。

釘が打ち込まれると、ギリアットは梁材や索やそれから、鎖をその場所に曳すつていつた。そして仕事から眼を放さず、或は一寸の油断もしないで、彼は「人岩」の隘路の内に、水平に固定して、ケーブルで結へた梁材を以て、今日の科學で水切りと稱する柵を拵へた。

例せば、ゲルンセイのロッケーヌ或は佛蘭西のブウル・ドオなどで、岩に立てた二三の柱の效果を見た人々は、此簡単な装置の力を悟るだらう。斯る水切りは佛蘭西で、英國でロ目として知られるものと一緒にしたのである。水切りは嵐に對する、築城術の逆茂木である。人はその勢力を分割する此原理を利用して、海と抗争することが出来るだけである。

そのうちにもう太陽が昇つてゐた、そして明るく輝つた。空は澄み、海は風いでゐた。

ギリアットはその仕事を急いだ。彼も又沈着いてゐた、けれども彼が急ぐのに心配があつた。彼は岩からを跨いで歩いた、そして或は添木、或は船底板を手荒く引ずつて戻つた。此準備の效能は今や明かになつた。彼が嘗て豫期しなかつた危険に遭遇せんとしてゐる事は明かであつた。

丈夫な鐵棒は梁材を動かす挺子の用をした。仕事は構築よりも寧ろ急速な成長であつた程速に爲された。工兵の架橋を見たことのない人には、此速さを想像することは難しい。

東の咽喉は西のものより一層狭かつた。岩と岩との間は僅に六呎あるに過ぎなかつた。此口の狭さは一つの助けとなつた。その閉ぢ、防禦すべき隙間は非常に小さいので、器械は一層丈夫で、又一層簡易になされやう。だから只横木だけで、縦の木は必要なかつた。

水切りの最初の横木が取付られると、ギリアットはその上に乗つて、モ一度聽いた。

・ 咳きは明瞭となつた。

彼は工事を續けた。彼は、三つの滑車に通した索により梁材の杵に結び付けた、ヂューランド號の二つの吊錨架で支えられた。彼は全體を鎖でしつかりと繋ぎとめた。

構築物は大きな簀子に似てゐた小枝の代りに梁木、簀櫃の代りに鎖があつただけの相違だ。それは造り付けられたやうに編まれてゐた。

彼は結び目を増し、必要なところには釘を打ち足した。

未だ仕事をしてゐるうちに、彼はビスケットを喰つた。彼は渴を覺えたが、モウ清水がなかつたの

で、飲むことが出来なかつた。彼はその前夜の夕餉に、その貯水の罐を明けてしまつたのだ。

彼はその後なほ四五本の材木を附け足した。それからモ一度柵に昇つて、聽いた。

地平線からの音は歇んだ。一切が靜かであつた。

海は平らで、靜かであつた。所謂「鏡」池「油の如く」「仔羊」などの形容にふさはしい状態であつた。

サファイアやエメラルドの色が互に競争した。何れも完全であつた。天に雲なく、海に浪頭もなかつた。此最中四月の太陽が堂々として昇つた。是以上の美しい日を想像することは出来なかつた。

地平線の縁に、一群の渡鳥が空に對して、一つの長く、黒い線を曳いた。それは驚かされたやうに、迅速に飛んで行つた。

ギリアットは水切りを起す仕事に又取りかゝつた。

彼はそれを及ぶ限り高く立てた。崖個岩の灣曲がゆるす限り高く。

正午頃、太陽はその平常よりも、もつと暖かさを與へるやうであつた。彼が築きあげた丈夫な杵の上に立つて、彼は再び廣い海面を見渡した。

海は靜穩以上であつた。それは停滯してゐた。一つの帆も見えず、空は到る處澄んでゐた。けれども青から、それは白になつた。白さは異様であつた。西に當り、地平線上、いやな色の小さな點が一つあつた。その點は同じ場所に止まつてゐるが、段々擴がつた。水切りの近くに浪はさわめいた、けれども極く柔かに。

ギリアットは水切を造り上げてしまつて、いふことをした。
大嵐が近寄つて來た。
原素は戰鬪を開く決心をきめた。

第三編 争闘

第一章 極端は合ふ

彼岸の末程恐いものはない。

海の様子は、我々が洋風の到來とも稱ふべきことから起る。一種異様な現象を呈する。

四季のうち、とりわけ少しも期待してゐない折柄、海が時として奇妙に穩かになる望望期間に於て、彼の廣大にして、不斷の運動は休止し、一脈の唾氣と倦怠とが海上に擴がり、疲れて、休み度がつてゐるやうに見えることがある。あらゆる旗旒が、大は軍艦旗より、小は漁船の吹き流しに至るまで、櫓にダラリと垂れ下る。皇旗旒も天皇旗も一様に睡る。

突然是等の旗旒が、穩かにはためき出す。

若し偶々そこに雲があるならば、*cumulo* (卷雲) の起るを認める時が、又若し日が入りかけてゐるなら、地平線上に赤い色彩を見るとき、又若し夜であつて、月があるならば、その暈を注意して見るべきときが來たのである。

その時船長又は艦隊司令長官は、若し彼が此發明者の知れない嵐の標示器の一つをもつことになるとしたら、彼はその機械を注視し、若し雲が融けた砂糖のやうになるなら、南風を用心し、若し蕨のくきが、縦の樹のやうに、結晶して、昇華するならば、北風に用心するのである。その時には又、あはれ、愛蘭土やブルタニユーの漁夫は、ブルタニユーでは *menhir* 愛蘭土では *crnach* と稱ぶ、謎めいた、直立の石の上に、惡魔だか、羅馬人だか、彫つた日時計を見た後、その舟を機に曳き揚げるのである。そのうちにも天の海と晴明とは續く。日はかどやかに明けて、曙光は微笑む。昔の詩人や預言者を、敬虔な畏怖にうたれしめたのは之である。 *Solem quis dicere falsum audeat?* 人は大膽にも太陽の偽りならんかを疑ふ。

自然の祕法の黒い幻影は、周圍の事物の、不吉な朦朧によつて、人間の窺ふを禁じてある自然の最も恐ろしい、又悖戻な形相は深淵の顫動を目かくしすることである。

或る時間又、時には數日斯くして過ぎる。水先案内はその遠眼鏡をそここゝに向ける。年寄つた海員の顔は、絶えず變化を窺ふ苛々しさに、いつも嚴い顔つきをしてゐる。

突然大きな混がらがつた吐きが聞かれた。一種の神祕な對話が空中に起る。
異常なものは一つも見えない。

廣い海面は穩かである。

併し響しい音は増す。對話は一層よく聞きとれる。

何物かと地平線の向ふにある——何か恐ろしいものが。それは風だ。

風——否寧ろチタン國の住民で、我々が強風と稱ぶ、暗黒界の賤民だ。

印度ではその奴をマルウブ、猶太ではウビム、希臘ではアクイローネスと云つてゐる。それは野蠻な、眼に見えぬ翼の生えた、「無限」の動物である。その朔風は地球上を疾過するのである。

第二章 大洋の風

何處から彼等は来るか？ 測り知られぬ深みから。彼等の廣い翅は海灣の廣闊、沙漠の寂寞たる面積を求めぬ。大西洋、大平洋——是等の廣大な青い平原は、彼等の樂みである。彼等は群を爲して其處へ急ぐ。ヘーヂ中佐は海上遙に出で、七つの龍卷きを一時に認めた。彼等は、荒らく恐るべき勢を以て其處でとびまはる。常に終りつゝも、永久の于滿つるのが彼等の業である。彼等が力の程度、彼等が意志の範圍を誰も知らぬ。彼等は深淵のスフィンクスである。やがては彼等のエチボス王である。あの暗く、永久に動く廣つ場で、彼等は雲の顔をして現らはれる。彼の廣い分散、海の水平線上に於て、彼等の蒼白い輪廓を感じたものは、制御し難き力の眼前にあるを覺える。人間の智恵の近寄ることが、彼等を不安ならしめ、彼等はそれに反抗したと、想像もせられる。人の心は打ち克ち難きものであるが、元素は人をくるめてしまふ。彼は到る處にある。又誰も束縛することのできない一つの力に對して、何にもすることが出来ない。柔かい息は強風となり、棍棒の勢を以て撲りつけ、聽て又穩かになる。風は恐ろしい突撃を以て襲ひ、無と消えて彼等自身を防禦する。彼等に立ち向ふ人は、手段を盡くさねばならぬ。彼等が千變萬化の戰術、彼等が迅速に倍加した打撃が混亂する。彼等は執拗

で、且つ手にとらへ難い。誰か彼等を屈し得やうぞ？ アルゴ丸の船首は、F・ナの森の櫂で造つてあつた。その樹皮の神祕な水先案内者は彼等に語ると、彼等は水先の女神を侮辱した。彼等攻撃する程屢々飛んだ。コロムブスはビンタ號に向つて彼等が押寄せせるのを見て、船首樓に上り聖約翰福音書の最初の句を以て彼等に話しかけた。シユルエフは彼等を挑んだ。『此處に惡黨奴らが來やがる』と、彼はいつも言つた。ナビエは彼等の砲彈を以つて應酬した。彼等は渾沌の命令者となつた。

渾沌は彼等のもので彼等は神祕な復讐を爲す。風の巢窟は、獅子のそれよりも一層怪奇である。吼えたける暴風の、かの晦く、物凄塊りを掃きすぐるところ、その奥底に幾何の死屍が横はることぞや！ 風は何處に彼等が行くとも聞かれるのである、併し彼等は何者にも耳を傾けない。何者も彼等がその白い浪頭を誰の上に投げかけるかを知らぬ。何たる悍猛であらう、彼等が破船の上を飛翔する様は！ 時として恰も彼等は彼等の冒瀆な泡の飛沫を天の面上に吐きかけるが如くに見えて——。如何に彼等が怒らせ、挑むことぞ。攝理それ自らを！ 彼等は不可知界の壓制者である。 *Laogli spaventosi* (恐ろしい場所の意味) と、ヴェネシヤ人が言ふ。

空間の打震へる野は彼等の猛烈な攻撃に屈服する。言ひ難き物がその荒れた土地に起る。或る騎馬人が暗黒のうちに入り入れる。空氣は森の音に満ちてゐる。何にも見えないが、馬の蹄の音が聞える。眞晝中突然夜の闇がくる。旋風通過する。或は夜中なら突然眞晝のやうに明るくなる。極光が天にある。旋風は反對のしかたで、又醜惡なダンスのやうに通過する——水の上を亂踏する。重荷を負はされた雲が開いて、地に墜ちる。他の雲が赤い光りの閃きや、咆哮を以て滿され、次に氣味悪く眉を寄せ

る。彼等の電光が空になると、彼等は燃え盡した火に過ぎない。閉ぢ込められた雨は溶けて霧となる。向ふの海は火の海となつて、その中に雨が降る。焰が浪から發するやうに見える。驟雨の下、海の白光は、驚くべき遠距離に反映する。様々な塊型が、奇怪な形に變つていく。途方もない渦巻きが空に奇妙な穴をこさへる。水蒸氣は旋廻し、浪はまひ、眼のくらんだナイアド等はころがる。莫として、穩かな海は、その運動に排拒しられない。あらゆる物が鉛色だ。絶望の叫びの如き響音が海と空との蒼白い領域から來る。

陰と闇の大きな刈り束が、大空遙かに打ち震へて、取り入れられる。音が轟しくなる、丁度浪が白浪となるやうに。層の混亂した塊りであつた地平線は、断えず動揺して、打ち續き、低調で呟く。奇妙に、又突然、單調が破れる。寒い空氣が迸出して、暖かい風が出てくる。海の悸きは心配の期待、苦悶及び深い恐怖を豫表する。突然颶風が、海に酔ふた野獸の如く襲ふてくる——素敵な息だ！海は見えぬその口の邊までのほり、水の堤が出来て、うねりが増し、龍卷が現はれる。古代人の所謂るブレストルで、上が鐘乳石、下が石筍、旋廻して、二つに疊み込まれた圓錐丘、他に上に置かれた平衡點、二箇の山岳の抱擁——上る泡の山と、下る水蒸氣の山——雲と浪の恐ろしい交接。聖書の中の圓柱のやうに、龍卷は晝は暗く、夜は明るい。その前では雷も沈黙し、おちけてゐるやうだ。

是等の靜寂の大きな混亂は、その全音階をもつ、——恐ろしい漸強だ。^{クレッシェンド}強風、疾風、烈風、暴風。颶風——風の緒琴の七つの絃、蒼穹の七つの音階がある。天は明かな場所、海は廣くして圓い場所。併し息が一つかよへば、彼等は消えて、總て怒りと、あらびの混亂である。

此不愛想な扱ひをする領域は斯の如くである。

風は突進し、飛び、掃ひ落し、小さくなつて消え、又始まり、飛びまはり、嘯き、怒鳴り、微笑する。彼等は氣がちがつてゐる、狡猾で、不檢束で、或は溢れ立つ浪の上に安らかに眠る。彼等の咆哮は彼等だけの和聲をもつ。彼は天全體を則らかに響かせる。彼等は喇叭の如く空を吹く。彼等はクラリオン、ホルン、ビューグル、信號喇叭の取りませに調子を以て吹く——プロメトイスの亂奏の一種である。

古代牧羊神パンの音楽が斯うであつた。彼等の和聲は恐ろしかつた。彼等は暗黒に大きな喜びをもつてゐた。彼等は大きな舟を進め、追ひ散らした。晝夜四季、熱帯から極まで、少しの休戦がない、雲や浪の纏れた藪を通して、彼等の不吉な喇叭を鳴らしながら、彼等は猛惡に船艦を追ひ撃つて、難破はその獵犬の群をもつてゐた。そしてその犬を岩や浪に吼え付かして、娛みとした。彼等は雲を一緒に寄せ蒐め、又それをわけた。彼等は百萬の手を以てする如く、廣大にして、しなやかな水を握ぬ、又かたづくつた。

水は壓迫し難いが故に、しなやかだ。それは努力を用ゐずして迂り去る。一方へつれて行かれると、他の方から遁けてゆく。水が浪となるのは斯うしてある。又濤は彼等が自由の證である。

第三章 ギリアットが聞いた音の説明

風が大舉して世界を襲ふのは彼岸である。此時季には熱帯と極地な均衡が秤のやうに揺れ動く、そ

して廣大な氣流が、一方の半球に注いで、他方の半球からは退く。天秤宮と、寶瓶宮のあらはれるのが此現象を示すのである。

それが暴風の時節であらう。

海は沈黙して彼等の來るのを待ち受ける。

時として空は病にかゝつたやうに見える。その顔は蒼白い。厚く、暗い柏紗が、それを晦くする。航海者は雲の怒つた顔を、不安さうに看る。

けれども彼等が最も恐れるのは、落着いて満足したやうなその様子である。彼岸に空が微笑するときなら、嵐がその犠牲を弄んでゐるのだ。アムステルダムの「泣き女塔」に、遠い地平線を見る妻や母達で滿されるのは、空がこんな模様のときである。

春或は秋の嵐が遅れるときには、彼等は力を合せる——一層破壊を確實にする爲め、その怒りを貯へるのだ。永いこと吹くのを躊躇つた嵐に氣をつけることだ！「海はよく支拂ひをする」と、言つたのはアングーだ。

猶豫が異常に永引くときには、海は、一層靜かになつて、その忍耐をあらはす。けれども磁力の濃度は、海の怒氣ともいふべきものによつて示される。火が浪から出る。電氣の空氣と、隣の水が出る。水夫は奇妙な疲勞を感じる。斯る時は鐵製の船は殊更に危険だ。彼等の船體は金磁針に偏差を起して、彼等を破滅に導く。太平洋通ひの蒸汽船アイオーワ號は此爲めに沈没した。

海の事に精しい人々にとつては、此際に於けるその光景は變なことを知つてゐる。颶風の近づくの

が望ましくもあれば、恐いやうでもある。よりや自然によつて強く促されるにもせよ、或る一致が恐怖と冀望との此奇妙な結合にともなはられる。牡獅子はその一番優しい氣分で牡獅子から飛び出す。斯の如く海はその情火に於て、嵐との結婚の近寄つたことに顛へ、悸く。婚禮は用意しられてある。古代の皇帝婚禮のやうに、彼等は犠牲を以て祝はれる。祝儀は厄災を以て先觸れされる。

兎角するうち、彼方の深淵から、大きな、打開けた海から、近寄り難き緯度から、水の荒野の凄惨な地平線から、自由な大海の最極端から、風が吹き卸してくる。

聴け、是こそは名高い彼岸嵐だ。

嵐は害を爲す。古代の神話は、此朦朧たる人格を、自然、遍在せる自然と混同してゐた。エーオロスがボレアスに對して陰謀をたくらんだ。元素と元素との同盟は必要であつた。衝動が波に、雲に、流れに與へられねばならぬ。夜は介添だ、用ゐられねばならぬ。羅針は誤られ、糧火は消され、燈臺の洋燈は覆ひをされ、星は隠くさねばならぬのだ。海はその援助を與へねばならぬのだ。各嵐は眩きによつて先立たれる。地平線の後ろに、颶風の間を聳く先觸がある。

海の恐ろしい沈黙のうち、暗の中に、遠くから聞かれる音がある。

ギリアットが氣付いたのは此意味のある囁きであつた。水上の燐光が第一の警戒、此囁きが第二の警戒であつた。

若し惡魔の大群があるものとすれば、それは確に風以外の何者でもない。

風は複合であるが、空氣は單一である。

それだから嵐は總て混合してゐる——空氣の統一から起る原則である。天の全淵は嵐に加擔する、洋全體も。その軍隊の總計は戦ひに出陣する浪は洋の灣で、強風は大風の灣である。嵐との闘争は、海と空との全勢力に對する闘争である。

「海は到る處から來て、到る處にある」と、言つたのは、クラニイの小居の憂鬱な星學者、海軍々人の以の權威たるメツシアであつた。彼は禁錮された風は、内海に於てすらもあると信じなかつた。彼に對しては、地中海の風はなかつた、彼は地上を吹きまはつてゐるものとして認めた。彼は、或る日或る時刻に於て、コンスタン湖のフョーン風——タルクレシヤスの古代のファヴォニス——は巴里の地上を通過して來たことを確めた。又他の日にはそれがアドリアチックを、又他の日は、旋風ノツスーはそれはシクラードスのまはりに局限せられてゐると想はれる——であることを確めた。彼のその風の流れを表示した。彼は、コルシカ島と、バレアリック群島との間を周廻するオータンが、その限界から免れ得べしとは信じなかつた。彼は、熊の如くその巢窟中に禁錮せられた風の理論を容許しなかつた。風は事實、地軸の兩極を示す色の交錯に於ける電氣、赤道から濕氣を、兩極から電流とを持つて赤道の水で飽知せられてゐるのである。風は遍在である。

それだからと云つて、風は各帯のうちでは動かぬ意味ではない。是等の連續的氣流の在存よりも巧みに按排されたものはない、そして空中船による航空術、希臘人が所謂「エーロスカフエース」は、他日風の此れを利用することに成功するであらう。汽流に規則的筋のあることは、争ひ難き事實

である。風の河川もあれば、風の小川もある、尤もその分岐は全く水とは反對であるけれども。何せかあれば空中では河川から流れ出すのは小川であり、大きな川に注ぎ入れる代りに、流れ出すのが小川であるからだ。だから集中の代りり分散がある。

風の統合した動作と、大氣の一致とは、此分散に基く。一分子の排拒を生ずる。空氣の擴大な體は、一つの動搖に従ふ。此連盟の深遠な原因に、我々は地球表面の不整を附け足さねばならん。地上の山岳は大氣をすき、風を捻り、その道より外づし、無限の放射に於て、逆流方向を決定する。

風の現象は、二箇の洋が互に衝突りあつてゐる波動だ。そして此は大な波動を以て、攀きつけるのだ。

不可分のものは決して別れ／＼の行動を爲すことは出来ない。海峡諸島は喜望峰の響を受ける。航海は到る處で、同じ怪物と闘ふ。海は一箇のヒドラである。浪は鱗の衣物を以てそれを覆ふ。大洋はツエートである。

その統一に無限の變化が基くのである。

第四章 Turba turbam

羅針盤によれば、風に三十二種ある、換言すれば三十二點——則ち方向——がある。併し此方向は無限に分割せられるその方向毎に分類せられるならば、風は無數である。その種類別に分てば、それは無限である。ホーマーでも彼等を算へ上げる仕事には尻込みしたうらう。

極流は熱帯流を遡へる。暑と寒と斯くして結び合ふ。震動によつて平均が破れ、風の波が起り、膨脹し、散亂し、猛烈な流となつて八方に崩壊する。強風の分散は地上、四つ隅に向つて、風の紊れ髪を際かす。

吹く風の總ては——ニューフオンドランドの大を吐き出す灣流の風、誰も嘗て雷の轟くを聞いたことのない、天空の音なき部分で吹く白露の風、深い皺のある嘴をもつた大きなウミスバメ *Alca impe-*
nae の飛ぶノゾスコシャの風、獨木舟や戎克船を破壊するモザムビクの風、日本人が銅羅を鳴らして驅ふ電氣風、テーブル山と、その自由を得る悪魔峰との間を吹く阿弗利加風、貿易風の上を越しつ、拋物線を描き、線の頂上は常に西に向ふ赤道風、噴火口から逆出する、恐るべき熱風、ブルウト風、不斷に北方に橄欖色を呈せしめるアワ火山に特有な奇風、土人がそれに對して所謂「颶風家屋」なるものを建築する爪哇センスウン、英人の藪風と稱ふ技をさした北風、ホルスプウルに觀測せられたマラツカ海峽の歪みスワオール、智利ではバムベロー、アエノス・アイレスではレボホと稱ばれる強力な南西の風——それは巨鳥コソドルを海に吹きとばして、剣ぎ立ての牛皮を被り、仰向に臥て、足に弓を番へて、彼を窺ふ野蠻人の待伏せを免れしめる——シメリイに據れば、雲から雷霆を生ずる化學的の風、シャツフルのハルマツタン風、永却の氷山に自らを輓く北極の雪追風、亞細亞の大市場が開かれるニチニ・ノヴゴロドの木の小舎で出來た三角形市街を荒らしに、大陸を吹き越して行くベンガル灣の風、巨きな浪と浪と森を騒がすコルデルラスの風、巨きなユウカリ樹の枝又に隠れて、蜜蜂取りが、野生蜂の巢を搜がす、オーストラリア多島海、シロツコ、ミストラル、ウラガン、乾風、洪

水風、ゼノアの市街に、ブラーシルの平原からの埃り撒き散らす熱嵐、それは一日の廻轉に従ひもすれば、反抗もする、又それについてエルレラが *Malo vient l'orna contra el sol* (太陽に反對して悪し、廻る) と言つた風、一對になつて、共謀して悪事を企み、一方が、他の仕事を妨けたりして吹きあるく風、ヴェラグワの岸でコロムブスを襲ひ、千五百二十年十月二十一日から、十一月二十八日まで四十日間、マゼランが大太平洋に入るのを延引せしめ、始ど計畫を破つてしまつた昔の風、アルマダ艦隊の櫓を折り、フィリップ二世を閉口させた風などがある。他にも名をあけると果もなくある。例へば蝗や蛙を雨と降らし、洋を越えて生き物の雲をその前に逐ふた雲の如き、所謂風跳びと稱へ、その作用は海上の舟を破壊するにある風、一吹きに艤裝の荷を抛り出し、横仕のまりに舟の過行を續けさせる風、卷層雲を築く風、卷層雲を一緒に蒐める風、雨を以てふくらんだ暗く、強い風、霧の風、その接近はカラブリヤの温泉や硫黄泉を沸騰せしめる熱病風、カブ・フェルロの皺を徨ふ阿弗利加風の毛皮をピカ／＼光らしてみせる風、トリゴノセフワルの舌のやうに恐ろしい救をさした電光の如く、雲から顛へてくる風、黒い雲を持つてくる旋風、こんなのが風の大军である。

ツウブル岩は、ギリアットが浪除けを拱へてゐる時、遠くに嵐の踏ならず足音を聞いた。

我々が言つた如く、風は總ての風を包括する。

此軍務は急速に彼に迫る、一方にはレギオン(千人隊)があり、他の方にはギリアットが居る。

第五章 ギリアットのあれか是れか

神祕な軍務は彼等の時機をよく見計つた。機會、若し機會が存在するならば、時として遙かに遠方を見る。

單槽船が「人岩」の灣に碇泊してゐた間は、又機關が破船のうちに閉じ込められてゐた間は、ギリアットの位置は牢平としてゐた。單槽船は安全であつたし、機關は庇はれてゐた。デューランド號の船體を撻りと押へてゐたヅウブル岩は、船を徐々と破壊する宣告を下してはゐたけれど不意の事件に對してはそれを保護してゐた。兎に角、一つの手段だけは彼を残されてあつたのだ。若し機關が失はれても、ギリアットは怪我しないで済んだのだ。彼は未だ之れによつて免れる單槽船を持つてゐたのだ。

けれども單槽船が近寄られた錨地から除かれる迄待つて、ヅウブル岩の隘路に定着するのを許し、單槽船が恰も岩に絡まつたやうになるまで見届け、彼が救助工事を成就して、機關を移動して、遂に船に積むのを許し、一人の力で、全體を彼の小舟に積み乗せる、その驚くべき建設に何の損害をも與へず、事實彼が企ての成功をそれ程までに黙認することは——是は元素が彼に對して係けて置いた良であつた。今や始めて、彼は海がそんなに永い間考へてゐた術策の、そのあらゆる陰險な特質を悟り始めた。

機關、單槽船、及びその主人等今は皆隘路の中に居た。彼等は單に一點を爲すに過ぎなかつた。一撃それだけで單槽船は岩に當つて味塵に破壊して、機關は失はれ、ギリアットは溺死したやう。状態は危急以上であつた。

雲に潜むと人が想像したスフィンクスは、デレムマを以て彼を嘲けるやうに思はれた。

『行け、或は留まれ』

行くのは狂氣の沙汰、留まるは恐ろしかつた。

第六章 闘 争

ギリアットは大ヅウブルの頂に登つた。

其處から彼は地平線を見渡すことできた。

西の方は物凄かつた。雲の壁がそれに擴がつた、一方から他方へかけて、廣い海面を塞いだ、そして地平線からそろ／＼と天心に向つて登つていつた。此直線な、鉛直の壁は、その構造に罅隙がなく、裂け目がなく、矩形につくられ、鉛線で測られたやうであつた。それは花崗石に似た雲であつた。その側面は南端に於て全然鉛直で北に向つて、鐵板を卷いたやうに稍々曲り、斜坡の表面のやうに峻しく、迂りやすいやうに見えた。暗い壁は大きくなつていつた。けれどもその長押しは、濃くなる暗に殆ど辨別し難い地平線と、平行せんとして、一瞬も歇まなかつた。黙々として、皆一緒に、空中の城樓は昇つた。一つの波も、一つの皺も、一つの突起もその形を變じ、その位置を動かさなかつた。此動作の不動の威嚴があつた。奇妙に、病みほうけた透明の中央に、蒼白い太陽は、此默示録の輪廓を照らし出した。既に雲の岸が地獄の恐らしい鉤爪の如く、分裂して、空の一半を消し去つた。それは天と地との間に一つの暗い山の聳え起つたのであつた。

それは白晝に突然夜が入つたのであつた。

空には、その塊り又塊りから、窟の口から来るやうな熱が来た。空は青から白になつてゐたが、今は白から石鹽石の灰色になつた。下なる海は鉛色をして、どんより濁つてゐた。そよとの風も、少しの浪も、こそとの音もしなかつた。眼の及ぶ限りは荒涼たる洋であつた。何の方面にも帆は見えなかつた。鳥は姿を消した。或る恐ろしい陰謀が企まれてゐるやうだつた。

雲の壁は眼に見えて大きくなつた。

水蒸汽の此動く山は、ヅウブル岩に近寄りつゝあつた、戦雲とでもいふべき雲の一つであつた。物凄姿だ。その晦い、堆積した塊型から、或る變な、狐鼠々々した目付で、何者か此方を見てゐるやうであつた。

近寄るのは恐ろしかつた。

ギリアットはつく／＼とそれを眺めて、獨言をいつた。

『俺はひどく渴いてゐるが、地前は俺に澤山呑むものを呉れるのだ』

彼は其處に數分の間、身動きもせず。眼を雲の峰に据え、恰も嵐を胸算用でもしてゐるやうにして立つてゐた。

彼のガレリエンヌ(水夫頭布)は戎衣の衣兜に入つてゐた。彼はそれを取り出して、頭に被つた。それから彼は、長い間彼の寢室の用を爲した洞穴から、彼が其處に貯えて置いた二三の物を持ち出した。彼はその外套を着、恰も戦ひの間際に鎧を着ける騎士のやうに、防水衣に身を束めた。彼は靴を持た

なかつた。けれども彼の露き出しの足は岩の剛さに馴れてしまつた。

嵐に對する此準備が整ふと彼女はその水切りを瞰下し、急いで節のついた索をとり、ヅウブル岩の上から降り、下の岩々を踏み渡り、その倉庫になつた洞穴へと急いだ。數分の後、彼は仕事に取りかゝつてゐた。大きな無言の雲は彼が打つ槌の響を聞いたやうに。釘、綱梁材の未だ残つたもので彼は東の入口に、モーへの棒を拵へた。それを彼は他棒のから十乃至十二呎離れたところに嵌め込むことを成功した。

沈黙はまだ深かつた。岩々の罅隙に生えた草の葉はそよともしなかつた。

太陽は突然消え失せた。ギリアットは空を見上げた。

湧き立つ雲が丁度それに届いた。それは混合した蒼白な反映にあとを任かせて、日が消し去られたやうであつた。

雲の巨大な壁はその面目を一變した。それは天心に達して灣曲し、そこから水平に、天の餘りへ擴がつた。それは今その様にな状態をもつてゐた。嵐の形成は、斬濠壁に於ける地層の如く認められた。雨の層と、霞の床とを區別することが出来た。電光はなかつたが、恐ろしい煌きが浸潤してゐた。戦慄する意は光に惹かれるものであるから。嵐の仄かな呼吸は聞きとれた。沈黙はほのかな脈搏によつて破れた。ギリアットも亦押し黙つて、雲の形ない塊りを造るのや、頭上に群を爲す水蒸汽の巨大な塊りに目をつけてゐた。地平線上には、灰色をした霧の帯が覆ふて、伸びていつた。天心には鉛色したモー一つの帯があつた。上方雲の蒼白く、ぎざ／＼した断片が、大きな塊りから、下の霧に垂れ下つ

だ。背景をつくつた雲の堆積は、蒼醒め、弛緩して、暗かつた。薄い、白々としてた横雪が、何處からかしら来て、高く、暗い壁を北と南とに斜に断ちきつた。此雲の兩端の一つは、海の表面に長々と引きはえた。それが浪に觸れる一端に於て、濃厚な、赤い水蒸気が、暗の只中に見受けられた。その下に、より小さな雲が、全く黒く、且つ非常に低く、戸惑ひしたが、或は空氣の逆流に動かされたかのやうに飛んでゐた。向ふの巨大な雲は、あらゆる點から直に増加し、日蝕を暗くし、その黒い屍衣を續けて擴げた。ギリアットの背後に當る東に於ては、天に只一つ明かな門があつたが、それは見る／＼うちに閉ざされていつた。風が立つたといふ感じは少しもなしに、綿毛のやうな灰色の微細なものが群を爲して飛び過ぐるやうに思はれた。それは細かで、恰も雲の岸の向ふでは、素敵に巨きな鳥が羽毛を拂られてゐるやうだつた。固く、みつちりとした屋根が次第に出来て、それが地平線の縁で海に觸れ、それと共に暗に雜つた。見てゐる者は、何物が自分の方に向つて、着々と進んでくるやうな漠然たる感じがした。それは宏大な、重たい、氣味悪いものであつた。突然雷の素暗しい鳴音が空中に爆發した。

○ギリアット自身震動を感じた。雷は何かしら或る物が我々を夢に吃驚させるやうに、吃驚させる。その幻の領域の唯中で、粗い眞實が、その内に何か恐るべきものをもつてゐる。聽手の方では、彼は巨大の室に墜つる何物かを聞くと想像するだらう。一つも電光も響に伴はない。それは盲目の雷的であつた。沈黙は再び深かつた。戦士が彼等の陣を布くときの如く間歇があつた。聽て一つ宛大きな形のない閃きが、徐々と現はれた。是等の閃きには音が無かつた。各閃き毎に、あらゆる物が照し、出

された。雲の壁は今や屋根や弓門をもつた、巨大な洞穴であつた。形の大體はその中に歴々と知れてゐた。怪物のやうな頭が朦りと影をさした。岩々が伸び出したやうに見えた。樓を背負ふた象が一寸と見えて、消え去つた。眞々に、圓く、暗く、白い霧を乗せた水蒸汽の柱が一つ浪の下に、シュツ／＼と音を立て、煙を噴き出した、捲き込まれていく、巨きな汽船の形を眞似た。雲の敷布が巨大な旗の襞のやうにうね／＼と浪うつた。中央では、厚い眞紅な柩布の下に、濃い霧の中核が動かす、萎えて、電光にも貫かれず、凝んでゐた——嵐の胎内の醜惡な孕み子の一種だ。

突然ギリアットは彼の髪を動かす呼吸を感じた。大きな雨粒が二つ或は三つ、岩の上、彼のまはりにバラ／＼と墜ちた。すると二度目の雷鳴があつた。風は起つた。

暗の恐怖はその最高點に達した。一番目の雷鳴は海を震はし、二番目は雲の壁を頂きから根元まで、裂いて、罅は見えてゐた。閉ぢ込められてゐた洪水はその方へ突進した、裂け目は雨に満たされた瀾のやうになつた。

嵐の迸出は始まつた。

その瞬間は恐ろしかつた。

雨、風、電、雷、雲に向つて渦巻く浪、泡、噎れた音、ビューウと鳴る響が、まるで解き放された妖魔の如く一緒くたにまざつた。洋中の二つの危険な岩の間に、過度に積荷した舟上に閉ぢ込められた孤獨の人にとつて、是以上に恐ろしい危機は有りやうがなかつた。彼が打ち克つた潮の危険は、暴風の危険に比すれば何でもなかつた。

八方危険に圍まれて、ギリアットは最後の瞬間、絶頂をなす危難の前に於て、巧妙な作戦を行つた。彼は自分の運動の根據を敵地に獲得した。元來彼の敵、ツウブル岩は、その途方もない決闘では、彼の介添人となつた。その墳墓から、彼は一箇の要塞を築き上げた。彼は海の此巨大な廢趾に胸壁を以て圍まれてゐた。彼は閉塞されてはゐるが、よく防禦せられてゐた。彼は、言つてみれば、その背に壁を負ふて、颯風に面と對つて立つたのだつた。彼は浪の大道たる、彼の狭い海峡を防壁で防いだ。眞個是は取り得る唯一の道であつた。海は恰も他の專制者の如く、防塞の助けをかりて、道理を悟らせることができたやうに思はれた。單橋船は三方から圍はれてゐると思つてもよかつた。岩の内壁に、ピツタリと繋ぎとめられ、三箇の錨が投じられて、小舟は北に小ツウブル、南に大ツウブル岩によつて防壁せられた。此二つの恐しい急斜面は船を救ふよりも寧ろ壊すことに今までなれてゐたのだつたが、西の方では、小舟は、岩に釘付けにせられ、繋がれた木材の柱で保護しられてあつた。海の荒い上げ潮に對抗した、究竟な柵、岩の柱——二つのツウブル岩それ自らをもつた眞に之城門であつた。その方面からは何物をも恐れることはなかつた。危険のあつたのは、只東だけであつた。その方面には水切りの外には何の保護もなかつた。水切りは分割して、配布する一箇の器械に過ぎない。それは少くとも二つの柱を必要とする。ギリアットは單に一つを拵へるだけの暇だけをもつた。彼は第二を嵐の鼻尖で拵へなければならなかつた。

幸にして風は北西から吹いた。風はその攻撃がいつも敏速とは限らぬ。古代のガレールノである北西風は、ツウブル岩に對しては影響が少かつた。それは岩を側面から攻撃した。そして浪を入口のどれにも追ひ込まなかつた。それだから隘路に闖入る代りに、彼等は壁に突き當つた。嵌はへまな攻撃をやらかした。

併し風の流れは歪められ、又恐らくは何か不意の變化があつたやうに。若し第二の柱一築かれる以前に風が東に移れば、危険は大きくなるのであつた。隘路に海の突入は完全に行はれて、一切が空に歸するのであつたらう。

嵐の曠野は段々擴がつていつた。嵐の精髓はその打撃の迅速な連續である。それがその力だ、併し又その弱點である。その怒りは人の智慧に機會を與へる、そして人間はその弱點を見付け出して自分の防禦に利用する。併し何たる凄まじい強襲の下にあることぞ、息もつかせず、休みもない。無盡蔵の資源を斯く蕩盡するところに言ひ難き卑怯さがある。

廣い海原のあらゆる喧囂がツウブル岩の方へ押し寄せた。聲が暗の裡に聞えた。何で彼等があり得ようぞ？ 海の古くからの恐怖が其處にあつた。時としては、恰も何者か命令を發してゐるやうであつた。喧囂、震顛、次で海員の所謂「海の呼び聲」といふ雄壯な咆哮が聞えた。風の不確定な、飛びまはる渦巻きとが嘯いて、一方は浪を縮らせ、目に見えぬ運動家に抛られた巨人の投擲のやうに暗礁に對して、浪を抛りつけた。巨大な白浪が總ての岩の上を流れた。上は瀧津瀬、下は泡。それから咆哮は倍加した。断えず當つて碎けるその騒々しさを、人畜の起す如何なる騒々を以てしても、想ひ浮かしめることは出来ない。雲は砲撃し、霞はその一齊射撃を行ひ、白い浪は高く強襲した。或る處では海は動かぬやうに見え、他のところでは風が白浪の上を秒速二十米突で吹いた。眼の及ぶ限り海は